宮沢賢治「文語詩稿 一百篇」評釈六

信時 哲郎

48 柳沢野

①焼けのなだらを雲はせて、　　海鼠のにほひいちじるき。

②うれひて蒼き柏ゆゑ、　　馬は黒藻に飾らるゝ。

大意

溶岩がゴツゴツとしたなだらかな斜面に雲が走って、　ナマコのような匂いがひどく感じられた。

柏の木も蒼黒いため、　馬が付けている黒藻からも海が思い出される。

モチーフ

岩手山の登山口である柳沢近辺の風景を書いている。「海鼠のにほひ」を強く感じ取ったというのは、賢治の特異な感覚にもよろうが、上の句の「雲」、あるいは山の姿からの連想でもあろう。第二連に「馬は黒藻に飾らるゝ」とあるが、これも海を意識しての表現だろう。山の描写に海を持ってくるというのはずいぶん大胆な方法に思えるが、賢治は常識に縛られることなく感覚や連想を自由に取り入れることで、山をいっそう山らしく表現できると考えたのではないかと思う。

語注

柳沢野　岩手郡滝沢村（現・滝沢市）の地名・柳沢一帯の原野のこと。ここに岩手山の登り口があり、岩手山神社やホテルもあった。

焼けのなだら　岩手山の溶岩が残ったままの少し平らになった部分。

海鼠のにほひ　棘皮動物の一種であるナマコは特にニオイはせず、敢えて言えば、海の潮の匂いがする。しかし、海岸から四十キロほど内陸の花巻・盛岡で過ごすことの多かった賢治が、潮の匂いがプンプンするナマコに、あまりなじみがあったとは思えない。「雲はせて」から「なまこ雲」（層積雲）が導かれ、一瞬、海の匂いが感じられたといったところであろう。先行作品には「雲低く垂れ」とあるが、層積雲は地上から二千メートル程度の高さに出現し、下層雲に分類されるので、二〇三八ｍの岩手山は雲よりも高く聳えていたのだろう。島田隆輔（後掲Ａ、Ｂ）は、ここに「ヤマセがもたらした潮の匂い」を感じ取ろうとしているが、本稿ではその立場は取らない。

蒼き柏　ブナ科の落葉樹で、岩手山の山麓には多く自生していたという。

馬は黒藻に飾らるゝ　「五十篇」の「〔盆地に白く霧よどみ〕」にも「藻を装へる馬ひきて、　ひとびと木炭を積み出づる」というふうに登場する。柳田国男の『遠野物語』（柳田国男　明治四十三年六月）の序文に「馬は黠き海草を以て作りたる厚総を掛けたり。虻多き為なり。」とあることを奥田弘（「風と光」「賢治研究６」　宮沢賢治研究会　昭和四十五年十二月）が指摘して

いる。黒い海草で編んだ「厚総」を馬の首・肩・尻などに掛けると、馬が歩くたびに揺れるので、虻を追い払うことができた。

評釈

「歌稿〔B〕」1の下方余白に赤インクで書かれた下書稿㈠、その右方余白に書かれた下書稿㈡、黄罫（22０行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈢（タイトルは「裾野」、手入れ段階で「柳沢」。鉛筆で㊄）、定稿用紙に書かれた定稿の四種が現存。生前発表なし。

「歌稿〔B〕」の1は、「み裾野は雲低く垂れすゞらんの／白き花咲き　はなち駒あり。」というものだが、下書稿㈠では次のように改められている。

柳沢
こゆれば山の裾野にて
海鼠のにほひいちぢるく
馬は黒藻に飾られぬ

「歌稿〔B〕」の1は、「明治四十四年一月より」の章に含まれ、賢治が盛岡中学在学中の歌だということになるが、「「文語詩篇」ノート」の「1911」（明治四十四年）には、枠に囲まれて「岩手山ニ独リ登山ス／夕暮、かくこう鳥、空線、風、すゞらん、／柏林」」とあるが、おそらく文語化したことを示すのだろう。ただ、賢治は柳沢経由での岩手登山を何度もしているため、数回にわたる柳沢体験から作り上げたとすべきだろう。

下書稿㈡では、次のように改変される。

裾野に来れば
海鼠のにほひ　雲垂れて
すゞらん白きはな咲きて
馬は黒藻に飾られぬ

「裾野」と題された下書稿㈢では、定稿とほぼ同じ形に整えられる。

焼けのなだらを雲はせて
海鼠のにほひいちじるき
うれひて蒼き柏ゆゑ
馬は黒藻に掃はれつ

山道を歩いていると、草や木、土の匂いから、一瞬、その場所とは無関係なはずの匂いを感じることがある。「一百篇」の「〔沃度ノニホヒフルヒ来ス〕」でも、本来は漂うはずのないヨードの匂いが強く漂っているとして詩篇を書いているから、岩手山の裾野を歩いていて「海鼠のにほひ」がしてきたとしても不思議ではあるまい。まして賢治には共感覚的な素質があり、また数キロ先の花や果物の匂いを感じていたとも言われる感覚の持主であったともいうので、常人が感じることのできない匂いを感じたと書きつけた可能性は十分にある。

198　いざよひの／月はつめたきくだものの／匂をはなちあらはれにけり。

「歌稿〔B〕」のこの短歌の主題は、十六夜の月の光から冷たい果物の匂いを感じたという共感覚的な表現（体験）にあると思われるが、柳沢における海鼠の匂いもその類のものだろう。

『新校本全集』の索引を参照すると、なまこ、海鼠、の用例は案外に多い。「歌稿〔B〕」には次のような短歌が収録されている。

142　ふみ行かば／かなしみいかにふかからん／銀のなまこの／

天津雲原
341 大沢坂の峠は大木も見えわかで／西のなまこの雲にうかびぬ。
407 なまこ雲／ひとむらの星／西ぞらの微光より来る馬のあし音。
672 息吸へば／白きここちし／くもりぞら／よぼよぼ這へるなまこ雲あり
710 なまこ山／海坊主山のうしろにて／薄明穹を過ぎる黒雲

雲のこと、あるいは山のことを直喩あるいは隠喩としてナマコと呼んでいるようだ。

『春と修羅（第一集）』の「真空溶媒」における「白い輝雲のあちこちが切れて／あの永久の海蒼がのぞきでてゐる／それから新鮮なそらの海鼠の匂」といった部分は、本作に最も近い共感覚的な表現だろう。

文語詩を見てみると、「一百篇」の「市日」に「なまこの雲」があり、また、「五十篇」の「汗馬〔一〕」には、ナマコではないが、やはり岩手山の山麓とも思われる場所を舞台にして、「山はいくたび雲滃の、　藍のなめくじ角のべて、」という一節があった。雲からナメクジを想起させていることを思えば、雲からナマコを思い出すのも容易だろう。

童話「双子の星」では、賢治は彗星に「頭と胴と尾とばらばらになって海へ落ちて海鼠にでもなるだらうよ」と言わせ、口語詩篇「会食」には、「誰かなまこをはじめて食みし」とあることから考えれば、賢治はナマコのことを＜海底に棲む異様な形をした生物＞といったイメージで捉えていたように思う。

さらに童話「葡萄水」には、「夕方です。向ふの山は群青いろのごくおとなしい海鼠のやうによこになり」とあり、また、童話「なめとこ山の熊」でも「まはりはみんな青黒いなまこや海坊主のやうな山だ」とあり、山の様子として表現されることもあったようだ。

こうした用例から検討すれば、「海鼠のにほひ」が出てきたのは共感覚的なものであった可能性もありながら、「雲垂れて」とあるその雲がナマコ雲（層積雲）だったため、あるいは山並みがナマコのようだったために、匂いさえも感じさせるようだった、というあたりであろうかと思う。

続いて二行めの「馬は黒藻に飾らるゝ」について検討したい。この表現について吉田敬二（後掲）は、「放牧されている馬にはウマサシ（虻）避けの海藻は掛けないし、その必要もない」とし、「初期短篇綴等」の「柳沢」に、「林は夜の空気の底のすさまじい藻の群落だ」とあることから、「柏などの生えた山林を藻の群落と表現している。そこらを駆けまわっている馬も、ある瞬間、黒藻に飾られておもちゃの駒のようにおどりだして来るように見える」とする。たしかに「うれひて蒼き柏ゆゑ」とあるのは、柏が青々と茂っているが「ゆゑに」馬が黒藻に飾られたということにも読めるので、馬は柏の木のために「黒藻に飾らるゝ」（ように見えた）と解することもできる。

しかし、まだ柏の木を登場させる案のなかった下書稿㈠の段階でも、「馬は黒藻に飾られぬ」とあったことを考えれば、馬は、もともと黒藻が付けられていたとすべきではないだろうか。吉田の言うように、放牧されている馬に海藻をかけることがなかったとしても、賢治の頭の中にそうしたイメージがあったとすることは可能だろう。

また、短篇「柳沢」において、ここが「すさまじい藻の群落」に感じられことを引用しているが、それは賢治が夜に柳沢を訪れているからであり、すずらんの花の白さがまだ見えるような真昼の時間帯にも「藻の群落」と感じられたかどうかはわからない。

ただ、海の気配が漂っていることについては確かだと思うので、両者の中間的な立場、すなわち「馬たちは黒藻で飾られていたが、柏の木が鬱蒼としているために黒藻の様子は海を思わせるほどで

あった」というように捉えることにしたい。
　本作はわずか二行の詩であるが、この短い詩中に場違いとも思える海に関する語が二回も登場する。「歌稿〔B〕」1の短歌には海の要素は全くないが、その後の推敲では、この二点に関して表現に動きがない。
　賢治は散文「〔或る農学生の日誌〕」で、「ぼくは桜の花はあんまり好きでない。朝日にすかされたのを木の下から見ると何だか蛙の卵のやうな気がする」とし、「それにすぐ古くさい歌やなんか思ひ出すしまた歌など詠むのろのろしたやうな昔の人を考へるからどうもいやだ。そんなことがなかったら僕はもっと好きだったかも知れない。誰も桜が立派だなんて云はなかったら僕はきっと大声でそのきれいさを叫んだかも知れない」と書いている。賢治が桜の花を蛙の卵のようだとたとえたのは、何も奇をてらったわけでも、古人の感覚を逆なでしようとしたのでもなく、桜に関するおきまりの修辞や形容に飽き、意外なようでいて本質を突いた指摘を目指していたからだろう。
　同じように、山を描く際に、常識的でないからとか、古来からの表現と一致しないからといって、海鼠の匂いを感じたという経験を封じ込めてしまうのではなく、思った通りに書くことこそが重要だと思っていたのではないかと思う。
　「歌稿〔B〕」には、海鼠ではないが、海の気配を感じとっての歌が残っている。

339　まどろみに／ふつと入りくる丘のいろ／海のさましてさびしきもあり。

　賢治は『注文の多い料理店』の序に、「ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書いたまでです」と書き、「なんのことだか、わけのわからないところもあるでせうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです」とした。また、広告ちらしには、「たしかにこの通りその時心象の中に現はれたものである。故にそれは、どんなに馬鹿げてゐても、難解でも必ず心の深部に於て万人の共通である。卑怯な成人たちに畢竟不可解な丈である」と書いた。この精神が、最晩年の文語詩、本作のような二行の短編にまで息づいていた、ということではないかと思う。

先行研究

吉田敬二「柳沢野」（『宮沢賢治　文語詩の森　第二集』　柏プラーノ　平成十二年九月）
島田隆輔Ａ「原詩集の輪郭」（「宮沢賢治研究　文語詩集の成立　鉛筆・赤インク＜写稿＞による過程」〔未刊行〕　平成二十二年六月）
島田隆輔Ｂ「宮沢賢治短歌の文語詩への転生について」（「路上118」　路上発行所　平成二十二年十二月）
島田隆輔Ｃ「宮沢賢治・《文語詩稿》生成の一面　『歌稿〔B〕』にかかわって」（「島大国文33」　島大国文会　平成二十三年三月）

49　軍事連鎖劇

①キネオラマ、　寒天光のたゞなかに、　ぴたと煙草をなげうちし、
上等兵の袖の上、　また背景の暁（あけ）ぞらを、　雲どしどしと飛びにけり。
②そのとき角のせんたくや、　まつたくもつて泪をながし、
やがてほそぼそなみだかわき、　すがめひからせ、　トンビのえりを直したりけり。

大意

幕間に映すためのキネオラマを準備している際の、　漏れた燐光
の中に、　ちょうど煙草を投げ捨てた、
上等兵の袖の上と、　背景の朝方の空を、　雲がどんどんと飛び
去っている。

その時見物人の一人であった角の洗濯屋が、　感極まって涙を流
し、
しかしすぐに細々と涙は渇いていき、　やぶにらみの眼を光らせ
ながら、　インバネスのえりを直した。

モチーフ

明治末年から大正初年にかけて映画と演劇をミックスした連鎖劇がブームとなった。本作が実際の連鎖劇に取材したものかどうかはわからないが、映像と実際の人間の動きをオーバーラップさせるいわゆる連鎖劇の持つおもしろさだけでなく、幕間に見せるために準備中のキネオラマから漏れてくる光、観客の一挙手一頭足などが渾然一体となった近代劇場という空間のおもしろさこそが、賢治がここで描きたかった＜連鎖劇＞なのであろうと思う。

語注

軍事連鎖劇　連鎖劇とは芝居の中に活動写真を取り入れて上演するもの。明治三十七年三月に伊井蓉峰の戦争劇「征露の皇軍」で、「活動写真応用の大仕掛け」が使われていたあたりが始まりだろうとされる。連鎖劇という名称は、大正二年に山崎長之輔が使い始めたという。しかし、ブームの絶頂期の大正六年には、防災上の理由から活動写真取締規則により警視庁管内での上演が禁止された。ただ、岩本憲児（「連鎖劇からキノドラマへ」『サイレントからトーキーへ　日本映画形成期の人と文化』森話社　平成十九年十月）によれば、「実際にはまだ数年続いている。関西では十二、三年頃まで続いたが下火になり、井上正夫も大正七年には正統新派へ復帰し、あるいは映画そのものへと移り、大正十三年（一九二四）、山長も人気凋落のうちに亡くなった」という。同時代の石巻良夫（「天活の連鎖劇」『欧米及び日本の映画史』プラトン社　大正十四年十二月）も、「大正八年、帝キネが起るとこれも連鎖劇の興行を始め、熊谷武男や伊村義雄が盛んに活躍した」と書いているから、大正年間を通して連鎖劇は上演されていたようである。また、「軍事連鎖劇」については、島田隆輔（後掲）が、名古屋の御園座で大正十一年一月に太陽団（大橋幸太郎一座）が上演していたという資料、昭和八年六月に富山県中新川郡加積町（現・滑川市）で太陽団の上演があったという資料（山田禎一「おふくろの日記そして人生五十年」 http://www16.ocn.ne.jp/~hp1059/ofukurosan.htm）を提示している。大橋幸太郎の太陽団については、『近代歌舞伎年表 京都篇 第9巻 昭和4年－昭和10年』（八木書店 平成十五年三月）に、昭和七年四月に京都の南座で「軍事社会教育連鎖劇　国の光人の妻」の上演があったと紹介されており、「大阪朝日新聞」（昭和七年四月十七日）の記事には、「劇と映画により軍事思想の普及と、在郷軍人及びその家族の平戦両時における準備と覚悟を促し、国防観念の喚起に尽してゐる」とある。本作は「[冬のスケッチ]」に発するものだが、文語詩の下書では「連鎖劇」がタイトルであり、定稿を手入れする段階で、ようやく「軍事連鎖劇」の言葉が登場している。賢治がいつ、どこで、どのような連鎖劇を見たのかは不明だが、大正末年から昭和初年にかけて全国を回っていた大橋幸太郎の太陽団あたりを思い浮かべながら、このタイトルに改めたのかもしれない。

キネオラマ　石井研堂『増補改訂　明治事物起原』（昭和十九年十二月　春陽堂）には、「切りぬき画を進退し、各種電燈の採光とを利用して之を助け、観者に実物同様の感を起さしむるを、キ

ネオラマといふ」とある。奥山文幸（後掲）も引用する『新修百科事典』（三省堂 昭和九年二月）には、「明治四十年頃から大正の初期浅草に行はれた映画常設館の呼び物として、映画の番組の間に見せた電気照明応用のパノラマ。ヴェネチアなどの書割に光線の変化を与へて朝・昼・夜・雷鳴・風雨の感を出し、傍らから説明者が説明を加へた。一回の演出約十分。半月位に景を変へた」とある。

寒天光　カンテンはテングサを用いた食品のことであるが、ここでは劇場のホコリの舞う観客席の中を光が突き抜けた時に、光の通った跡が見える現象を指すのだろう。どちらもコロイド（ある物質が微粒子となって他の液体・気体・固体などの媒体中に分散している状態のこと）であるが、賢治は好んでこうした語を使っている。「五十篇」の「車中〔二〕」などにも、雲の切れ間から光が漏れて、太陽光線が放射状に注ぐ現象（ティンダル効果。天使の梯子、あるいは薄明光線ともいう）を「寒天光」と書いている例がある。

すがめ　片目または斜視のこと。瞳を片側に寄せて見ることもいう。ここでは前者と捉えた。

トンビ　丈が長いコートに、ケープを合わせたもののこと。スコットランドのインヴァネス地方で生まれたとされているためインヴァネスとも称される。また、二重回し、二重マントとも呼ばれた。

評釈

「〔冬のスケッチ〕」の第四・五葉を元にした下書稿㈠、黄罫（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡（タイトルは「連鎖劇」。鉛筆で㊄）、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。

まず、「〔冬のスケッチ〕」の第四・五葉をあげる。

そのとき人工の火ひらめきて
水より滋くもえあがり
またほのぼのと消え行けり。
※
なにゆゑかのとき　きちがひの
透明クラリネット、
わらひ軋り
わらひしや
※
たばこのけむり　かへって天の
光の霧をかけわたせり。
※
せんたくや、
そのときまったく泪をながし
やがてほそぼそ泪かわき
すがめひからせ
インバネスのえりをなほせり。
※
三疋の
さびしきからす
三人の
げいしゃのあたま。
※
あたかもそのころ
キネオラマの支度とて
紫の燐光らしきもの
横に舞台をよぎりたり
※
（その川へはしをかけたらなんでもないぢゃ
ありませんか。）と、おもひつめし故かへって
愚のことを云へり。

※
あけがたを
雲がせはしくながれて行き
上等兵は
たばこの火をぴたりと地面になげすてる。
※
劇場のやぶれしガラス窓に
するどくも磨かれ、むらさきの身を光らしめ
西のみかづき歪みかゝれり。

奥山文幸（後掲）は、「おそらく賢治は初めて人工による《光の交錯》を体験したことになる」とし、「光の芸術である映画と（キネオラマの支度のための）スポットライトの《光の交錯》。さらに、「劇場のやぶれしガラス窓」に屈折する「西のみかづき」の「歪み」。「冬のスケッチ」には、様々な《光の交錯》、または多光線的な表象があふれている。それは単なる視覚体験ではなく、「劇場」という限られた空間のなかで《光の交錯》を全身でうけとめるものではなかっただろうか」とする。

ところで取材時に賢治が見たのは、本当に連鎖劇だったのだろうか。記述も曖昧だし、資料が乏しいこともあって断言することは難しいが、映画の上映だったようにも思う。というのも連鎖劇とは劇と映画の折衷的な興行だが、楽団を引き連れ、「キネオラマの支度」もさせたというから、映画を映すための人員、楽団員、キネオラマのための人員、弁士、さらに劇団員… となると、あまりにも大所帯で、そうした一団がガラス窓がやぶれたような劇場で興行を打ったとは考えにくいからである。それよりも、かつて「五十篇」の「砲兵観測隊」についての評釈（信時哲郎 後掲）でも書いたように、映画（あるいはキネオラマ）と観客席の渾然一体をまるで連鎖劇のようだと「見立て」をして書いたのがこの作品ではないかという気がするのである。

奥山の言うとおり、これはたしかに賢治が体験した「初めて人工による《光の交錯》」で、映画好きの賢治には印象深いできごとだったのかもしれないが、それと同時にクラリネットの音、弁士の声（「その川へはしをかけたら…」というのは、おそらくは弁士の声だろう）、観客の姿、煙草の煙… と、視覚だけでなく、聴覚や嗅覚をも刺激するものだったことが丁寧に書きこまれており、だとすれば光の交錯に留まらず、さまざまな人間、さまざまな感覚刺激の交錯する場所としての劇場を描きたかったようにも思える（奥山もこのことには十分に意識的だったようだが）。

弟の清六は、「映画についての断章」（『兄のトランク』・平成三年十二月・ちくま文庫）の中で、当時の映画についての貴重な体験を綴っている。

――活動写真というものは不思議な匂いのするものだ――とも長い間私は思っていました。それはどういうことかと申しますと、そのころの活動写真はカーバイトから出るアセチレン瓦斯を燃やして、その青白い強い光で映写していましたので、客席のうしろで映写機をまわしていたそのカーバイト特有のにおいと、機械油や人いきれと、すぐそばの便所のにおいまで、まじったようなのを映画のにおいと思っていたのです。

賢治が清六と全く同じ体験をしたわけでも、全く同じ感情を持ったわけでもないにせよ、「冬のスケッチ」で描かれた劇場は、帝国劇場あたりとはちがって、「せんたくや」や「げいしゃ」たちと入り混じって見物する場所であったわけだから、清六のいうような「不思議な匂い」に満ち満ちた空間でもあったろうと思う。清六はまた、こんなことも書いている。

大正六年のころ、農林学校に在学中の兄と一しょにこの藤沢座に行ったことがありました。最も新しい欧州大戦争の実写と

いうのがその宣伝でしたが、全くいいかげんなもので、呼び物の戦車の大活躍という所ではみんなも大笑いでした。
「これより女性タンクの大活躍……」という説明者のセリフと同時に、女性というその名にふさわしい菱形の戦車が一台、左から右へのそのそと歩き、〃天国と地獄〃の勇ましい伴奏につれて、また同じものが左から現れ、「これより女性タンクの大活躍……」〃天国と地獄〃の伴奏、という具合に四、五回もこれを繰り返したのです、それに戦場で大活躍している筈のこのタンクのそばには、煙草をくわえた将校がこちらを向いて笑っているのですから、この襷（たすき）映画と天国と地獄の伴奏のことで、私たちは下宿に帰ってからも大笑いをしたのでした。こんな巧まざる演出も賢治は大好きだったのです。

「煙草をくわえた将校」とあるのが、「〔冬のスケッチ〕」の「上等兵は／たばこの火をぴたりと地面になげすてる」という詩句と似ており、この時の映画を見た時の体験が詩化されているのかもしれないとも思わせるが、それ以上に着目するべきは、「こんな巧まざる演出も賢治は大好きだった」という点であろう。
或る時、賢治は花巻で映画を観終わって帰宅すると、清六に次のような話をしたという。酔っぱらった観客が「おい。弁士い。しっかりやれい。下手糞弁士い！」と、何度も大声で叫んだ。すると弁士は怒って沈黙してしまった。
暫くの間その無声映画を見ていたのだが、その酔払いが太いぼそぼそした声で、
『弁士い。弁士い。あんまりごしゃぐなじゃい（おこるなやい）。外のお客さんにも失礼でないが。弁士い。』といい、説明者がまたその映画の途中から奇声を上げながら話し出したのだ。
映画などよりこの方が何倍も面白かったぞ。

文語詩定稿では、「〔冬のスケッチ〕」第四・五葉にあるような、クラリネットの音や弁士の声、場内に蔓延するたばこの煙、窓の外の三日月の光…　といったバラエティの豊かさはない。ただ、清六が「巧まざる演出」と書いたような劇場内で繰り広げられる猥雑な、小さなドラマにも目を配り、巧まずして生れてしまった「連鎖劇」を描こうとする意図は、十分に感じ取ることができるように思うのである。

先行研究

植田敏郎「比論」（『宮沢賢治とドイツ文学』講談社 平成六年五月）
奥山文幸「賢治とキネオラマ「冬のスケッチ」論」（『宮沢賢治『春と修羅』論言語と映像』双文社出版 平成九年七月）
宮沢哲夫「軍事連鎖劇」（『宮沢賢治 文語詩の森』柏プラーノ 平成十一年六月）
島田隆輔「定稿化の過程」（「宮沢賢治研究 文語詩集の成立 鉛筆・赤インク〈写稿〉による過程」〔未刊行〕平成二十二年六月）
信時哲郎「砲兵観測隊」（『宮沢賢治「文語詩稿 五十篇」評釈』朝文社 平成二十二年十二月）

50 峡野早春

①夜見来（よみこ）の川のくらくして、　斑雪（はだれ）しづかにけむりだつ。
②二すじ白き日のひかり、　ややになまめく笹のいろ。
③稔らぬなげきいまさらに、　春をのぞみて深めるを。

④雲はまばゆき墨と銀、　　波羅蜜山の松を越す。

大意

黄泉の国から流れるかのように川は暗く、　まだらになった残雪が静かに湯気をたてる。
二筋の白い陽光が差し込むと、　にわかに笹の葉の色も生気を取り戻した。
稲が実らないという嘆きが今更ながらに、　春を迎えるにあたって深まってくる。
雲は墨色と銀色で眼に眩しく、　波羅蜜山の松を越えてきたところだ。

モチーフ

先行作品に残された日付から、昭和二年の早春の思いが書かれたもののようだ。夜見来川と波羅蜜山という架空の川と山の名前が目につくが、冒頭の夜見来川には不吉な凶作のイメージがあるとすると、末尾の波羅蜜山には、農民たちの明るい未来とともに、菩薩行に打ち込む賢治自身の姿がイメージされていたとも考えられる。つまり、晩年の賢治は、慢心についての十分な自覚と自戒とがあったにしても、自分の菩薩行の実践が農村の未来に繋がるのだということは、ずっと思いつづけていたようである。

語注

夜見来の川　『定本語彙辞典』には、「賢治創作の川の名か。出所不明。死後の世界を表す黄泉に関連があろう」とする。黄泉の国から流れてくる川、そして、此岸（この世）と彼岸（あの世）の境目にあるとされる三途の川をも思わせる。

斑雪（はだれ）　まばらに降る雪、あるいは、まだらになって積もっている雪のこと。「早春」の語から、ここでは融け残った雪のことだろう。

稔らぬなげき　稗貫郡では一九二四年から一九二六年にかけて、三年連続して旱害に見舞われた。本作の先行作品である「一〇一四　春　一九二七、三、二三、」は、一九二七年（昭和二年）に書かれている。「春をのぞみて深めるを」には、四年連続の旱害を恐れる気持ちが増したことを書いているのだろう。「二百篇」には、他にも「旱倹」「旱害地帯」「朝」などの旱害について描かれた作品が収録されている。

波羅蜜山　波羅蜜山については、『定本語彙辞典』に「特定できない山名で、賢治は波羅蜜にちなんで「波羅蜜と云ふ銀の一つの星」（異稿童〔ひのきとひなげし〕）が「またゝき出し」たりするように、宗教的空間の一つのシンボルとしてこの山名を案出したかと思われる」とある。賢治が独居自炊生活を送った桜から北上川の方角を見て書かれた詩だとすると、波羅蜜山は胡四王山、旧天王山、観音山あたりを指すことになりそうだが（山に松の木が生えていることが認識されていることから、早池峰山などの遠方の山ではないだろう）、いずれも標高一〇〇～二〇〇ｍの小丘ながら、「経埋ムベキ山」として「雨ニモマケズ手帳」のリストに入れた山で、賢治には思い入れのある山であった。波羅蜜とは「彼岸への道。完成。修行の完成。さとりの修行。さとりに至るための菩薩の修行」（『広説仏教語大辞典』）を指し、布施（分け与えること）、持戒（戒律を守ること）、忍辱（耐え忍ぶこと）、精進（努力すること）、禅定（心を安定させること）、智慧（実相を悟ること。これをさらに細分化して十波羅蜜とすることもある）の六つに大別でき、「自己を完成すると同時に、多くの他者を利益することを目的としている」という。

評釈

黄罫（24０行）詩稿用紙に書かれた「春と修羅　第三集」所収の口語詩「一〇一四　春　一九二七、三、二三、」の下書稿㈡に手入れをした下書稿㈠（タイトルは「春」のまま。鉛筆で㋐）、黄罫（22０行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡（タイトルは「春」→「狭野早春」。鉛筆で㊄）、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。

　まず、「詩ノート」に記された口語詩「〔山の向ふは濁ってくらく〕　一九二七、三、二三、」をあげる。

山の向ふは濁ってくらく
もう恐慌（パニック）が春といっしょにやってゐる

野はらはまだらな磁製の雪と
黝ぶり滑べる　夜見来川

　みんなに明るく希望に充ち
　わたくしに暗く重い仕事が
　そこでまもなく起らうとする

鳥は雷気や
巨きな雲の尾を恐れない

架空の河川名と思われる「夜見来川」は最初期から登場していたことがわかるが、同一日付の詩篇によれば、この日は桜の羅須地人協会にいたようなので、実際には北上川がイメージされているのだろう。

　これに続く口語詩下書稿㈡の最終形態は次のようなものになっている。

野原は残りのまだらな雪と
黝ぶり滑べる夜見来川

雲が淫らな尾を（ママ）引いて
青々沈む波羅密山の、
松のあたまをかすめて越せば
山の向ふは濁ってくらく
二すじ青らむ光の棒と
わづかになまめく笹のいろ

野原はまだらな磁製の雪と
温んで滑べる夜見来川

　この二篇を読み比べて、最初に気付くのは、凶作に対する不安が描かれなくなっていることだろう。もちろん「黝ぶり滑べる夜見来川」という言葉が、どことなく不吉な印象を与えてはいるのだが、そこから凶作まで読み取れる者は僅かだろう。ただし、この案は文語詩の下書稿㈡の手入れ段階になって、「稔らぬうらみいよいよに」として復活する。この案は、一旦は削除されてしまうものの、定稿の段階では甦って、「稔らぬなげきいまさらに、　春をのぞみて深めるを。」と書かれることとなる。島田隆輔（後掲Ａ）はこのことについて、「詩の場に隠されていた詩層が再び隆起してきたという具合で、場が変容したというよりも、これによって詩の場を支えている詩想はむしろ鮮明にされてきた、と考えられる」とするが、そのとおりだと思う。

　もう一つめの改変は、文語詩になっても復活しないものだが、宮沢賢治という人の世界観・農業観を考える上では、こちらの方が重要かとも思われる。というのは、「詩ノート」においては「みんなに」対して「明るく希望に充ち」と書きながら、「わたくし」の方には「暗く重い仕事」が「まもなく起らうとする」と書いていたことである。つまり、自分自身だけが不幸を背負う英雄のよ

うに書いていたとも見える記述である。

晩年の賢治は、柳原昌悦に宛てた最後の手紙で、「私のかういふ惨めな失敗はたゞもう今日の時代一般の巨きな病、「慢」といふものの一支流に過って身を加へたことに原因します」（昭和八年九月十一日）と書いているように、自身の「（増上）慢」に対する反省の気持ちがあり、口語詩や文語詩の推敲にも、それが影響していた可能性が強いことが木村東吉などによって指摘されているところだが、おそらく、賢治はそのために黄罫（240行）詩稿用紙に下書稿を書き改める段階でこれを削除し、かわりに「波羅蜜山」を登場させるアイディアを捻出したのだと考えられる。

そして賢治は、この山の上の雲に淫らな尾を引かせたり、山の向こうを濁らせたりして、「暗く重い仕事」を暗示させる一方、二すじの光の棒を差し込ませて（ティンダル効果のことだろう）、笹の葉に生気を与えてもいるのだろう。つまり、これから先の我が身の艱難辛苦を予想させながらも、希望の光を差し込ませたというわけである。波羅密の語に、賢治が「さとりに至るための菩薩の修行」（『広説仏教語大辞典』）という意味を持たせているのだとすれば、耐えなければならない苦しみはあるにしても、その先には悟りの世界が広がっている、といった意味合いに解釈することもできそうだ。

しかし、この改変によって自分自身を英雄視したり、特別視したりすることからは逃れているようにも思えるものの、そのことが分かりにくくなったというだけであって、自分自身の努力の結果として農村全体に幸福が齎されるのだというような思いは、実は定稿を書き終えた段階まで抜けきっていなかったということになるようにも読めるのである。

もちろん、自分自身だけではなく、農村全体が菩薩行をするのだと読めないこともない。ただ、もしもそうした解釈が成り立つにしても、「詩ノート」を見れば、後付けのものに過ぎなかったことは明白である。良くも悪くも、これが宮沢賢治という人の世界観であり農業観であった、とすべきではないかと思う。

先行研究

島田隆輔Ａ「定稿化の過程」（「宮沢賢治研究　文語詩集の成立　鉛筆・赤インク＜写稿＞による過程」〔未刊行〕平成二十二年六月）

島田隆輔Ｂ「原詩集の輪郭」（「宮沢賢治研究　文語詩集の成立　鉛筆・赤インク＜写稿＞による過程」〔未刊行〕平成二十二年六月）

51　短夜

①屋台を引きて帰りくる、　目あかし町の夜なかすぎ、
うつは数ふるそのひまに、　もやは浅葱とかはりけり。

②みづから塗れる伯林青（べれんす）の、　むらをさびしく苦笑ひ、
胡桃覆へる石屋根に、　いまぞねむれと入り行きぬ。

大意

屋台を引いて帰ってくる、　同心町の夜中すぎ、
器の数を数えているうちに、　もやは浅葱色に変じてしまった。
自分で紺青色に塗った、　塗り斑をさびしく苦笑いしながら、
クルミの木が覆う石屋根の家の中に、　さぁ眠ろうとばかりに入っていった。

モチーフ

「目あかし町」とあるのは、同心町とも呼ばれた下級士族の住んでいた地域である。賢治は畑の作物を売りに町に出かけるが、夜

の間に屋台を出し、町から帰ってくる人もあった。「武士は食わねど」の時代は遠く去り、武士の末裔は厳しい生活を余儀なくされていたようだ。しかし、賢治はそうした人々を、完全に客観・冷静に見ていたわけではないだろう。というのも、町とも村とも微妙な距離を置きつつ生きるしかなかった賢治にとって、町にも村にも溶け込めずに生きる屋台店の店主は、似通った境遇にある人物だと感じたに違いないからである。

語注

短夜　夏の短い夜のこと。読み方は八田二三一（後掲）は「みじかよ」、入沢康夫（「文語詩難読語句（５）」「賢治研究112」宮沢賢治研究会 平成二十二年十二月）は、「タンヤorミジカヨ」とする。

目あかし町　賢治が独居自炊生活を送った下根子桜のすぐ近くにあった同心町のこと。『花巻市史１』（花巻市教育委員会 昭和五十八年九月）には、「向小路」として、「花巻御城代に配属された足軽の集団地で、一般に御同心と称せられた三十人の官営住宅が今でも原型を失わないで残っている」とある。目あかしは、岡っぴきとも呼ばれ、与力や同心に私的に雇われて、犯罪捜査や情報収集などを行った。賢治とも少なからぬ関係があった小学校教員の小笠原露の生家もここにあった。

伯林青　ディースバッハが発見した顔料で、発見地ドイツの旧名プロシアに由来してプルシアンブルー、またはベルリンブルー、ベレンス等と呼ばれる。紺青色。

評釈

黄罫（24 24行）詩稿用紙に書かれた先行作品「春と修羅　第三集」所収の口語詩「一〇四二　〔同心町の夜あけがた〕　一九二七、四、二一、」の余白に書かれた下書稿㈠（タイトルは「夏夜」→「短夜」）、黄罫（22 0行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡（タイトルは「短夜」。鉛筆で㊄）、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。

まず先行作品である「一〇四二　〔同心町の夜あけがた〕」から見ていきたい。

同心町の夜あけがた
一列の淡い電燈
春めいた浅葱いろしたもやのなかから
ぼんやりけぶる東のそらの
海泡石のこっちの方を
馬をひいてわたくしにならび
町をさしてあるきながら
程吉はまた横眼でみる
わたくしのレアカーのなかの
青い雪菜が原因ならば
それは一種の嫉視であるが
乾いて軽く明日は消える
切りとってきた六本の
ヒアシンスの穂が原因ならば
それもなかばは嫉視であって
わたくしはそれを作らなければそれで済む
どんな奇怪な考が
わたくしにあるかをはかりかねて
さういふふうに見るならば
それは懼れて見るといふ
わたくしはもっと明らかに物を云ひ
あたり前にしばらく行動すれば
間もなくそれは消えるであらう
われわれ学校を出て来たもの
われわれ町に育ったもの

われわれ月給をとったことのあるもの
それ全体への疑ひや
漠然とした反感ならば
容易にこれは抜き得ない
　向ふの坂の下り口で
　犬が三疋じゃれてゐる
　子供が一人ぽろっと出る
　あすこまで行けば
　あのこどもが
　わたくしのヒアシンスの花を
　呉れ呉れといって叫ぶのは
　いつもの朝の恒例である
見給へ新らしい伯林青を
じぶんでこてこて塗りあげて
置きすてられたその屋台店の主人は
あの胡桃の木の枝をひろげる
裏の小さな石屋根の下で
これからねむるのでないか

羅須地人協会時代の賢治は、レアカーに農作物を入れて、町の方に売りに行ったことは知られているとおりだが、ここに現れた「程吉」のように、村の人々の態度は優しいものではなかった。ただ、レアカーを引いて早朝の町に向かう賢治は、屋台を引いて町から戻ってくる「屋台店の主人」という、自分とはちょうど逆の動きをする人物をも見つけている。

　先行作品と同一日付を持つ「一〇四三　市場帰り　一九二七、四、二一、」は「五十篇」の「村道」の先行作品となっており、「村道」の評釈（信時　後掲）でも書いたように、ここで最終行に書かれている売り酒を飲む熊之進は、「一〇四二　〔同心町の夜あけがた〕」で、街から屋台を引いて戻ってきた「屋台店の主人」が姿を変えたものであると思われる。

　①朝日かゞやく水仙を、　になひてくるは詮之助、
　　あたまひかりて過ぎ行くは、　枝を杖つく村老ヤコブ。
　②影と並木のだんだらを、　犬レオナルド足織れば、
　　売り酒のみて熊之進、　赤眼に店をばあくるなり。

さて、「村道」の評釈では、ここに登場するのが「花や酒を売って生活する者、老人や犬（先行作品では「こどもら」）といったように、皆、農村におけるアウトサイダーたち」であり、村のインサイダーたる「程吉」のような人物がついに登場していないことについても指摘しておいた。「短夜」でも、この傾向がそっくり引き継がれていると言ってよい。さらに突っ込んでいえば、農村に住みながらも町に寄生して生きる屋台の店主は、単にアウトサイダーだというだけでなく、もう一つの賢治の姿だと言ってもよいくらいに賢治と似た境遇の人物だということができよう。

　「春と修羅　第三集」の「午　一九二七、四、二〇、」は、「短夜」の先行作品「一〇四二　〔同心町の夜あけがた〕」と「一〇四三　市場帰り」の一日前の日付けがあるものだが、ここには「巨きなくるみの被さった／同心町の石を載せた屋根の下から／ひとりのっそり起き出して」、「おまへの畑は甘藍などを植えるより／人参やごぼうがずっといゝ／おれが種子を下すから／一しょに組んで作らないか」と誘いかける人物を描いている。賢治は彼について、「時代に叩きつけられた／武士階級の辛苦の記録、／しかも殷鑑遠からず／たゞもうかはるがはるのはなし」と書く。これを文語詩の町から屋台を引いて帰ってくる「屋台店の主人」と同一人物であるとするのは早計かもしれないが、日付けも近く、場所も同じであることから、同一ではなくても、似た境遇の人物であったと考えてよさそうである。

明治維新によって武士たちは、わずかな一時金を得ただけで、よほどの資金か商才でもないかぎり没落していった。そんな士族たちを援助するべく岩手県内でも多くの士族授産事業が試みられたというが、松方デフレの影響もあり、華々しい成果は出ていない。森嘉兵衛（「文明開化期」『岩手近代百年史』熊谷印刷出版部 昭和四十九年二月）によれば、岩手県の「勧業上景況調」には次のようにあるという。

其ノ恒産恒業アルモノハ百中一二過ギズ、其他ハ皆金禄公債証書ニ依ッテ衣食シタルモノナレトモ、証書ハ既ニ転売シ、目下衣食ノ道ナキ者ナリ、然レトモヤヤ世事ニ通ジ、文筆アルモノハ県官・郡村吏・小学校教員・巡査・看守等ニ奉職シ、其給料ヲモッテ生計ヲ営ミ、婦女ハ養蚕製紙機業ニ従事スルモ、ワズカニ一家ノ生活ノ小部分ヲ補フノミニテ、未ダ以テ永遠ノ目的ヲ立ルニ足ラズ、目下授産ノ方法ニ苦シム所ナリ

同心屋敷は「住居の建物を敷地と共に無償で交付され、各自所有のもの」（『花巻市史２』昭和五十六年九月）となったというが、生活に困窮するものが多かっただろうことが予想される。

賢治の小学校時代の恩師だった八木英三による『花巻市制施行記念 花巻町政史稿』（花巻郷土史研究会 昭和三十年一月）には次のように書かれているという。「豊沢橋を南に渡って『向小路』と言はれた街道沿いの高台は『御同心町』と言はれた足軽の住宅街町で『三人扶持』『五人扶持』と言うような小禄で暮しを立てなければならない半農の住宅地だつたので、自然に内職の発達を見るようになつた。そこに発達した内職は『傘張り』と『花札』の製造であつた。この傘張りと花札造りの家は数十個群をなしていたものである。当初は花札の製造が盛んで『黒札』と言って北海道の博打場向けの品物が相当に移出されていたがこれは時の流れとともに衰頽して大正の初年頃から廃業するものが多くなり、傘張りの方に転業して現在では花札屋は一軒もなくなつた」（引用は江橋崇『ものと人間の文化史167 花札』法政大学出版局 平成二十六年六月）。賢治はこうした土地の事情についてもよく知っていたと思われる。そうした賢治であれば、町と村を行き来しながら生きている士族の末裔に対して、やはり町と村を行き来しながら、どちらにも所属することのできない賢治がシンパシーを感じたというのはあり得ることだと思う。いや、ただ没落してゆく士族階級を眺めるだけでなく、これから没落してゆくかもしれない中産階級の子弟としての思いも重ねられていたのかもしれない。

先行研究

島田隆輔「詩の場の変容・《社会性》の獲得」（「島大国文23」島大国文会 平成七年二月）

八田二三一「短夜」（『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』柏プラーノ 平成十二年九月）

信時哲郎「村道」（『宮沢賢治「文語詩稿 五十篇」評釈』朝文社 平成二十二年十二月）

小林俊子「詩歌」（『宮沢賢治 絶唱 かなしみとさびしさ』勉誠出版 平成二十三年八月十日）

52 〔水楢松にまじらふは〕

①「水楢松にまじらふは、　クロスワードのすがたかな。」
誰かやさしくもの云ひて、　えらひはなくて風吹けり。

②「かしこに立てる楢の木は、　片枝青くしげりして、
パンの神にもふさはしき。」　声いらだちてさらに云ふ。

③「かのパスを見よ葉桜の、　列は氷雲に浮きいでて、

なが師も説かん順列を、　緑の毬に示したり。」
④しばしむなしく風ふきて、　声はさびしく吐息しぬ。
「こたび県の負債せる、　われがとがにはあらざるを。」

大意

「ミズナラが松に混じっているのは、クロスワードのようだなぁ。」
誰かがやさしく声をかけるが、応えはなくただ風が吹きすぎるだけであった。
「あそこに立っているナラの木は、片枝だけが青く茂って、パンの神でもいそうだな。」いらだったような声で重ねて言う。
「あの小道を見てごらん葉桜の、列は氷雲の上に浮かんでいるようで、おまえの先生が教えていた順列を、緑の毬で示しているようじゃないか。」
しばらくむなしく風が吹きすぎたあと、さびしげな声でため息交じりに言う。
「このたび県が抱えた負債は、私の失態ではないのだけれど。」

モチーフ

裕福な商人（銀行家？）が息子に向かって話しかける言葉を中心にした作品。息子好みの話題を振るが返事がなく、最終連でようやく自分の仕事の失敗について語り始める。父・政次郎と賢治をあてはめてみたくなるが、花巻銀行の重役だった母方の祖父と叔父は、取り付け騒ぎを経験しているので、そうした経験や見聞なども織り込まれているのだろう。いずれにせよ資本家階級を描いていることに違いはなさそうだ。ただ、ここではそれを批判する意識は窺いにくい。言い出しにくいことを、切り出すまでの父親の苦労は、階級のいかんを問わないということを示そうとしたのだろう。

語注

水楢　ブナ科コナラ属の落葉広葉樹。三十mを越す大木にもなることから大楢とも呼ばれる。

えらひ　『定本語彙辞典』には、「答え」の古い表現「応（いら）へ」の東北訛り」とある。

パンの神　ギリシャ神話に登場する半人半獣の神、牧羊神。ニンフや美少年を追い回す好色さを持つが、豊かな音楽的な才能もある。『定本語彙辞典』は、賢治が愛聴したドビュッシーの「牧神の午後への前奏曲」をあげ、本作にはその影響があるとする。下書稿㈠に「片枝青くしげりして／そのたゞずまゐ異なる」とあることから、ヤギの角とヤギの下半身とを持つというパンの神の異形さを言ったのであろうと思う。ちなみに童話「どんぐりと山猫」に登場する馬車別当も、「せいの低いおかしな形の男」と書かれ、「その男は、片眼で、見えない方の眼は、白くびくびくうごき、上着のやうな半天のやうなへんなものを着て、だいいち足が、ひどくまがって山羊のやう、ことにそのあしさきときたら、ごはんをもるへらのかたちだつたのです」とあり、パンの神のイメージが根底にあったように思われる。

パス　英語の「pass」。小道、細道のこと。

順列　或る集合から選んだ要素を並べた際の順番のこと。

県の負債　下書稿㈡には「あがたのおひめ」とある。父から子にかけた言葉で構成された作品だが、一連から三連までは、若い息子の気を引こうと「クロスワード」「パンの神」「順列」といったハイカラな用語を繰り出す。が、第四連になって初めて、父親が切り出しかねていた県の負債、つまり自分の仕事が県に

金銭的な迷惑をかけたこと、ひいては県民全体に負担をかけたことに言及することになっており、権力者である父親がようやく息子に真情を吐露することになっている。下書稿㈠の手入れでは「こたびの戦わが科と／ひとびとわれをそしれども／わが求むるは平和なり」とあり、また、「こたび県の負債せる／みなわがとがと説くものは／たゞかのやからねたみして／われをあざめるすがたのみ」ともあった。生かされたのは後者。

評釈

黄罫（22０行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈠（藍インクで㋐。タイトルは手入れ段階で「銀行家とその子」→「父と子」）、黄罫（22０行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡（鉛筆で㊢。タイトルは「銀行家とその子」）、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。この他に、「思索メモ」３の用紙に転用された下書稿断片がある。生前発表なし。先行作品や関連作品に関する指摘はなされていない。
　下書稿㈠の初期形態から見ていきたい。

黒き燕尾の胸高く
略綬の銀をかゝげつゝ
商主とその子とつれだちて
丘の高みに立ちしとき
積雲焦げて盛りあがり
油緑の桑もひかりたりけり

「かしこに立てる楢の子は
片枝青くしげりして
そのたゞずまゐ異なるは
パンの神にもふさはしし。」
　商主は……　　　……声を清くして
　かしらも青くそりこぼち
　白き袍などつけにたる
　その子善主にかたりけり
　子はえらひせずそらを見ぬ

「かしこを見ずや新緑の
柏は松にまじはりて
古きことばのモザイクや
クロスワードのさまなせり
かくのごときを静六は
混かう林となづけしか。」
　商主ほゝえむけしきにて
　ましろき指をあげたれど
　その子はさらに悦ばずふたゝび天を仰ぎける

「かのパスを見よ葉桜の
列（れつ）は氷雲につらなりて
ながが師も説かん順列を
緑の毬に示したり
そのうるはしき丘丘も
やがてなんぢにうちまかすべし」
　商主かすかにいらだてば
　燕尾は風にりと鳴りぬ

「すでになんぢに与ふべき
丘と森とのつらなりは
億のアールを越えたれど
なんぢは百に倍し得ん」
　商主しきりに子を説けど
　青きかしらをそりこぼち
　麻の袍などつけにたる
　その子憂ふるけしきにて
　むしろなみだをふくめるごとし

当初「銀行家とその子」のタイトルが付けられていたことからもわかるように、登場人物は燕尾服を着て、略綬（勲章や記章などを簡略化させたリボン様のマーク）を下げ、広大な山林も所有しているところから、社会的地位の高いことが窺える。しかし、父親は息子に向って、なかなか本題を切り出すことができない。そこで、まず息子の好みそうなハイカラな話題として楢の木の片枝だけが青く茂っていることをパンの神が潜んでいるようだ、と言って興味を引こうとする。が、息子はそれに応えることもなく、ただ空を見ているだけ。

続いて父は、新緑の広葉樹であるカシワが針葉樹のマツに混じっている様子を、古きことばのモザイクやクロスワードのようであると、ふたたび息子が関心を持ちそうな話題を投げかける。「古きことばのモザイク」というのは、おそらくは漢詩のことであろう。漢詩は平仄を整えることが重視されるが、平声を○、仄声を●で示すことから、白と黒がモザイクのようになっているということだと思われる。

あるいはこの風景を「混こう（淆）林」と呼び、その名付けの親は「静六」であっただろうか、などとも父は言う。静六というのは、『林政学』（冨山房 明治二十七年二月）や『造林学各論 第一、第二編』（池田商店 明治三十一年五月、早稲田農園 明治三十四年四月）をはじめとする多くの著書を刊行し、日本の公園の父とも呼ばれた林学博士の本多静六のことだろう（賢治が昭和初年に使った「孔雀印手帳」にも、「本田（ママ）静六博士」として登場している）。しかし、息子は相手にせず、天を仰いだまま…

続いて父は葉桜の列から順列の語を引き出し、「なが師」もこれを説いただろうと会話に誘い込もうとする。さすがに父も「いらだ」ってきたようで、ついに「そのうるはしき丘丘も／やがてなんぢにうちまかすべし」と述べ、さらに息子に譲る土地は一億アールを既に越しているが、お前なら百倍にもできるだろう、という（さすがに多すぎだと思うが…）。おそらく父は、息子の進路についての話をしたくて、息子が興味を持ちそうな話題を探していたのだが、ついにアイスブレイクのキッカケを得ることもないままに本題に入った、というところだろう。

佐藤泰正（後掲）は、本作を賢治とその父を描いたものであるとし、島田隆輔（後掲）も「宮沢家を暗示する家族」としているが、たしかに林学博士の名前を息子の気を引くために持ち出すあたり、父・政次郎と賢治の二人をモデルにしていると考えるのが普通だと思う。

賢治は宮沢家の家業を継ぐべき長男という存在であったが、中学校どころか高等農林にまで進学し、親の恩については常に意識しながらも、結局、家業に対しては忌避する気持ち以外を抱けなかった。本作については下書稿も存在しないことから、制作時期や制作の過程がわからず、文語詩に特有の誇張や虚構、他の経験や作品との合体などを含んでいるとは思われるものの、基本的には賢治自身の経験に基づくものだろうと思う。

文語詩を書く段階の賢治でも、宮沢家の所有する土地の面積を百倍に増やすことには興味を抱けていなかったと思うが、これほどまでの思いを父にさせながら、我を通そうとしたかつての自分に対して、「慢」の骨頂として恥ずかしく、申し訳なく思う気持ちもあったのだと思う。

さて、下書稿㈠は「銀行家とその子」と題され、次のように書き換えられている。初期形態をあげる。

「かしこに立てる楢の木は
片枝青くしげりして
パンの神にもふさはしき」
なだむるさまに誰か云ふ

「柏〔？〕松にまじはれば
クロスワードのすがたなり」

その声やゝにいらだてど
えらひはなくて風吹けり

「かのパスを見よ葉桜の
列は氷雲につらなりて
なが師も説かん順列を
緑の毬に示したり」

しばしむなしく風ふきて
声はさびしく吐息しぬ
「こたび県の負債せる
われがとがにはあらざるを」

下書稿㈠にあった「混から林」に関する記述などが消え、また、下書稿㈠では、やる気のない息子に対して、なんとか家業を継がせようとしている父親が描かれていたのに対して、下書稿㈡では、銀行が県に借金を背負わせてしまったことを息子に言い訳するかのような父親が描かれるようになっている。つまり、下書稿㈠では個人的な問題で親子の思いが対立していたが、下書稿㈡では社会的な問題を背景にして親子が対立しているように書き換えられている。文語詩の改稿は、自伝的な傾向が排除され、一般化されるという傾向がよく指摘されるが、まさにそのとおりの改稿が行われているようである。

ところで、「銀行家とその子」と言えば、小林俊子（「宮沢賢治の文語詩における風の意味 第二章 その２」「宮沢賢治、風の世界」 http://cc9.easymyweb.jp/member/michia/ 平成二十五年六月十八日）も書くように、賢治の母方の祖父・宮沢善治の周辺に起こった事件が思い起こされる。善治は、花巻銀行の専務取締役であったが、大正四年八月、鶯沢硫黄鉱山への莫大な滞貸金、行員の使い込み等から取り付け騒ぎが起こって休業に追い込まれ、十二月二十七日にようやく再開に成功するという事件があった。『花巻市史１』（花巻市教育委員会 昭和五十八年九月）によれば、「銀行再開の功労者は宮沢恒治氏であろう。氏は銀行の専務取締役宮沢善治（恒治氏の父）らと相談し整備案をつくった。その内容は、資本金二十万円を五分の一の四万円に減資して不良資産を整理する。預金は三ヵ年間据置、無利子五ヵ年賦償還とする。重役は十万円の私財を提供するというものであったが、いかに経営が悪化していたかが推定できよう」とある。「県の負債」ではないが、県民の生活に与えた影響も小さくはなかったはずで、賢治も大正四年八月十四日の友人宛て書簡で、「村の人たちは町へ出て来ませぬ　町の人たちも又充分しほれてゐます　殊に Hanamaki Bank に x、y、と云ふやうな問題が起つて私の周囲は反対のしほれかた即ち眼が充血してゐます」（高橋秀松宛書簡）と書いている。この時の善治・恒治の父子に、文語詩に書かれているようなのどかな問答をやっている暇はなかっただろうが、自分自身の経験と叔父の家で起こった事件などを重ねたところで作品が形成されていったのではないかと思われる。

さらに本作が最晩年に定稿として成立したことを思えば、昭和六年の盛岡銀行の破綻も賢治の頭をかすめていたかもしれない。というのも、もし、この作品が同時代に公開されたとすれば、読者の頭には、盛岡銀行を統率した金田一国士とその子について思い浮かべたと想像できるからだ。賢治は、この事件についても昭和八年の森荘已池宛書簡で、「昨夜叔父（宮沢恒治：信時注）が来て金田一さん（金田一勝定の次女の娘婿：信時注）の予審の証人に喚ばれたとのことで、何かに談して行きました。花巻では大正五年（正しくは四年：信時注）にちやうど今度の小さいやうなものがあり、すっかり同じ情景をこれで二度見ます」（三月三十日）と書いている。

賢治が父の営む質・古着商を嫌ったことはよく知られているところであろうし、大地主や資本家を嫌ったのも事実である。しか

し、父をはじめとする親類を、ただちに滅ぼすべき悪人たちだと思っていたかというと、必ずしもそうではなかったようだ。童話「ポラーノの広場」では、広場を逃げ出した県会議員にして悪徳資本家のデステゥパーゴを、キューストは出張先のセンダードの街で見かけるが、すっかり落ちぶれた様子を見ると、「なんだかかあいさうな気もち」になり、その弁明をすっかり信じ込んでしまう。賢治の階級意識の不徹底さが現われた箇所だと思うが、本作でもそれが出ているようで、社会的な成功者であったはずの父が、商売で失敗すると、息子に対してさえストレートに言葉を発することができない。それを「かあいさうな」ものとして、本作では描こうとしたのではないかと思う。佐藤（後掲）は、下書稿が「誇らかな父に対して黙して語らざる子の憂いが、傷みが」描かれているのに対して、定稿は「＜子＞ならぬ、さびしく吐息する＜父＞の悲しみを唱おうとする」と言うが、確かにそうした指摘もできようかと思う。

　文語詩は、岩手の様々な人々の、様々な姿を収録しようとしたものであったと思われるが、農民や労働者、うたひめばかりでなく、「銀行家」も十分に収録される資格を持っていた。それも、ただ弱者を痛めつける存在としてばかりでなく、本作のように「かあいさうな」存在として描くこともあったということであろう。

先行研究

佐藤泰正「宮沢賢治とは誰か　『春と修羅』から＜文語詩稿＞へ」（『佐藤泰正著作集6　宮沢賢治論』　翰林書房　平成八年五月）

島田隆輔「再編論」（『宮沢賢治研究　文語詩稿叙説』　朝文社　平成十七年十二月）

小林俊子「詩歌」（『宮沢賢治　絶唱　かなしみとさびしさ』　勉誠出版　平成二十三年八月）

53　硫黄

①猛しき現場監督の、　　こたびも姿あらずてふ、
　元山あたり白雲の、　　澱みて朝となりにけり。

②青き朝日にふかぶかと、　小馬（ポニー）うなだれ汗すれば、
　硫黄は歪み鳴りながら、　か黒き貨車に移さるゝ。

大意

居丈高な現場監督は、　今日も姿を見せていないという、
元山には白雲が、　澱んでようやく朝になったようである。
朝日が青くかがやく中に、　ポニーが深々と頭を下げて汗をながしていると、
積荷の硫黄は歪んでギシギシと音をさせて、　黒い貨車に移し替えられるところであった。

モチーフ

岩手県下にはいくつかの硫黄鉱山があったが、ここで焦点があてられるのは硫黄を運んでうなだれ、汗をかく小馬である。猛しき現場監督（下書段階では「性悪し」ともあった）は姿を見せることもない。さらに賢治は下書稿㈠の手入れ段階で「かの国のいくさのゆゑに／硫黄よく買はれ行くとて」とも書いていたから、硫黄が火薬の原料であることについても、十分な認識があったようである。賢治は昭和四年の書簡下書に「時代はプロレタリヤ文芸に当然遷って行かなければならないとき私のものはどうもはっきりさう行かないのです」と書いたが、本作はプロレタリヤ文学色、また、反戦文学色の濃い作品だと言えるかもしれない。

語注

猛しき現場監督　「猛し」は、プラスの意味にも評価できる言葉だが、下書稿㈢には、「性悪しかりし監督の／ふたゝび行衛知らぬてふ」とあることから、マイナスのイメージであるととりたい。細田嘉吉（後掲B）は、第一次大戦末期の硫黄業界は不景気と物価高騰のあおりで閉山が相次ぎ、残務整理的な作業をするのみで、「従業員は、退職、転職を迫られ、規律も弛みがちであったのではあるまいか。この雰囲気を賢治は、この一行に表現したものと思われる」とする。「小馬うなだれ汗す」るのと対比的に登場させたのであろう。

元山　鉱山の中心的部分で、細田嘉吉（後掲B）は「固有名詞であるとともに普通名詞でもある」という。

評釈

黄罫（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈠（赤インクで(了)）、その裏面中央に書かれた下書稿㈡、その上部余白に書かれた下書稿㈢（タイトルは「硫黄」。青インクで㊢）、定稿用紙に書かれた定稿の四種が現存。『新校本全集』に「歌稿〔A〕〔B〕」の642・643を関連作品とするとあり、「歌稿〔B〕」では、この二首が赤インク枠で囲まれていると指摘されている。

まず、「歌稿〔A〕〔B〕」の642・643から示しておきたい（引用は「歌稿〔B〕」）。

642　夜はあけて／馬はほの〴〵汗したり／うす青ぞらの／電柱の下。

643　夜をこめて／硫黄つみこし馬はいま／あさひにふかく／ものをおもへり。

この二首は赤インク枠で囲まれているということなので、おそらくは文語詩化の意図があったことを示していたと思われ、これは先行作品と言ってよいだろうと思う。

下書稿㈠は、次のようなものだ。

大森山の右肩に
二十日の月ののぼるころ
棒の硫黄をうち積みて

馬は頭をうち垂れて
かのましろなるきり岸を
月のあかりにあゆみしに
川あをじろく鳴りにけり

東しらみて野に入れば
をちこち春の鳥なきて
はや起きたてる村人や
霧ほのじろく流れけり

イメージがかなり具体的になっているように思うが、では、どこで取材された歌なのだろうか。宮城一男（「賢治短歌の地質学」「雪渡り　弘前・宮沢賢治研究会会誌4」　弘前・宮沢賢治研究会　昭和六十一年五月）は、643について「この短歌はおそらく岩手県松尾鉱山（当時日本一の硫黄鉱山）から、硫黄原石が馬車で運ばれてゆく鉱山風景をうたったものであろう」とした。しかし、中谷俊雄（後掲。また「ごまざい・温石・テグスなど　弘前賢治研究会誌⑷を読んで」（「賢治研究42」　宮沢賢治研究会　昭和六十二年一月）にも言及あり）は、花巻の鉛温泉の北、高狸山の中腹にあった鶯沢鉱山であるとし（『定本語彙辞典』もこの立場を採用している）、その後さらに細田嘉吉（後掲A、B）が、中谷説を退け、鶯沢鉱山の北北東にあった大噴（おおぶけ）鉱山を指すのだとしている。

まず松尾鉱山説について考えてみたい。細田（後掲A）は、「松尾鉱山では、硫黄精錬は元山で行われていて、これは昭和の閉山

まで変わらなかった。また、硫化（ママ）鉱の売拡を始めたのは大正一〇年であるし、麓の屋敷台（現松尾村東八幡平）で硫酸製造を始めたのは大正一二年であるから、大正七年当時には、硫黄原石（鉱石）の輸送は、全く行われていなかったといえる」とし、硫黄の輸送には「元山から屋敷台までの四㎞はハリジー式索道であった。屋敷台から大更駅までは馬鉄軌道であり、八頭の馬が交互に上り下りの二隊に分かれ、平坦な一三㎞の軌道を、一日一往復の輸送に当っていたから、「夜をこめて」輸送する必要はなかった」とする。

　次いで鶯沢鉱山説を退ける理由として、鶯沢鉱山は大正七年七月に休山となっているが、賢治が土性調査を行った七年四月～五月時点で、どれほどの鉱山輸送が行われていたか疑問であること（「歌稿〔A〕」の667には、「鶯沢」と題された「廃坑のうつろをいたみ立ちわぶるわが身の露を風はほしつゝ」がある）。また、西鉛からの輸送経路として、馬を使ったのは西鉛から志戸平までの八キロほどで、「二十日の月ののぼるころ（→真夜中）」に出発する必要がなかったこと。この輸送コースは川から少し離れており、「かのましろなるきり岸」「川あをじろく鳴りにけり」の言葉に合わないこと。さらに「東しらみて野に入れば」も現地の地形から適切でなく、文語詩に「か黒き貨車」とあるのも、当時の状況とは似合わないことなどをあげている。

　そして、細田（後掲A、B）は、自らの立てた大噴説の妥当性について、まず、鉱山から石鳥谷駅まで二輪馬車で運ばれていたという記録や証言が残っていること。そして使われた馬は北海道産の小型馬で文語詩に「小馬（ポニー）」とされているのと合致すること。さらに大噴鉱山から石鳥谷までの約二十キロは深夜に出発して早朝に駅に着くということから作品に合致すること。「ましろなる切り岸」や「川あをじろく鳴りにけり」、「東しらみて野に入れば」のいずれにも地形が合致していることなどをあげている。

　浜垣誠司（「文語詩「硫黄」の舞台（１）（２）」「宮沢賢治の詩の世界」http://www.ihatov.cc/ 平成二十一年五月十七日、二十四日）は、これらの説について、鶯沢説・大噴説では、どちらも近くに「大森山」があるが、「大森山の右肩に／二十日の月がのぼる」ということはなかったことを検証している。また、「歌稿〔A〕〔B〕」の644に「これはこれ／夜の間にたれかたびだちの／かばんに入れし薄荷糖なり」があることに注目し、これは賢治が土性調査中の大正七年四月十八日に、鉛温泉から工藤又治に宛てて「私モ又ニギリ飯ヲ出サウト背嚢ニ手ヲ入レタラ［注：「ミツワ人参錠」の箱の絵］ノ様ナモノガ入ッテヰマシタ。コンナモノハ変ダト思ッテ中ヲ見タラ薬ハ入ッテヰナイデ、薄荷糖ガ一杯ニツマッテヰマシタ。コレハ私ノ父ガ入レテオイタノデス。私ハ後ニ兵隊ニデモ行ッテ戦ニデモ出タラコンナ事ヲ思ヒダスダラウと思ヒマス」と書いていることから、この直前に収められた642・643の短歌も、大正七年四月十五日～十九日の豊沢川上流を調査した際に書かれた歌だとし、モデル地は鶯沢鉱山であったという指摘を行った。細田が鶯沢論の問題点としてあげた諸点についても、虚構化されることが普通である文語詩とは矛盾する点があっても、短歌においての矛盾点はないとする。結論としては、「短歌642、643から、文語詩「硫黄」に至る作品系列を、どこか一つの「作品舞台」における、作者のある一回の体験にもとづいたものとして一元的にとらえることはできない」とした。

　浜垣は精緻な分析をしているが、まず、「二十日の月」が、虚構でなかったにしても信じていいのかどうかが疑問であると思う。木村東吉（「《春と修羅 第二集》創作日付の日の気象状況」『宮沢賢治《春と修羅 第二集》研究 その動態の解明』・平成十二年二月・渓水社）が、賢治作品に登場する月について「実際は旧暦一〇日の月であるはずのものを二〇日の月と書いた例もある。これは詩人が虚構としてそうしたというより、月を視覚で捉えた月齢で判断しているからであり、旧暦に疎い感覚を持っていたことを示していよう」と指摘しているから、十日と二十日の月を間違

えた可能性も十分にある。

また、文語詩の制作段階で初めて登場した「大森山」が、実在の山名と一致している可能性がどれくらいあるかという点も疑問である。

さて、このように、考えてくると、宮城一男による松沢鉱山説についても再考してよいように思われる。

細田（後掲A）は、松尾鉱山について「硫化鉱の売拡を始めたのは大正一〇年であるし、麓の屋敷台（現八幡平市東八幡平）で硫酸製造を始めたのは大正一二年であるから、大正七年当時には、硫黄原石（鉱石）の輸送は、全く行われていなかったといえる」としていたが、早坂啓造（「松尾鉱業株式会社の成立と発展 第II次世界大戦期まで」「アルテス・リベラレス40」岩手大学人文社会科学部 昭和六十二年六月）によれば、松尾鉱山では大正元年に九一二トンの硫黄を生産しており、大正七年には六一九〇トン生産しており、硫化鉱についても大正七年に二一七トン生産しているという。硫黄の輸送には荷馬車が活用され、大正八年七月九日には馬車鉄道の岩北軌道株式会社が貨物の運輸を始めている。ただ、萩田栄治（「岩北軌道」『岩手のトテ馬車』江刺プリント社 昭和六十一年十一月）によれば、大正六年十一月五日の「岩手日報」には、「岩北軌道株式会社は好摩平館間に軌道を敷設し、松尾鉱山の鉱物及物資を輸送すると共に一般乗客貨物を取扱ふべく昨年創立され、既に開業中なるが、成績極めて良好なり」とあったというので、小馬（ポニー）が使われていたのかどうか、「ましろなるきり岸」にあたる場所があったのか、馬が夜通し荷物を引いたのか…といった点で鶯沢説や大噴説に比べて根拠が薄弱かもしれないが、少なくとも松沢鉱山説を全否定してしまってはいけないように思う。

ところで賢治は、「アザリア4」（大正六年十二月）に「好摩の土」と題して十首の短歌連作を掲載している。「歌稿〔A〕」と対照させると619〜633にあたり、大正六年の秋頃の短歌である。ここには「まだきとて桔梗のそらの底びかり、仮停車場のゆがむ窓より、」といった歌も含まれることから、好摩駅で馬車鉄道を見た可能性は高いように思う。文語詩の関連作品だとされる642・643とも制作日付が近いことから、好摩駅でのイメージが混じったとしても不思議ではない。さらに好摩駅の東南東にも四五二ｍの大森山という山があるし、松尾鉱山を背景にしたと思われる文語詩に「一百篇」の「市日」や「〔腐植土のぬかるみよりの照り返し〕」があることを考えれば、本作のモデル候補の一つにあげてもよいように思われる。

賢治は開業直後の鉄道や、鉄道の工事現場にまで足を運ぶ熱心な鉄道ファンであったから（信時哲郎「宮沢賢治論 〝鉄道の時代〟と想像力」「国文学 解釈と鑑賞937」ぎょうせい 平成二十一年六月）、好摩駅で鉄道馬車から国鉄の貨車に硫黄が積み替えられる作業を熱心に眺めていた可能性もあるように思う。

さて、モデル地について長々と論じてきてしまったが、本作は細田（後掲B）が書くように、「硫黄輸送に使役されている小馬に対する同情または愛情」を書いたものだというのは大筋で認めてよいように思う。語注で書いたように、朝日の中で「ふかぶかと」「うなだれ汗す」る馬のけなげさを引き立たせるかのように「猛しき現場監督」を登場させているが、硫黄に「歪み鳴」らせ、「か黒き貨車」を登場させているのも、馬に対する厳しさや陰惨さを演出してのものだろう。

しかし、ただ単に動物愛護的に「小馬」の哀れさのみを描こうとしたのではないように思う。朝早くから小馬と共に荷物を送り届ける馬夫への同情も含まれていると思うからだ。そして批判の目は、底辺の労働者である馬夫や小馬に労苦を押し付けながら、自らは姿を現すこともない「猛しき現場監督」、そしてさらにその上に君臨する資本家に向けられているのも明らかだろう。しかも、この硫黄は、下書稿㈠の手入れによれば、「かの国のいくさのゆゑに」買われていく構想もあった。底辺の民は、危険を賭して硫黄

を採掘し、小馬と共に働き、さらに「かの国のいくさ」にまで派遣されるのである。
　賢治は昭和四年の小笠原露宛書簡下書に、「時代はプロレタリヤ文芸に当然遷って行かなければならないとき私のものはどうもはっきりさう行かないのです」と書いているが、本作などはプロレタリヤ文学的な、あるいは反戦文学的な要素がかなり強いように思われる。

先行研究

中谷俊雄「岩手の山々　十六　高狸山」（「賢治研究28」宮沢賢治研究会　昭和五十六年十月）
細田嘉吉Ａ「硫黄」（『宮沢賢治　文語詩の森　第二集』柏プラーノ　平成十二年九月）
島田隆輔「初期論」（『宮沢賢治研究　文語詩稿叙説』朝文社　平成十七年十二月）
細田嘉吉Ｂ「文語詩「硫黄」の背景と輸送経路」（『石で読み解く宮沢賢治』蒼丘書林　平成二十年五月）
加藤碵一・青木正博「黄色い鉱物」（『賢治と鉱物　文系のための鉱物学入門』工作舎　平成二十三年七月）
加藤碵一「いおう」（『宮沢賢治地学用語辞典』愛智出版　平成二十三年九月）

54　一一月

①みなかみにふとひらめくは、　　月魄の尾根や過ぎけん。
②橋の燈（ひ）も顫ひ落ちよと、　　まだき吹くみなみ風かな。
③あゝ梵の聖衆を遠み、　　たよりなく春は来（く）らしを。
④電線の喚びの底を、　　うちどもり水はながるゝ。

大意

水面にふっと映ったのは、　月が山の端を登ったところだったようだ。
橋の燈火も震え落ちろというばかりに、　朝まだきに吹く南風である。
あぁ、阿弥陀三尊はまだ遠くにおられるようなので、　たよりなくも春を迎えることになりそうだ。
電線が風に鳴っている底の方では、　どもるように水の流れる音が聞こえている。

モチーフ

「聖衆」とは、阿弥陀三尊が現れて念仏行者を浄土に導いていくことだが、賢治は山越しに見える月に「山越阿弥陀図」と呼ばれる聖衆来迎図を、また、猛烈な南風に「早来迎」と呼ばれる聖衆来迎図を思い描いたのではないかと思う。ただ賢治が仰いだのは、満月ではなく未明に昇る細い月だったようだ。童話「二十六夜」では、梟に二十六夜待ちをさせ、疾翔大力を迎える物語を書いているが、本作との関わりも浅くないように思う。いずれも浄土教系の信仰イメージが強い。ただ、実際に賢治が聖衆を実見することはなかったようで、それがたよりない春をまた迎えるという落胆とも思える言葉に繋がっているのではないかと思う。

語注

月魄　下書稿㈠には「魄」に「しろ」のルビがあることから「つ

きしろ」と読ませたのだろう。「つきしろ」は、「月が出ようとする時、東の空が白く明るく見えてくること」(『日本国語大辞典』)だが、ここでは月そのものと取るべきだろう。『大漢和辞典』には、「月の精。又、月の異名。月霊」とある。また家庭小説家・菊地幽芳が明治四十一年に『月魄』を刊行しており、数度にわたって映画化がなされたことから、同時代的には耳新しい言葉ではなかったと思われる。「尾根を過ぎ」るは、月が昇るのだとも沈むのだとも捉えられるが、童話「二十六夜」において、賢治は梟たちに二十六夜待ちをさせ、「疾翔大力、爾迦夷波羅夷の三尊」を見る物語を書いていることから、本作でも未明に昇る二十六夜の月を扱っているのではないかと思う。「二十六夜」について、『日本国語大辞典』では、「江戸時代、陰暦の一月と七月の二六日の夜に月の出るのを待って拝むこと。月光の中に彌陀・観音・勢至の三尊の姿が現われるといわれ、高輪から品川あたりにかけて盛んに行なわれた。多く七月にいう」とする。童話「二十六夜」は六月であるのに対して、本作は「二月」。新暦の二月を指すのだとすれば、この日、賢治が見た月は、旧暦一月の月であったのかもしれない。「こよみのページ」(http://koyomi.vis.ne.jp/)によれば、例えば大正十一年であれば、二月二十三日の午前三時五十分に月齢二十六・一の月を見ることができた。橋本勇(二十六夜尊の思い出」「十代3ー7」ものがたり文化の会 昭和五十八年七月)によれば、盛岡では二十六夜尊の信仰がさかんで、大正十年代のある日、岩手公園の東方の岩山の山の端に月が現れ、「黄色い月は山の頂上に顔を出したとみるや、スル、スル、スルッと上空に昇りつめ、中空に静止したかと思うと、こんどは三つに割れて、バナナの真ん中のやや太い形をした光の部分がさらに上層へ前と同じ速さで昇った。光のかたまりはやがて水に溶けたようにゆらゆらと揺らぎ、その光量の全部を使って小さな仏体に変身した。次いで左の細い部分が同じように昇天して小さな仏像となり、続いて右のとがった光も小さく変身して中空に金色の仏画を出現させた」といった現象を実見したという。

梵の聖衆　読み方は「ぼんのしょうじゅ」。大角修(後掲)が、「仏教でいう聖衆来迎の聖衆以外には考えにくい」というとおりで、これは「臨終の時、阿弥陀仏が諸菩薩とともに迎え来て、念仏行者を浄土に導くこと」(『広説仏教語大辞典』)であると思われる。「一百篇」の「涅槃堂」下書稿㈠にも「あゝ聖衆来ますに似たり」とある。「二十六夜」では、疾翔大力三尊が梟の子である穂吉を迎えに来たかのように描かれている。

電線の喚び　下書稿㈠では「電線の叫び」とあることから、ここでも「おらび」と読ませたかったように思う。

評釈

黄罫(22０行)詩稿用紙に書かれた下書稿㈠、その裏面に書かれた下書稿㈡、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。

『新校本全集』は、「〔冬のスケッチ〕」の第十六葉を「本篇と関連する発想が見られる」としているが、まずはこれから見てみたい。

にはかにも立ち止まり
二つの耳に二つの手をあて
電線のうなりを聞きすます。
※
そのとき桐の木みなたちあがり
星なき空にいのりたり。
※
みなみ風なのに
こんなにするどくはりがねを鳴らすのは
どこかの空で

氷のかけらをくぐって来たのにちがひない
※
瀬川橋と朝日橋との間のどてで、
このあけがた、
ちぎれるばかりに叫んでゐた、
電信ばしら。
※
風つめたくて
北上も、とぎれとぎれに流れたり
みなみぞら

「電線のうなり」や「みなみ風」、「北上川」から関連は明らかだが、となれば、『春と修羅（第一集）』所収の「ぬすびと」（一九二二、三、二）との関連も考えられるかもしれない。

青じろい骸滑星座のよあけがた
凍えた泥の乱反射をわたり
店さきにひとつ置かれた
提婆のかめをぬすんだもの
にはかにもその長く黒い脚をやめ
二つの耳に二つの手をあて
電線のオルゴールを聴く

賢治はこの他にも電線の音について詩や童話に書いている。岩手県内に鉄道網が拡がってゆくのを見ながら、賢治は鉄道ファンになったのではないかと考えられるが（信時哲郎「宮沢賢治論〝鉄道の時代〟と想像力」「国文学 解釈と鑑賞937」 ぎょうせい平成二十一年六月）、電線が野を越え山を越えて伸びていく様子も、賢治には文明のたしかな歩みを見るような思いだったのだろう。ただ、こうした作品を並べてみても、どうもしっくり来ない。というのも「梵の聖衆」に関わることが見えてこないからだ。

大角修（後掲）は、「梵の聖衆」という言葉には、「死の時節」といったイメージが付きまとうと書く。タイトルに「二月」とあるのも、大角によれば、釈迦が入滅した月であり、また、西行法師が「願はくは花の下にて春死なむ そのきさらぎの望月の頃」といった歌を詠んだ月でもあることを指摘している。たしかに南風も吹いて、春の訪れを予感させる語もあるのに、まるで華やいだ感じがない。

浜垣誠司「二月」（「宮沢賢治の詩の世界」http://www.ihatov.cc/ 平成十九年二月十一日）は、大角の指摘を受けながら、聖衆来迎とは賢治が捨てたはずの浄土教系の経典に書かれるもので、「「聖衆は遠い」という言葉を文字どおり解釈すると、これはどうしても賢治自身が、「自分は阿弥陀如来への信仰からは遠く離れてしまった」ということを述べていると思えてなりません」。そして、「死の病床にいて、自分が信仰の上で父母や「聖衆」と離れたところに一人いる寂しさ」からこうした詩句を書いたのではないかとする。

浄土三部経の一つで、日本の浄土教の土台ともなっている経典である「観無量寿経」には次のようにある（『望月仏教大辞典3』より）。

彼の国に生ずる時、此の人精進勇猛なるが故に、阿弥陀如来は観世音及び大勢至、無数の化仏、百千の比丘声聞大衆、無量の諸天、七宝の宮殿と与に、観世音菩薩は金剛台を執り、大勢至菩薩と与に行者の前に至る。阿弥陀仏は大光明を放ちて行者の身を照し、諸の菩薩と与に手を授けて迎接し、観世音大勢至は無数の菩薩と与に行者を讃歎し其の心を勧進す。行者見已りて歓喜踊躍し、自ら其の身を見れば金剛台に乗じて仏の後に随従す。弾指の如き頃に彼の国に往生す

栗原敦（「月天子　賢治の「月」」『宮沢賢治　透明な軌道の上から』平成四年八月　新宿書房）は、童話「二十六夜」に、やはり「浄土真宗系統の説教の色あい」があることを指摘し、『定本語彙辞典』でも、「法華経を信仰する賢治が浄土教的色彩の濃い世界を描いた」のだとしている。法華経を体現した童話だという論者も少なくないが、賢治が原稿に「どうも／くすぐったし」と書いたのも、そのあたりに満足ができなかったためかもしれない。

「二十六夜」は、人間の子供に足を折られた梟の子・穂吉が、死に瀕しながらも講話を聴くために梟の坊さんのところを訪れるという物語だ。その日はちょうど二十六夜。「月天子山のはを出でんとして、光を放ちたまふとき、疾翔大力、爾迦夷波羅夷の三尊が、東のそらに出現」するという民間信仰のある旧暦七月二十六夜の一ヶ月前になるが、山の端に二十六日の月が登ったところで、作品はクライマックスを迎える。

二十六夜の金いろの鎌の形のお月さまが、しづかにお登りになりました。そこらはぼおっと明るくなり、下では虫が俄にしいんしいんと鳴き出しました。

遠くの瀬の音もはっきり聞えて参りました。

お月さまは今はすうっと桔梗いろの空におのぼりになりました。それは不思議な黄金の船のやうに見えました。

俄かにみんなは息がつまるやうに思ひました。それはそのお月さまの船の尖った右のへさきから、まるで花火のやうに美しい紫いろのけむりのやうなものが、ばりばりばりと噴き出たからです。けむりは見る間にたなびいて、お月さまの下すっかり山の上に目もさめるやうな紫の雲をつくりました。その雲の上に、金いろの立派な人が三人まっすぐに立ってゐます。まん中の人はせいも高く、大きな眼でぢっとこっちを見てゐます。衣のひだまで一一はっきりわかります。お星さまをちりばめたやうな立派な瓔珞をかけてゐました。お月さまが丁度その方の頭のまはりに輪になりました。

右と左に少し丈の低い立派な人が合掌して立ってゐました。その円光はぼんやり黄金いろにかすみうしろにある青い星も見えました。雲がだんだんこっちへ近づくやうです。

「南無疾翔大力、南無疾翔大力。」

みんなは高く叫びました。その声は林をとゞろかしました。雲がいよいよ近くなり、捨身菩薩のおからだは、十丈ばかりに見えそのかゞやく左手がこっちへ招くやうに伸びたと思ふと、俄に何とも云へないいゝかほりがそこらいちめんにして、もうその紫の雲も疾翔大力の姿も見えませんでした。たゞその澄み切った桔梗いろの空にさっきの黄金いろの二十六夜のお月さまが、しづかにかかってゐるばかりでした。

「おや、穂吉さん　息つかなくなったよ。」俄に穂吉の兄弟が高く叫びました。

ほんたうに穂吉はもう冷たくなって少し口をあき、かすかにわらったまゝ、息がなくなってゐました。そして汽車の音がまた聞えて来ました。

つまり、「二十六夜」は「月光の中に彌陀・観音・勢至の三尊の姿が現われるといわれ」（『日本国語大辞典』）る二十六夜待ちと、聖衆来迎、つまり「臨終の時、阿弥陀仏が諸菩薩とともに迎え来て、念仏行者を浄土に導くこと」（『広説仏教語大辞典』）が一緒になった物語であり、栗原が言うように、「いわば浄土から「一途に聴聞の志」を貫いた者を救い主が迎えに来るという「二十六夜」の仕組みも、「娑婆即寂光土」に究極する日蓮宗系統の宇宙観よりは、阿弥陀の西方浄土へ往生する、また迎えとられると考える浄土教系統の発想に近いといわねばなるまい。それはまさしく「阿弥陀三尊来迎図」の図柄に他ならなかった」と書くとおりであろう。そして、文語詩「二月」にも、浜垣が指摘したように、これと同じような浄土教的な傾向を認めることができる。

ところで、山越に見える月と三尊となれば、栗原も指摘する「山越阿弥陀図」が思い浮かぶ。鎌倉時代によく描かれたもので、京都国立博物館のホームページでは、「山の端にかかる落日かまたは満月を阿弥陀に見立てるところからこの図様が生まれたようだ」（http://www.kyohaku.go.jp/jp/syuzou/meihin/kaiga/butsuga/item03.html）と書かれている。ただ、賢治は二十六夜の鎌のような月を船に見立て、そこに疾翔大力と爾迦夷、波羅夷の三尊を幻視させている。

大角（後掲）も文語詩「二月」における「月魄の尾根や過ぎけん」と「山越阿弥陀図」を対照させていたが、確かに賢治は、これらの図像をベースに鎌のような月を舟に見立てた来迎図を思い浮かべたのだと思われる。

ただ、「二月」を読んで印象に残るのは、月以上に、強い風の方ではないだろうか。これは「二十六夜」には描かれていないが、やはり賢治に聖衆来迎を思い出させるきっかけを作ったものであるように思われる。

『望月仏教大辞典３』は、聖衆来迎図について次のように書いている。「本邦に於ける聖衆来迎図は、時代に依りて其の構想を異にし、即ち藤原時代に成れるものは多く之を正面に画き、鎌倉時代以降は漸く斜面に描写するに至り、図中にも亦行者及び屋樹を添加し、且つ前者に於ては飛雲概ね緩慢なるも、後者に於ては卒急なるもの多く、随つて聖衆の姿勢も坐姿より立姿に代り、又専ら金彩を用ふるに至れり」。つまり、平安時代には正面を向いてどっしりと座る阿弥陀像が描かれていたのに、時代が下って鎌倉になると、京都の知恩院にある「阿弥陀二十五菩薩来迎図」のように「早来迎」や「迅雲来迎」と呼ばれるような、阿弥陀が雲に乗って飛来するといったスピード感のある絵が描かれるようになったのだというのである（京都国立博物館　名品紹介　http://www.kyohaku.go.jp/jp/syuzou/meihin/kaiga/butsuga/item06.html）。

賢治が日蓮宗を信じる気持ちに偽りはなかったと思うが、栗原が言うように「宮沢賢治の想像力の、また創造力の根底」には、幼少時代からの強い浄土系仏教のイメージが影響しており、山の端に昇る二十六夜の月や、強い南風で雲が流れていく様子から、すぐに聖衆来迎が想起されたのではないだろうか。

浄土教においては仏を実際に見ることが重視され、先にも引用した「観無量寿経」では、「但だ応に憶想して心をして明に見せしむべし。此の事を見れば即ち十方一切の諸仏を見る。諸仏を見るを以ての故に念仏三昧と名づく」とあり、「観念法門」（観念阿弥陀仏相海三昧功徳法門経）には、「三昧と言ふは即ち是れ念仏の行人、心口に称念して更に雑想なく、念念往心し、声声相続すれば、心眼即ち開けて彼の仏を見ることを得。了然として現ずれば即ち名づけて定と為し、亦三昧と名づく。正しく見仏する時、亦聖衆及び諸の荘厳を見る」（『望月仏教大辞典１』より）とあるという。賢治が「小岩井農場」（『春と修羅（第一集）』にてユリアやペムペルを幻視し、あるいは「三七四　河原坊（山脚の黎明）　一九二五、八、一一、」（『春と修羅　第二集』）で、若い僧を幻視したが、「二月」では、ついに聖衆来迎を幻視できなかったようだ。それが、おそらくは「梵の聖衆を遠み」の意味であり、それゆえに「たよりなく春は来らし」と実感せざるを得なかったのではないだろうか。

もしもこの時、たとえ幻覚や錯覚、あるいは橋本勇が大正十年代に岩手公園の東側の空に見たような自然現象（？）を賢治が見ていたらどうなったであろうか。案外、賢治は浄土教を信じることになったのかもしれない。そうすれば父と子が宗教で対立することもなかっただろう。ただ、もしそういうことがあったとすれば、詩人・宮沢賢治が生まれることも、また、なかったように思うのである。

先行研究

大角修「二月」（『宮沢賢治　文語詩の森』　柏プラーノ　平成十一年

六月）

55　日の出前

①学校は、　稗と粟との野末にて、　朝の黄雲に濯はれてあり。

②学校の、　ガラス片（ひら）ごとかゞやきて、　あるはうつろのごとくなりけり。

大意

学校は、　稗と粟の畑のある野原の際にあって、　早朝の黄色い雲に洗われているようだ。

学校の、　ガラス窓が一枚一枚朝日に輝き、　中にはガラスがあるはずなのに穴の開いたように真っ暗に見えるものもある。

モチーフ

本作に先行するのは「大正三年四月」の章に収められた短歌。友人が校長として赴任した早朝の小学校を見てのものだろう。賢治は下書稿㈠で「まこと胸すくわざぞかし」と書き、「学校のガラスみな／ひとひらごとにかゞやきて」と校舎までもが喜んでいるように書いていた。しかし下書稿㈡になると、「稗と粟」を出すことから農作業に適さない地であることを漂わせ、また、「うつろのごと」きガラスを配置することによって抑制を利かせる。定稿では友人の学校であるとの記述も消え、小学校の明と暗の両方を示した一篇に仕上げている。

語注

稗と粟　ヒエもアワも米の代替になるイネ科の主食穀物。沢田由紀子（後掲）も指摘するとおり、どちらも山間のやせ地でも育つため、「学校にくる生徒の生活環境・家庭環境をも示」されていると言っていいだろう。本作の舞台は、おそらくは山間部の（小さな）小学校であろう。童話「鹿踊のはじまり」にも、「そこらがまだまるつきり、丈高い草や黒い林のままだつたとき、嘉十はおぢいさんたちと北上川の東から移つてきて、小さな畑を開いて、粟や稗をつくつてゐました」とある。

評釈

無罫詩稿用紙に書かれた下書稿㈠（タイトルは「佐藤謙吉とその学校」）、黄罫（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡（青インクで⑤、タイトルは「日の出前」）、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。

『新校本全集』は、「歌稿〔B〕」の「大正三年四月」の章に収められた「202a203 清吉が／校長になつた学校は／この日の出前／黄いろな雲に／洗はれてゐる」を改作したものだとする。なお、その元となった「歌稿〔A〕」の202は、「くるほしきわらひをふくみ学校は朝の黄雲に延びたちにけり」とあり、「歌稿〔B〕」の202では、「清吉が／校長となりし／学校は／朝の黄雲に洗はれてあり」とある。歌稿の配列から考えると、盛岡中学校を卒業し、大沢温泉での夏期講習会に参加した頃であろう。「稗と粟」とあることから、山間の小学校が舞台であったとすれば、大沢近辺の小学校がモデルになっているのかもしれない。ただ、「未定稿」の「盛岡中学校」には「白堊城秋のガラスは／ひらごとにうつろなりけり」と似た表現が用いられていることから、モデルを一つの経験、一つの場所のみに絞って考えるのは危険だろう。

「佐藤謙吉とその学校」というタイトルのある下書稿㈠は次のとおり。

それ歯磨をかけながら

このたび長（をさ）となりにける
その学校をながむるは
まこと胸すくわざぞかし

このたび長とさだまりし
その学校のガラスみな
ひとひらごとにかゞやきて
天（あめ）の黄雲に洗はれてあり

賢治の小・中学校時代の同級生名簿を見ても「佐藤謙吉」や下書稿㈡の「堅吉」にあてはまりそうな人物は見当たらないが、まだ文語詩への改稿を意識していなかっただろう「歌稿〔B〕」の202にある「清吉」については、小川達雄（「賢治嘱目」『盛岡中学生宮沢賢治』河出書房新社 平成十六年二月）も書いているように盛岡中学の卒業生に「清水清吉」の名前があり、この人物の赴任先であった可能性もあろう。

さて、下書稿㈡になると「日の出前」にタイトルも改め、客観的な視点から描かれることになる。

堅吉が
校長となりし学校は
稗と粟との野末にて
朝の黄雲に濯はれて居り

堅吉が
校長となりし学校は
ガラス片（ひら）ごとかゞやきて
そのあるものはうつろなるごとし

下書稿㈠では何もかもが輝かしく、友人の出世を祝っていた観があったのに、ここではまず第一連の「稗と粟との野末」の句で、その明るさにブレーキがかかる。稗と粟を作るということは、水田を作るには平地が足りないか、あるいは冷涼すぎたり土地がやせすぎていることを示すと思われるが、いずれにせよあまり裕福な子どもがいる環境ではないことを提示している。たしかに朝の黄雲に濯われた、すがすがしい学校の姿ではあろうが、どこかに不安な余韻を残すことになっている。

第二連も、今までは「ひとひらごとにかゞや」いていたガラスが、「あるものはうつろなるごとし」と、輝いているものばかりではないのだと、やはり明るさにブレーキがかかっている。「未定稿」の「盛岡中学校」では、「白堊城秋のガラスは／ひらごとにうつろなりけり」と、すべてのガラスをうつろにしてしまっていたが、そこまではいかないにしても、明るいことばかりではないことを示そうとしているようだ。

「歌稿〔A〕」では、まだ誰も生徒が来る時間ではないはずなのに、賢治は「くるほしきわらひをふくみ学校は朝の黄雲に延びたちにけり」と、生徒たちの明るすぎるほどの笑い声を感じ取っていたようだが、もはやそのような方向で読み取れる可能性は封じられてしまったということなのだろう。

「五十篇」に「〔盆地に白く霧よどみ〕」がある。賢治の教え子である沢里武治が、遠野盆地にある学校に赴任したが、賢治は僻地であることにめげず、がんばれと励ますつもりで詩を書き起こしたようだ。ところが定稿は左のような内容に改変されている。

①盆地に白く霧よどみ、　めぐれる山のうら青を、
　稲田の水は冽くして、　花はいまだにをさまらぬ。
②窓五つなる学校（まなびや）に、　さびしく学童（こ）らをわがまてば、
　藻を装へる馬ひきて、　ひとびと木炭を積み出づる。

賢治は昭和六年の初秋に「「風野又三郎」といふある谷川の岸の小学校を題材とした百枚ぐらゐのものを書いてゐますのでちやうど八月の末から九月上旬にかけての学校やこどもらの空気にもふれたい」（八月十八日　沢里武治宛書簡）として、沢里を訪ね、いくつかの小学校も見て来たようだが、文語詩定稿では、秋になっても稲の花が結実していないヤマセの年を描くことになっている（事実、昭和六年は天候不順による凶作となっている）。

本作「日の出前」も、はじめは同級生が校長となった学校を目にして、その前途を祝する詩であったのかもしれないが、「稗と粟との野末」にある小学校というイメージがもたらされた段階で、「［盆地に白く霧よどみ］」の改稿過程と同じように、困窮の中の学校を描くことになったようである。

先行研究

内村剛介「ホワイト・ホールのなかの時間」（「ユリイカ9-10」　青土社　昭和五十二年九月）
岡井隆Ａ「「文語詩稿」の意味」（『文語詩人　宮沢賢治』　筑摩書房　平成二年四月）
岡井隆Ｂ「親方と天狗蕈　「文語詩稿」を読む（３）」（『文語詩人　宮沢賢治』　筑摩書房　平成二年四月）
沢田由紀子「新たな方法への模索　宮沢賢治「文語詩稿」考」（「宮沢賢治研究Annual10」　宮沢賢治学会イーハトーブセンター　平成十二年三月）

56　岩手山巓

①外輪山の夜明け方、　息吹きも白み競ひ立ち、
三十三の石神に、　米（よね）を注ぎて奔り行く。

②雲のわだつみ洞なして、　青野うるうる川湧けば、
あなや春日のおん帯と、　もろびと立ちておろがみぬ。

大意

外輪山の夜が明ける頃、　人々は白い息を吐きながら先を争い、
三十三の石像に、　米を奉納しながら走っていく。
雲海の切れ目からは、　青い野が広がりこんこんと水をたたえた川が流れているのは、
あぁ、春日明神の大祭の時の白い帯のようだと、　人々は思わず立ちすくんでは拝むのであった。

モチーフ

賢治は岩手山に何度も登っているが、盛岡中学校時代の登頂体験を書き付けたものから、農民たちが先を争って石仏に米を奉納する詩に改変している。「春と修羅　第二集」の「一八一　早池峰山巓　一九二四、八、一七、」にも村人が木綿の白衣を着て信仰の山に登る姿を描いていたが、ここでは真剣さや信心深さよりもユーモラスに描くことに主眼があったように思われる。

語注

岩手山巓　岩手山の山頂のこと。岩手山は八幡平市、滝沢市、雫石町にまたがる標高二〇三八ｍの火山で、生成が古い西岩手火山に東岩手火山が覆いかぶさっている。古くから信仰の山として知られ、賢治も盛岡中学在学中から何度も登り、岩手山を扱った多くの作品も書いた。

外輪山　火口が二つ以上ある複式火山において、中央丘をかこむ外側の火口の縁のこと。火口縁またはカルデラ縁とも言う。最高地点の薬師岳は東岩手火山の外輪山にある。

三十三天の石神　東岩手火山の外輪山は一周が約二キロあり、こ

こに『法華経』の「観世音菩薩普門品第二十五」において、観音が三十三の姿に身を変えるということにちなんだ三十三観音の石像が二組ずつある。安政四年（一八五七年）に盛岡の商人を中心とした八日丁講中が、また、明治三十九年（一九〇六年）に花巻の家畜商・中村巳吉が奉納したものだという。「2013 しずくいし少年少女歴史教室　第3回　【雫石の歴史のはじまりの地に立つ】」（http://shizukuishi-shidankai.com/）によれば、「参拝登山は「おやまがけ」と呼ばれました。白衣に金剛杖を持ち、六根清浄を唱えながら暗いうちから登り、日の出を礼拝するなどのしきたりがありました。遠くから拝む「遥拝所」である新山堂からは＜御守り札＞、御山の奥宮からは＜這い松の枝＞、＜薬草＞、＜硫黄＞を頂戴して帰った。御札は家庭の神棚に供え、這い松の枝を田の水口や苗代、また、畑や麻畑の入り口に立てておくと、巌鷲山大権現様の守護で五穀豊穣がもたらされると信じていた。これらは「お山参詣」の出来なかった隣家や親戚にも配った。まさに農民生活に密着した信仰だった」という。また、「岩手山の頂上には、本宮としての奥宮の御室があり、その手前には三十三観音の石像が盛岡講中によって建てられている」（引用文中の（　）内の記述は省略）という。ことに先を急いで米を奉納するといったことについての記述は見つからなかったが、この近辺の農村に伝わった民間的な信仰であったと思われる。

春日のおん帯　『定本語彙辞典』では、「春日神社（春日大明神、春日権現とも）社殿正面の礼拝所に梁から吊り下げられている銅製の鰐口（金口とも）をガランガランと鳴らすのに、太い布（たいてい二本）を、和服にしめる兵児帯に見たてた呼称と思われる。あるいは賢治の機知の命名か」とする。浜垣誠司（「宮沢賢治の詩の世界」http://http://www.ihatov.cc/　平成二十五年十二月二十三日）は、奈良の春日神社に鈴の緒はなく、また、これが一般化したのは戦後だとして、奈良・春日神社の「御旅所祭」で行われる舞楽「納曾利」で使われる装束に巻く「銀帯」を「その形が、はたして「川の流れ」の比喩として適切かどうかはわかりませんが、この色だけは、遠くから眺めた川面の輝きの形容として、悪くないかなと思いました」とする。しかし、奈良・春日大社の「春日若宮おん祭り」の「お渡り式」で、行宮（あんぐう）に遷った若宮のもとに芸能集団をはじめとした多くの人々が向かう行列が行われて町を練り歩く際に、その先頭集団にいる「梅白枝（うめのずばえ）」と「祝御幣（いわいのごへい）」は、「赤衣(せきえ)に千早(ちはや)と呼ぶ白布を肩にかけ先を長く地面に引いて進む」（春日大社 http://www.kasugataisha.or.jp/）という。春日のおん帯とは、十数メートルにもなるこの千早を指すのではないかと思われる。童話「風の又三郎」にも、「「ありゃ、あいづ川だぞ。」／「春日明神さんの帯のようだな。」三郎が言いました。／「何のようだど。」一郎がききました。／「春日明神さんの帯のようだ。」／「うな神さんの帯見だごとあるが。」／「ぼく北海道で見たよ。」」という件りがある。北海道にも春日神社や、春日神社を合祀した神社があり、花巻市鍋倉字地神にも春日神社があるが、同じような祭りを行っていたかどうかは不明。

評釈

黄罫（22０行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈠（タイトルは手入れ段階で「火口丘」。後に「頂」。鉛筆で㋣）、その裏面中央に書かれた下書稿㈡（タイトルは「頂上　風の中の石に米と銭あげて拝む農民たち」）、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。

『新校本全集』に記述はないが、小野隆祥（後掲B）や島田隆輔（後掲A）が指摘するように、「「文語詩篇」ノート」の「1910」の項には次のようにある。

岩手山　麓の野　炬火、の余燼、　　黒き／夜や／野路行／

岩手山、山形頼威、橋爪、関

く人の／たいまつの／余燼を／赤く／散ら／す風／かな

岩手山噴火口内にて橋爪の寂しき顔

盛岡中学校二年生の賢治が、級友や引率教員らと共に明治四十三年六月（一九一〇年六月）に岩手山に登った時のことであろう。前半と後半が、それぞれが赤インクで囲まれ、後半については藍インクで消してあるが、それぞれが文語詩への改作が成されたことを意味すると思われる。下書稿㈠は次のとおり。

風すでにこゝに萎えしを
岩壁の反射を浴びて
なが横頬何ぞさびしき

昨日はかの青き林を
高らかにうたひしなれの
今朝赤き炬火をさゝげて
なれともにうちもだしにき

駒草は焼砂に咲き
ひとびとは高く叫べど
残りたる雪をふみつゝ
何をかもなが寂しめる

つかれたるおももちのうち
よき家のよきならひして
ながわれをいたはり問へば
あゝなれのなにとすべけん

「橋爪」とメモがあったのは、同級生の橋爪雄一郎のことだろう。前日は高らかに歌をうたい、早朝に炬火を持って歩く横顔はさびしそうで、疲れた様子を見せている。しかし橋爪は、良家の育ちのためか、自分にむかって労わりの声を投げかける。そんな意味だろう。

ただ、島田（後掲C）は、「なが横頬何ぞさびしき」の「な」にあたる人物が、盛岡中学校時代に英語を担当していた青柳亮（在職期間は明治四十三年四月～十一月）なのではないかと指摘する。「未定稿」に「〔瘠せて青めるなが頬は〕」があり、ここには「愛しませるかの女（ひと）を捨て／おもはずる（ママ）軍に行かん／師のきみの頬のうれるふ（ママ）を」（下書稿㈠）という言葉もあるが、青柳は従軍のために思い人とも別れるのだということを、小岩井農場で語ったということがあったらしい。

「〔文語詩篇〕ノート」の「1910」の項には、

九月二十三、二十四日　岩手越　　雨、火山灰層
小岩井農場、楠木ジョン、青柳先生。
パンを食みくる。

とあって、藍インクにて×が付けられているというから、文語詩化が試みられたと思われる。おそらくそれが「〔瘠せて青めるなが頬は〕」なのであろう。しかし、「岩手山巓」は、同じ場所を舞台にしていながら、明治四十三年（一九一〇年）の六月の岩手山行についてのことなので、「〔瘠せて青めるなが頬は〕」とは別の成り立ちであるとすべきだろう。「岩手山巓」の下書稿㈠にも「横頬何ぞさびしき」という詩句があり、「未定稿」の「〔瘠せて青めるなが頬は〕」とも一致しているのだが、「〔文語詩篇〕ノート」に「岩手山噴火口内にて橋爪の寂しき顔」とあることからもわかるとお

り、これは「橋爪」のことだとすべきだろう。もちろん同じ年の六月と九月の岩手山行であることから記憶が入り交じった可能性もあろうし、意図的に二つの経験を融合させていた可能性も考えられよう。

　さて、下書稿㈠についての考察が長くなってしまったが、実は下書稿㈠に㋐を付けた後になって、賢治は下書稿㈡で当初のモチーフをほぼ全て破棄し、次のように書き改めてしまう。

　三十三の石神に
　米を注ぎておろがみつ
　互に競ひめぐり行く
　外輪山の夜明けがた

　この後、複雑な手入れを経て、定稿に達するわけだが、島田隆輔（後掲Ａ）は、この改稿が昭和六年以降になされたものとして、現実的な諸問題に直面した結果のものだと考え、甘い少年時代の思い出から、「競って豊作祈願のために米をささげる農民の姿を、詩人は呼び戻し見つめている」とする。

　下書稿㈡の手入れ段階には「夏蚕を終へし村人は」という語もあったが、これは「春と修羅　第二集」の「一八一　早池峰山巓　一九二四、八、一七、」における次の部分と対応しているように思う。「岩手山巓」と「早池峰山巓」というタイトルの一致も偶然ではないだろう。

　みんなは木綿の白衣をつけて
　南は青いはひ松のなだらや
　北は渦巻く雲の髪
　草穂やいはかがみの花の間を
　ちぎらすやうな冽たい風に
　眼もうるうるして息吹きながら
　踵を次いで攀ってくる
　九旬にあまる旱天つゞきの焦燥や
　夏蚕飼育の辛苦を了へて
　よろこびと寒さとに泣くやうにしながら
　たゞいっしんに登ってくる

　岩手山も早池峰山も岩手を代表する信仰の山であるが、それぞれの山に登る村人たちを描きながら、賢治は早池峰に登る人々については、旱天への恐れや蚕飼育の苦労を書き、「よろこびと寒さとに泣くやうにしながら／たゞいっしんに登ってくる」と必死さを前面に出している。一方、岩手山に登る人たちを描く際には、早池峰山を描く際にも使っていた「夏蚕を終へし村人は」というイメージを削除し、「米を注ぎて奔り行」かせたり、白く流れゆく川を見ては春日神社の帯のようだとありがたがらせたりしており、賢治は必死さや真面目さを取り除こうとしていたようにも思えてくる。

　八田二三一（後掲）が指摘するように、岩手山を登る人々の様子は童話「風の又三郎」の先行形態である童話「風野又三郎」において、風の精である又三郎の経験として、次のように描かれる。

　「ね、その谷の上を行く人たちはね、みんな白いきものを着て一番はじめの人はたいまつを持ってゐただらう。僕すぐもう行って見たくて行って見たくて仕方なかったんだ。けれどどうしてもまだ歩けないんだらう、そしたらね、そのうちに東が少し白くなって鳥がなき出したらう。ね、あすこにはやぶうぐひすや岩燕やいろいろ居るんだ。鳥がチッチクチッチクなき出したらう。もう僕は早く谷から飛び出したくて飛び出したくて仕方なかったんだよ。すると丁度いいことにはね、いつの間にか上の方が大へん空いてるんだ。さあ僕はひらっと飛びあがった。そしてピゥ、たゞ一足でさっきの白いきものの人たちのとこま

で行った。その人たちはね一列になってつゝじやなんかの生えた石からをのぼってゐるだらう。そのたいまつはもうみぢかくなって消えさうなんだ。僕がマントをフゥとやって通ったら火がぽっぽっと青くうごいてね、たうたう消えてしまったよ。ほんたうはもう消えてもよかったんだ。東が琥珀のやうになって大きなとかげの形の雲が沢山浮んでゐた。

『あ、たうたう消だ。』と誰かが叫んでゐた。おかしいのはねえ、列のまん中ごろに一人の少し年老った人が居たんだ。その人がね、年を老って大儀なもんだから前をのぼって行く若い人のシャツのはじにね、一寸とりついたんだよ。するとその若い人が怒ってね、

『引っ張るなったら、先刻たがらひで処さ来るづどいっつも引っ張らが。』と叫んだ。みんなどっと笑ったね。僕も笑ったねえ。そして又一あしでもう頂上に来てゐたんだ。それからあの昔の火口のあとにはいって僕は二時間ねむった。ほんたうにねむったのさ。するとね、ガヤガヤ云ふだらう、見るとさっきの人たちがやっと登って来たんだ。みんなで火口のふちの三十三の石ぼとけにね、バラリバラリとお米を投げつけてね、もうみんな早く頂上へ行かうと競争なんだ。向ふの方ではまるで泣いたばかりのやうな群青の山脈や杉ごけの丘のやうなきれいな山にまっ白な雲が所々かかっているだらう。すぐ下にはお苗代や御釜火口湖がまっ蒼に光って白樺の林の中に見えるんだ。面白かったねい。みんなぐんぐんぐんぐん走ってゐるんだ。すると頂上までの処にも一つ坂があるだらう。あすこをのぼるとき又さっきの年老りがね、前の若い人のシャツを引っぱったんだ。怒ってゐたねえ。それでも頂上に着いてしまふとそのとし老りがガラスの瓶を出してちいさなちいさなコップについでそれをそのぷんぷん怒ってゐる若い人に持って行って笑って拝むまねをして出したんだよ。すると若い人もね、急に笑ひ出してしまってコップを押し戻してゐたよ。そしておしまひたうたうのんだらうかねえ。僕はもう丁度こっちへ来ないといけなかったもんだからホウと一つ叫んで岩手山の頂上からはなれてしまったんだ。どうだ面白いだらう。」

「面白いな。ホウ。」と耕一が答へました。

これが賢治の実体験をそのまま写し取ったものなのかどうかは定かではないが、童話「風の又三郎」の方には盛り込めそうになくなったこのエピソードを、賢治は文語詩の方に流用したのかもしれない。「風の又三郎」との関連ということで言えば、次のシーンも文語詩に流用されている。

光ったり蔭ったり幾通りにも重なったたくさんの丘の向ふに、川に沿ったほんたうの野原がぼんやり碧くひろがってゐるのでした。

「ありや、あいづ川だぞ。」

「春日明神さんの帯のようだな。」又三郎（ママ）が云ひました。

「何のようだど。」一郎がききました。

「春日明神さんの帯のようだ。」「うな神さんの帯見だごとあるが。」「ぼく北海道で見たよ。」

みんなは何のことだかわからずだまってしまひました。

農民たちにとって、旱害も冷害も恐ろしいものであり、労働の苦しみも並大抵のものではなかった。農民たちは神仏に祈り、庚申待ち、二十六夜待ち、その他さまざまな民間的・土俗的信仰を駆使して、自分たちの思いをなんとかしてかなえようとしていた。しかし、神社仏閣への参詣を名目としながら、物見遊山を楽しんでいたというのも、日本人が古来よりずっと続けていたことでもあった。

「五十篇」所収の「〔萌黄いろなるその頸を〕」は、農民たちからなる巡礼団が、アヒルの頸を釣り下げた魚屋に行って五厘銭を

貰ってくるという内容だが、魚屋という殺生戒を犯している者の元に巡礼が訪ねるのはおかしな話で、賢治が先行作品で「にせ巡礼」と呼んでいるのも当然だろう。しかし、賢治はここで真の宗教を問おうとしているわけではなく、岩手に生きる様々な人の姿をこそ、描いておこうとしたのだろう。

　農学校時代の教え子である根子義盛は、賢治の言葉を次のように紹介する（関登久也「性の問題 根子義盛氏から聞いた話」『宮沢賢治物語』 学習研究社 平成七年十二月）。

> 村の人が大ぴらに猥談をするのは、そう悪い感じのしないものだ。今日見て来て感じたのだが、水引の村人たちが、田の畦（あぜ）にどんどん火を燃しながら猥談をしているのは、あれは無難でいい。むしろ、争いを未然に防いでともどもに笑い興じている風景は、なごやかだとも言うのでした。
>
> 　苗取りの時にも、女の人たちが、農村の貧しさも忘れて、面白可笑しく笑い興じている有り様を見て、同様のことを話していました。

　農民のすることならば全てが正しいなどと思っていたわけではないにせよ、文語詩を書いていた頃の賢治は、彼等の生活や信条を、自らの宗教観や農業観とは別にして、しっかり書き留めておこうとしたのではないだろうか。

　以前、童話集『注文の多い料理店』が「少年少女期の終わり頃から、アドレツセンス中葉に対する一つの文学としての形式」を取っているのに対し、文語詩は「芸娼妓や酒の密造に一喜一憂し、あるいは艶笑譚で労働の疲れを暫し紛らわせようとするような、そんな「大衆」」に向けて書かれているのではないか、と書いたが（信時哲郎「文語詩はどこに向かっていたか」『宮沢賢治「文語詩稿 五十篇」評釈』 朝文社 平成二十二年十二月）、本作もそうした作品の一つであるように思う。

　だとすれば、「つかれたるおももち」をしながら「われをいたはり問」うような「よき家」の出身者である橋爪を描いた下書稿(一)を破棄して、風の精である又三郎が、子どもたちに向って「どうだ面白いだらう」と言いたくなるような、「大衆」にも愛誦してもらえそうな詩を作ろうとしたのも当然の成り行きだったのかもしれない。

先行研究

保阪庸夫・小沢俊郎「大正十四年」（『宮沢賢治 友への手紙』 筑摩書房 昭和四十三年六月）
佐藤勝治「賢治随想42 仙人鉱山紀行詩」（「盛岡タイムス」 昭和五十七年五月九日）
小野隆祥A「賢治の和賀時代の恋 大正八年成立仮説の幻想的展開」（『宮沢賢治 冬の青春』 洋々社 昭和五十七年十二月）
小野隆祥B「幻想的展開の吟味」（『宮沢賢治 冬の青春』 洋々社 昭和五十七年十二月）
八田二三一「岩手山巓」（『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』 柏プラーノ 平成十四年七月）
岡澤敏男「私説・宮沢賢治の岩手山「銀の冠」と「白い澱み」と」（「ワルトラワラ18」 ワルトラワラの会 平成十五年六月）
島田隆輔A「再編論」（『宮沢賢治研究 文語詩稿叙説』 朝文社 平成十七年十二月）
島田隆輔B「ノート・詩稿本文研究」（『宮沢賢治研究 文語詩稿叙説』 朝文社 平成十七年十二月）
島田隆輔C「青柳亮「メドレー先生を偲ぶ」を読む 「青柳先生を送る」稿の生成にかかわって」（平成二十六年八月 宮沢賢治文語詩研究会資料）

57　車中〔二〕

①稜堀山の巌の稜、　一木を宙に旋るころ
　まなじり深き伯楽は、　しんぶんをこそひろげたれ。
②地平は雪と藍の松、　氷を着るは七時雨、
　ばらのむすめはくつろぎて、　けいとのまりをとりいでぬ。

大意

稜堀山の岩の稜線にある、一本の木が空を回るように見える頃眼じりに深い皺のある伯楽は、新聞紙を広げはじめた。
車窓から見える大地には雪と藍色をした松の木と、氷をまとった七時雨山、薔薇色の頬をした娘はすっかりくつろいで、毛糸でできた毬を取り出した。

モチーフ

「五十篇」にも同題の「車中〔一〕」がある。本作の下書稿にあった「開化郷士」の語は「車中〔一〕」に使われることになるなど双子的な作品のようだ。ただ、「車中〔一〕」では開化郷士をマイナスに評価しているのに対し、「車中〔二〕」ではプラスの評価をしているように思える。文明開化によって社会の上層部に行った人たちの辿った二つの系統を書こうとしたのかもしれない。

語注

稜堀山　滝沢市の燧堀山（四六七ｍ）のこと。字の如く、火打石（燧）を産出した山で、賢治もたびたび足を運んだようだ。下書稿㈠では、「経埋ムベキ山」にもリストアップされる「鬼越山」と書かれていた。この鬼越山は、従来、滝沢市の鬼古里山（四三八ｍ）だと考えられていたが、鈴木健司（「宮沢賢治文学における地学的想像力・補遺二題：＜種山ヶ原＞＜鬼越山＞」「文学部紀要26」文教大学文学部　平成二十五年三月）によれば、賢治は「歌稿〔B〕」の「〔明治四十二年四月より〕」で、「０1　鬼越の山の麓の谷川に瑪瑙のかけらひろひ来りぬ」としているが、鬼越山では瑪瑙を出土しないので、そのすぐそばにあって瑪瑙などの火打石を産出した燧堀山のことを指すのであろうという。鈴木は「歌稿〔B〕」の「大正四年四月」の章に「燧堀やま」を「鬼越やま」に書きなおしている例、また、ほかならぬ「車中〔二〕」の下書稿㈠でも「〔鬼越→燧『堀→石→堀』〕山」と手入れしている例などもあげるが、近くに鬼越集落や鬼越坂もあることから、賢治は鬼越山と記述してしまったのであろう。

まなじり深き　目じりのこと。目じりに深いしわがあることか。ただ下書稿㈢に「眉ふかき」ともあることから、「真剣な表情を浮かべた」という意味かもしれない。

伯楽　読み方は「はくらく」。馬の売買や周旋をする人。また馬医も含めてそう呼んだ。岩手県は馬産地として有名だったので、列車内でも見かけることが多かったのだろう。後述するように当時は博労と伯楽を区別する見方もあったようで、賢治もそれに従っていたようだ。また、賢治がはじめて文語詩を発表した「女性岩手」の編集者である多田保子は、妹トシと花巻高等女学校の同級生でもあったが、大正六年に結婚した相手の多田庫三は伯楽。その父は「全国的に知られた大伯楽（馬喰）であった」という（斎藤駿一郎「多田ヤスの生涯と宮沢賢治・トシ」「宮沢賢治記念館通信70」宮沢賢治記念館　平成十二年五月）。何らかの関係があったかもしれない。

七時雨　八幡平市にある標高一〇六三ｍのコニーデ型火山。「ななしぐれ」と読む。一日のうちに何度も天気が変わるためにこの名があるという。

評釈

無罫詩稿用紙に書かれた下書稿㈠、その左下余白に書かれた下書稿㈡（藍インクで(了)）、その裏面中央に書かれた下書稿㈢、その上部余白に書かれた下書稿㈣、下部余白に書かれた下書稿㈤（青インクで㊢）、定稿用紙に書かれた定稿の六種が現存。ただし、島田隆輔（後掲B）は、『新校本全集』による改稿過程に疑義を呈し、下書稿㈡とされているものが下書稿㈣にあたるのではないかとしている（下書稿㈢、㈣がそれぞれ下書稿㈡、㈢となり、下書稿㈡が下書稿㈣になる）。妥当な判断だと思うが、ここでは混乱を避けるため、『新校本全集』の呼称に従う。生前発表なし。

先行作品に関する指摘はないが、「五十篇」には同じタイトルの「車中〔一〕」が収録されており、形式や内容について、本作と共通する部分がある。信時哲郎（後掲）は「車中〔一〕」に関連する作品、表現に似た個所のある作品として「歌稿〔B〕」の802〜804、童話「氷と後光」や童話「氷河鼠の毛皮」、「孔雀印手帳」に書かれた「〔朝日は窓よりしるく流るゝ〕」、「兄妹像手帳」に書かれた「〔鎧窓おろしたる〕」、「春と修羅 第三集」の「一〇〇一 〔プラットフォームは眩くさむく〕 一九二七、二、一二、」などをあげるが、本作との関連も浅くないことになる。

下書稿㈠は次のとおり。

高洞山に雪うづみ
谷には青き影堕ちるころ
眼じり深く
狐を首にまきつけし
開化郷士と見ゆるひと
ちひさきむすめをだき来り
椅子におろして微笑せり
地平は雪と藍の松
氷を着るは七時雨
鬼越山の尖れる稜
車窓かすかに過ぎ行けば
むすめほのかにわらひせり

小川達雄（後掲）は、「賢治は、花巻に帰る汽車に乗っていたのであろう」とするが、盛岡のランドマークとでもいうべき高洞山（五二二m）のあと、八幡平市の七時雨、滝沢市の鬼越山（＝燧堀山）を見たのだとすれば、南下ではなく北上していたと考えた方がいいかもしれない。ともあれ、盛岡あたりで乗車してきた「開化郷士」（おそらくは賢治の造語で、文明開化以降の新知識を受け入れて、社会の上層に上がった人といった意味だろう）が、娘を抱いて列車に乗り、椅子に座らせたところだろう。父は「微笑」し、むすめの方も「ほのかにわらひ」とあるから、理想的な父子であるように見える。

下書稿㈢では「開化郷士」を「しんぶんを見る村の医師」に変えるという手入れが施され、下書稿㈣では、さらに次のように変化する。

地平は雪と藍の松
氷を着るは七時雨

ばらのむすめはたゞひとり
青きマントをひらめかし
バザーの代を

まなじり深き伯楽の
狐の皮をくつろげて
しんぶんを読みいづるなれ

「一百篇」の「歯科医院」の下書稿(二)にも、「まなじりふかき伯楽は／さらに雑誌をひるがえす」という詩句があり、そこでは伯楽に歯医者の待合室で雑誌を読ませていたが、この後、「伯楽」は「村長」に、そして定稿では「浄き衣せしたはれめ」に姿を変える。

ところで賢治の文語詩には「馬喰」も登場する。「一百篇」の「早春」定稿には、「はた兄弟の馬喰の／鶯いろによそほへる」とある。しかし、こちらは税務吏と三百代言（弁護士）と共に「人民の敵」（下書稿(二)タイトル）ともされる存在としての登場であった。

大正十四年の「岩手毎日新聞」（四月九日）には、「伯楽と『バクロウ』」というYS生なる人物の文章が掲載されている。

> 獣医をハクラクと呼ぶ地方も少くないが現代の獣医諸君はハクラクと云はれる事を忌んでゐる、蓋し伯楽は馬相鑑識にも秀でゝゐたのみならず馬匹疾病の診断治療にもまた堪能なりしものがならんと思はるゝ
>
> 伯楽をバクローと発音する事もまた正当のことであらふ之は一人で鑑識診断を兼たものが分業になつて一方はハクラク一方はバクローとなつたかも知れぬが共に非常に下等になつたことは勿論だ
>
> 殊にバクローに至りては元祖の伯楽の如き鑑識は勿論なく単に利をあさること之れ事とし騙欺偽謀至らざるなきの悪辣手段を以て事をなしたがるため世人の齢せざる所となり一種賤業扱ひにさるゝやうになつたのであらう

『言海』（明治二十二年初版、昭和六年三月第六二八版。ちくま学芸文庫）を見てみると、「ばくらう　博労／馬喰」と「はくらく　伯楽」が別の語として扱われており、前者には「馬ヲ売買スルヲ業トスル者ノ称。馬販」とあり、後者には「(一) 善ク馬ノ駿駑ヲ相ル人。(二) 馬ノ病ヲ療スル者。馬医」とあった。森徹士（「かつての鳥取地方における牛馬治療の状況（私見）」『日本獣医師会雑誌』 日本獣医師会 平成二十一年九月）は、「馬医（伯楽）が一部の公的文書や旧家の史料として保存されているのに対して、博労（馬喰）の施療の記録は文字として殆んど残されて」いないと指摘し、また、博労たちは「本業である牛馬の流通だけに留まることなく物資とともに情報、文化をも同時に運んだ。その上で「博労は我々獣医師の前身のひとつである」と主張するのだが、中には詐欺、恐喝を働く悪徳博労や数十人もの追子を従えていた者も居たと聞く」とし、バクロウの方が一段低く見られていたことを指摘している。

賢治もこのような使い分けをしていたようで、まず「伯楽」に関して言えば、「車中〔二〕」や「歯科医院」では、新聞や雑誌を読み、あるいは娘を椅子に座らせて微笑むような、きわめて知的で礼儀正しい存在として描いている。劇「植物医師」でも、「稲の伯楽づのぁ、こっちだべすか」という使い方をしており、「伯楽」を医者、つまり近代獣医学を修めた紳士という意味付けしているようだ。

一方の、「馬喰」は、例えば童話「バキチの仕事」において、何をやっても中途半端なバキチの身の上を「馬喰の親方」に語らせ、こちらは「だめでさあ、わっしもずゐぶん目をかけました。でもどうしてもだめなんです」という庶民的な語り口にも明らかなように、馬の売買・周旋を請け負い、時に「人民の敵」として嫌われるような、旧時代から続く非近代的職種として描いているように感じられる。

さて、「車中〔二〕」では下書稿(三)の手入れ段階から「開化郷士」の語は消えるが、逆に、これを新しく取り入れて成立したと思われるのが「五十篇」所収の「車中〔一〕」である。

①夕陽の青き棒のなかにて、　開化郷士と見ゆるもの、
　葉巻のけむり蒼茫と、　森槐南を論じたり。

②開化郷士と見ゆるもの、　いと清純とよみしける、
　寒天光のうら青に、　おもてをかくしひとはねむれり。

詳しくは「評釈」（信時哲郎　後掲）に譲るが、六種の原稿が残っている「車中〔二〕」と違って、「車中〔一〕」には二種しか原稿が残っていない。しかも下書稿㈠には(了)でなく、いきなり㊢が付されている。そう思えば、同タイトルであることも含めて、「車中〔二〕」の推敲の途中で、新しく浮かんだアイディアを「車中〔一〕」に書いたという成立事情を考えてもよいように思う。

ただし、「車中〔二〕」が新時代の紳士と娘を描いているのに対して、「車中〔一〕」の下書稿㈠では、「開化郷士」を「狸のごとき大坊主」だと書いている。島田隆輔（後掲C）は、「車中〔二〕」では「開化郷士と見ゆるひと」（下書稿㈠）と書かれていたのに対して、「車中〔一〕」では「開化郷士と見ゆるもの」、つまり、「ひと」ではなく、「卑下したり軽視したりするような場合」（『日本国語大辞典』）に用いられる「もの」として書き留められていることに着目し、「両者の「開化郷士」が異質なことに留意しなければならない」とする。

以上の諸点をまとめれば、「車中〔二〕」では、新時代の知識を身に着けた＜紳士＞を描いていたが、それは「伯楽」という近代的成功者を描くことになり、島田（後掲B）によれば「農民とともにある好もしい〈知識人とその家族〉像のひとつ」が、造型されたということになろう。一方、新時代の知識を身に着けた＜俗物＞の方は、「車中〔一〕」の方で描かれることになったということになろう。

同時に、「車中〔二〕」にあった、成金めいたイメージのある「狐の皮」は、下書稿㈤で削除され、「車中〔一〕」の方では、成金めいたイメージのある「葉巻のけむり」が用いられている。

「車中〔一〕」の＜俗物＞が漢詩人である「森槐南を論じ」るのは不似合だと感じるかもしれないが、槐南は女性の姿態・媚態などを官能的に描く香奩（こうれん）体で名をあげた詩人であることを思えば、やはり、「車中〔一〕」の開化郷士は、＜俗物＞として書き分けられていたのだとしてもよいように思う。

本作では近代文明の恩恵を受けて立身した＜紳士＞の方を描いた作品のようだ。岩手に生きる大衆に愛誦してもらうために編んだのが文語詩だと繰り返し書いてきたが、それにしては、あまり大衆的ではない登場人物であるように思われようが、「一百篇」の「〔水楢松にまじらふは〕」では、銀行家とその息子を題材にしていたことを思えば、ここでは岩手に住む様々な境遇の人の一例として、近代的なエリートが描いていたのだと考えたい。

先行研究

島田隆輔Ａ「『文語詩稿』構想試論　『五十篇』と『一百篇』の差異」（「国語教育論叢４」　島根大学教育学部国文学会　平成六年二月）

赤田秀子「車窓のうちそと「保線工手」を中心に」（「ワルトラワラ13」　ワルトラワラの会　平成十二年八月）

小川達雄「鬼越山の瑪瑙」（『隣に居た天才　盛岡中学生宮沢賢治』　河出書房新社　平成十七年五月）

島田隆輔Ｂ「「伯楽」と「ばらのむすめ」と／文語詩稿『車中〔二〕』」（『宮沢賢治研究　文語詩稿叙説』　朝文社　平成十七年十二月）

信時哲郎「車中〔一〕」（『宮沢賢治「文語詩稿　五十篇」評釈』　朝文社　平成二十二年十二月）

島田隆輔Ｃ「４２　車中〔一〕」（「宮沢賢治研究　文語詩稿五十篇・訳注５」　〔未刊行〕　平成二十四年一月）

58

化物丁場

①すなどりびとのかたちして、　つるはしふるふ山かげの、
　化物丁場しみじみと、　水湧きいでて春寒き。
②峡のけむりのくらければ、　山はに(ホス)円く白きもの、
　おそらくそれぞ日ならんと、　親方もさびしく仰ぎけり。

大意

漁夫のすがたをしながら、　鶴嘴を振り上げる山かげに、
化物丁場はしみじみと、　水が湧き出ているが春はまだ寒さが厳しい。
谷川にはもやがかかって薄暗く、　山の端には円く白いものが見えているが、　親方も
たぶん太陽であろうと感じられる程度のたよりなさで、
さびしげにそれを見上げるだけだった。

モチーフ

散文「化物丁場」を既に読んだ者にはおなじみのテーマだが、もし、何の知識もない読者が文語詩だけを読んだら、寒くて暗い化物のような恐ろしい工事現場で、太陽を見ることもできず、親方さえもさびしくそれを仰ぐだけだという労働の苦しさと厳しさが描かれた作品であるように読めるはずだ。賢治は開業したての路線にはすぐ乗りに出かけていくほどの鉄道ファンで、その熱意は、何度工事をしても崩れてしまうという化物丁場という渾名の鉄道工事現場にまで足を運ぶほどであった。散文「化物丁場」によれば、賢治は化物丁場の話を鉄道工夫から直接聞いたようで、その経験がこの上なく嬉しかったようだが、本作の改稿過程を検証してみると、楽しい側面を封印し、労働の厳しさを前面に出そういう方向に向かっていたようである。

語注

化物丁場　丁場とは工事区間のこと。散文「化物丁場」によれば、橋場軽便線（現・田沢湖線）の延長工事の際、工事が終わったと思っても、理由もわからぬうちに崩壊してしまう区間を、工夫たちはこのように呼んでいたらしい。

すなどりびと　「砂を取る」ではなく、「漁夫」の古名で、「すなどり」に「人」を重ねて言ったもの。その「かたち」というのは服装を指す。散文「化物丁場」には、「赤い毛布でこさえたシヤツを着たり、水で凍えないために、茶色の粗羅沙で厚く足を包んだりしてゐる」とあることから、寒い海で漁をする時の、こうした服装のことを言ったのであろう。「歌稿」の「大正六年七月」の章に「630 高原の／白日輪と／赤毛布シヤツにつくりし鉄道工夫と。」（「歌稿〔B〕」）とある。「アザレア4」（大正六年十二月）に「好摩の土」として発表された短歌のうちの一つでもあるので、馬車鉄道の岩北軌道（好摩から平舘まで）の工事をしていた鉄道工夫の姿かと思われる。鉄道ファンだった賢治は鉄道工夫のいでたちにまで関心を抱いていたようだ。

評釈

「〔冬のスケッチ〕」の第十・十一葉に書かれた下書稿㈠、黄罫（22〇行）詩稿用紙の裏面に書かれた下書稿㈡（藍インクで㋐）、黄罫（22〇行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈢（タイトルは「化物丁場」）、その裏面に書かれた下書稿㈣（青インクで㊢）、定稿用紙に書かれた定稿の五種が現存。生前発表なし。散文「化物丁場」は関連作品。

「〔冬のスケッチ〕」の第十・十一葉に書かれた下書稿㈠は次のとおり。

雪融の山のゆきぞらに
一点白くひかるもの
恐らくは白日輪なりなんを
ひとびとあふぎはたらけり。

二行目までが第十葉、三行目からが第十一葉に書かれている。
「〔冬のスケッチ〕」は、その成立年代や順序、取材日がはっきり特定できていないが、この二葉が連続していることはほぼ確実で、また、これが和賀川を遡った際の連作のうちの一部であることについてもほぼ確実である。同一日の取材による文語詩には、「一百篇」の「早春」や「廃坑」、「未定稿」の「〔二川こゝにて会したり〕」がある。
　下書稿㈡では、化物丁場の文字が現れ、この段階から和賀川での経験と橋場軽便線の工事現場を見に行った際の経験が融合する。

栗うちけぶる山裾に
赤きシャツまた荒縞の
すなどり人のかたちして
つるはしふるふ人の群

ひとひすぐなる崖成せば
その夜はやがてはみ出づる
化物丁場しみじみと
春ちかくして雲さむし

雪げの山のゆきぞらに
一点白くひかるもの
恐らくそれは日ならんと
ひとびとあふぎはたらけり

和賀川と雫石の化物丁場の経験が、なぜ融合したのかと思われるかもしれないが、散文「化物丁場」では、賢治と思われる人物が、黒沢尻（現・北上駅）から東横黒軽便線に乗り換えた車中で、橋場線で工事を担当していたという工夫から化物丁場の話を聞くからであろう。
　さらに言えば、賢治は工事現場を見に行くほどの鉄道ファンで、例えば大正四年八月二十九日の高橋秀松宛書簡では「鉄道工事で新しい岩石がたくさん出てゐます」と書き送っており、おそらくは岩手軽便鉄道の工事現場を見るために十二里ほども歩いたことがわかる（信時哲郎「鉄道ファン・宮沢賢治　大正期・岩手県の鉄道開業日と賢治の動向」「賢治研究96」宮沢賢治研究会 平成十七年七月）。散文「化物丁場」には、「西の仙人鉱山に、小さな用事があ」ったために横黒線に乗ったのだとあるが、この頃、ちょうど横黒線の和賀仙人から大荒沢間が工事中であったから（大正十三年十月二五日開業）、この時の「用事」というのは、おそらくその現場を見に行くためであったのだろう。さらに、散文「化物丁場」には、「〔二月の六七日頃〕」（大正十一年）に、主人公が橋場線の「化物丁場」を訪ねたとも書いてあるから、橋場線と横黒線での経験や描写が混同されたのも無理はないように思う（意識的に混合させたのか、混合されてしまったのかはわからない）。
　散文「化物丁場」には、

　私は、あのすきとほった、つめたい十一月の空気の底で、栗の木や樺の木もすっかり黄いろになり、四方の山にはまっ白に雪が光り、雫石川がまるで青ガラスのやうに流れてゐる、そのまっ白な広い河原を小さなトロがせわしく往ったり来たりし、みんなが鶴嘴を振り上げたり、シャベルをうごかしたりする景色を思ひうかべました。それからその人たちが赤い毛布でこさえたシャツを着たり、水で凍えないために、茶色の粗羅沙で厚

く足を包んだりしてゐる様子を眼の前に思ひ浮べました。

といった美しい描写がなされているが、文語詩の下書稿㈡にあった「栗」「赤きシャツ」「荒縞の／すなどり人のかたち」とはイメージが共有されているように思う。ここには、自然災害の恐ろしさよりも、自然の中で仕事をすることのすがすがしさ、鉄道趣味を満喫できることへの喜びが描かれているように感じられる。

下書稿㈢でも三連形式は維持されるが、下書稿㈣では、二連形式に構成され直す。

すなどりびとのかたちして
つるはしふるふ山かげの
化物丁場しみじみと
水うち湧きて巌赭し

［二月の霧のくら→削］
峡のけむりのさむければ
山はに円く白きもの
おそらくそれぞ日な［んと→削］らんと
ひとびと仰ぎはたらけり

先にあげた下書稿㈡に比べると情景描写が省かれて、ひきしまるが、色彩に乏しく、寒々しい感じがする。『新校本全集』の校異によれば、賢治はさらに次のような手入れを施し、定稿に接続させている。

1行　［ナシ→かり　⇨削］すなどり［『びと→削』　⇨びと］のかたちして

4行　水［うち→削］湧き［ナシ→出で］て［巌赭し→春『近き→寒き』］

6行　峡のけむりの［さむ→くら］ければ

9行　［ひとびと仰ぎはたらけり→『親方→削』］親方(ボス)『は→ぞ→も』『仰ぎて立ちにけり→さびしく仰ぎけり（末尾の「り」を「る」とし、また「り」に戻す）』］

定稿は、ほぼこの手入れに従って書かれるわけだが、四行めの「巌赭し」は「春近き」を経て、「春寒き」に改変される。「巌赭し」は、工夫たちの「赤きシャツ」の描写が消えてから、ほとんど唯一の暖色であったが、ここで削除される。替わりに登場した「春」だが、「近き」の案が早々に捨てられて「寒き」で定稿となっている。また、この寒々とした改変によって、「しみじみと／水うち湧」くという句からも、冷たい水の流れてくる劣悪な仕事場だというイメージが湧くことになる。

六行めの「さむければ」は、前連に「寒き」が登場したことから、重複を避けて改変されたのだろうが、それによって化物丁場がただ寒いというだけでなく、暗いところでもあるというイメージまで背負わされることになっている。

九行めは白く出た太陽を「ひとびと」が「仰ぎはたらけり」と、太陽に向かって人々が働く様子が描かれていたのが、手入れの段階で、ボスでさえも、ただ「さびしく」太陽と思われる方向を仰ぐだけで終わっている。

本作を散文「化物丁場」を既に読んだ後、あるいは賢治の鉄道趣味を知っている目で読めば、賢治が興味を持った「化物丁場」の命名の妙や鉄道工夫との軽妙な会話、美しい自然描写が思い浮かぶかもしれない。また、「近距離の汽車にも自由に乗れ」（「序」「春と修羅　第二集」）たと自ら書いたように、鉄道趣味を満喫した教員時代のことなども思い浮かべることができそうだ。しかし、もし、そうした知識が全くない状態で読んだとしたら、果たして本作の読後感はどうなったであろう。そもそもタイトルからして

「化物丁場」である。童話「〔ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記〕」であれば、「ばけもの世界」や「ばけものパン」が出て来ても、だれも恐ろしく感じることはないだろうが、現実世界において、「化物丁場」と綽名される工事現場で仕事をしたいと思う人は、おそらくいないであろう。

　春と言ってもまだ寒い頃に、しみじみと水が湧きだすために、漁師のように「茶色の粗羅沙で厚く足を包んだりして」防寒・防水対策を施さなければいけない職場である。しかも、そこは暗く、太陽さえもはっきり見えず、現場監督まで「さびしく」させるような場所なのである。杉浦静（後掲）は、「詩人は、シジュフォスの労働に重なるような、〈化物丁場〉で働く工夫たちの労働そのもの、一断面を切り取って見せることに、この詩の主眼をおいている」と書いたが、その通りであると思う。

　思えば、工夫の苦労を顧みることなく、賢治は散文「化物丁場」を楽しげに描きすぎていた。もしかしたら自らの鉄道趣味にほだされて、本質を見誤ったという反省があったのかもしれない。もちろん文語詩の中には、車窓に流れる風景を描いた「一百篇」の「〔鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし〕」などをはじめ、鉄道趣味に満ちた作品もある。しかし、「五十篇」の「〔いたつきてゆめみなやみし〕」のように、鉄道工事が終了すると、解雇されて、路上生活を強いられる朝鮮人労働者たちの行く末を思いやるような詩も書いてもいる。本作の改稿過程を精査し、先入観なしに定稿を読んでみれば、重労働を課せられた鉄道工夫たちの惨状が描かれた作品、すなわち「〔いたつきてゆめみなやみし〕」のような、社会の暗部にスポットをあてた作品だということになるのではないかと思う。

先行研究

渡辺幸子「賢治の文語詩について」（「北流８」　岩手教育会館出版部　昭和四十九年十月）

斉藤文一「ナメクジとブタと錬金術（アルヘミー）、その他」（『宮沢賢治とその展開　氷窒素の世界』　国文社　昭和五十一年十月）

宮城一男「化物丁場」（『宮沢賢治　地学と文学のはざま』　玉川大学出版部　昭和五十二年四月）

小野隆祥「幻想的展開の吟味」（『宮沢賢治　冬の青春』　洋々社　昭和五十七年十二月）

栗谷川虹「気圏オペラ（第二部）」（『宮沢賢治　見者の文学』　洋々社　昭和五十八年十二月）

佐藤勝治「大正八年説の崩壊・拾遺三篇」（『宮沢賢治青春の秘唱〝冬のスケッチ〟研究』　十字屋書店　昭和五十九年四月）

小沢俊郎「成りてはやがて崩るてふ」（『小沢俊郎宮沢賢治論集３』　有精堂　昭和六十二年六月）

島田隆輔「〔冬のスケッチ〕現状に迫る試み／現存稿（広）グループ・標準型（一）における」（「宮沢賢治研究Annual8」　宮沢賢治学会イーハトーブセンター　平成十年三月）

外山正「化物丁場」（『宮沢賢治　文語詩の森』　柏プラーノ　平成十年六月）

杉浦静「宮沢賢治「化物丁場」考」（「大妻国文36」　大妻女子大学国文学会　平成十七年三月）

小林俊子「詩歌」（『宮沢賢治　絶唱　かなしみとさびしさ』　勉誠出版　平成二十三年八月）

59　開墾地落上

①白髪かざして高清は、　ブロージットと云へるなり。
②松の岩頸　春の雲、　コップに小く映るなり。
③ゲメンゲラーゲさながらを、　焦げ木はかっとにほふなり。

④額を拍ちて高清は、　　　　　　また鶯を聴けるなり。

大意

白髪をふりかざして高清は、　乾杯の音頭を取る。

松の生えた岩頸と春の雲が、　コップに小さく映っている。

土地はゲメンゲラーゲ（混在耕地制）さながらに分割されるようで、　伐採されて焼け焦げた木はにおいを発したままだ。

高清は自ら額をうって、　春先の鶯の声に耳を傾けた。

モチーフ

開墾が完成した祝賀会が舞台なのだろう。他の作品にも顔を出す高清が、ここでは村会議員として乾杯の音頭を取り、ご満悦のようだ。口語詩も文語詩も、開墾の完成を祝い、ユーモアを含んで描かれた明るい作品だが、関連作品の書かれた「詩ノート」で同日の作品を読むと、この程度の開墾によって村人の生活が抜本的に改められることはないだろうというリアルな認識が根底にあったようだ。

語注

開墾地落上　『定本語彙辞典』は「落成の意であろう。落成はラクジョウとも読むのでそう書いたか」とする。島田隆輔（後掲）は、大正八年に開墾助成法が公布され、農地確保が奨励されていたことを紹介し、「事業の施行は大正11年から活発となり、昭和3年から激増している。これを郡別にみると平坦部では岩手・紫波・稗貫・和賀郡に多く、山間地帯では上閉伊が多い」という『岩手県農業史』（岩手県　昭和五十四年一月）を引用する。

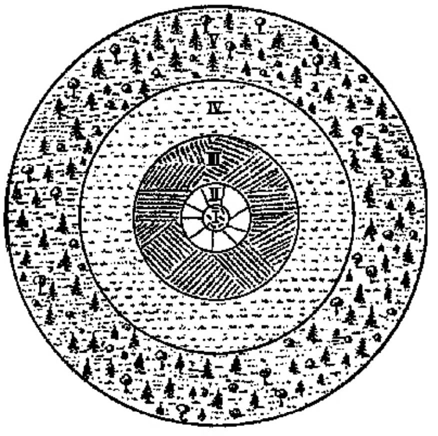
高清　口語詩や文語詩に登場する農村の指導者的立場にある人物。高橋清一、高橋清吉の略称だろう。口語詩にも登場するが、実在の人物を描いたのではなく、複数のモデルがおり、虚構化も施されているのだろうと思う。本作について言えば、関連作品から湯口村の村長・阿部晁がモデルになっているのではないかと思う。

ブロージット　ドイツ語（Prosit）で「乾杯」や「おめでとう」の意。

岩頸　童話「楢の木大学士の野宿」における賢治自身の説明をあげれば、「岩頸といふのは、地殻から一寸頸を出した太い岩石の棒である。その頸がすなはち一つの山である。えゝ。一つの山である。ふん。どうしてそんな変なものができたといふなら、そいつは蓋し簡単だ。えゝ、こゝに一つの火山がある。熔岩を流す。その熔岩は地殻の深いところから太い棒になってのぼって来る。火山がだんだん衰へて、その腹の中まで冷えてしまふ。熔岩の棒もかたまってしまふ。それから火山は永い間に空気や水のために、だんだん崩れる。たうとう削られてへらされて、しまひには上の方がすっかり無くなって、前のかたまった熔岩の棒だけが、やっと残るといふあんばいだ。この棒は大抵頸だけを出して、一つの山になってゐる。それが岩頸だ」。岩手県の矢巾や雫石の近辺にはこの岩頸による奇妙な形の山が多いが、関連作品と思われる「詩ノート」の「一〇五九　〔芽をだしたために〕一九二七、五、九、」には、「こゝはひどい日陰だ／ぎざぎざの松倉山の下のその日蔭である／あんまり永くとまってゐたくない」とあることから、賢治がこの日、湯口村の松倉山（三八四ｍ）の近くまで電車に乗ってやって来たことがわかるが、続けて「けれどもいったい／これを岩頸だなんて誰が云ふのか」と書いている。ただ、『春と修羅（第一集）』の「風景とオルゴール」で、「松倉山や五間森荒つぽい石英安山岩の岩頸か

ら」と書いていたことを思うと、賢治は松倉山をはじめとした湯口村の山々をどう思っていたのかわかりにくい。ともあれ本作は、湯口村に出かけた時の経験を元にしながらも虚構化されている箇所も多い作品であると解しておくことにしたい。ちなみに鈴木健司（「岩頸」意識について」『宮沢賢治の地的想像力〈心象〉と〈現実〉の谷をわたる』蒼丘書林 平成二十三年五月）によれば、松倉山や五間森は岩頸ではないとのこと。

ゲメンゲラーゲ　『定本語彙辞典』によれば、ドイツ語（Gemengelage）で、「地主の農地があちこちに散在していること。散在耕圃。村落共同体内の偏った地味や地質の不平等を取り除き、なるべく公平にするための制度」だという。大塚久雄（「共同体と土地占取の諸形態」『共同体の基礎理論』岩波書店 平成十二年一月。原著は昭和三十年七月刊行）によれば、ゲルマン的な共同体では、㈠宅地および庭畑地、㈡共同耕地、㈢共同地の三層に明白に区分されており、㈡の共同耕地は、三十〜六十ほどの耕区に分かれており、「各村民（＝家族経済）はこの各「耕区」にいくばくかの大きさの、たとえば一エイカー（＝モルゲン）ないし二分の一エイカーというような「耕地片」を私的に占取し、この各「耕区」に分散している耕地片の総体が彼の所有する「耕地」を形づくる。これがいわゆる「混在耕地制」Gemengelageである（単なる耕地の分裂や耕地片の散在の事実と区別しなければならない）」とする。小沢俊郎（「語註」『新修宮沢賢治全集６』筑摩書房 昭和五十五年二月）は、ゲメンゲラーゲを「燃え残りの切株の点在から連想」したのだとするが、イメージがつかみにくい。そこで大塚も引用しているマックス・ウェーバーの『社会経済史原論』（日本での最初の訳本は岩波書店から昭和二年十二月に刊行されている。原著は一九二三年）を見たところ、上段に掲げたような図が掲載されていた。伐採木の断面を見て、賢治がこの図を連想した可能性について考えてもよいかもしれない（Ⅲの部分がゲメンゲラーゲ。同書では「混淆地」と訳されている）。



マックス・ウェーバー、黒正厳訳『社会経済史原論』（岩波書店 昭和2年12月）

評釈

黄罫（22 22行）詩稿用紙に書かれた下書稿（鉛筆で㊢。タイトルは手入れ時に「開墾地配分」→「開墾地落上」）、定稿用紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし。

先行作品の指摘はされていないが、後述するように「未定稿」の「開墾地〔断片〕」は本作の断片稿であろう。したがって、その先行作品である「一〇五九 開墾地検察 五、九、」が、本作の先行作品ということになりそうだ。また、同日に書かれた詩篇が「詩ノート」に残されており、「一〇五九 開墾地検察」とも密接に関わっているので関連作品であるとしたい。

また、「高清」の登場する一連の作品も、広い意味での関連作品と言ってよいだろう。「春と修羅 第二集」所収の口語詩「三六八 種山ヶ原 一九二五、七、一六、」から派生した「春と修羅 第二集補遺」の「〔おれはいままで〕」、「〔行きすぎる雲の影から〕」、「〔朝日が青く〕」、『新校本全集５』所収の口語詩「〔高原の空線もなだらに暗く〕」である。また、「一百篇」の「〔ひかりものせしうなゐごが〕」にも「高清」が登場する。

小沢俊郎（「高清氏登場」「四次元153」宮沢賢治研究会 昭和三十八年十月）は、口語詩に登場する高清のイメージを「旧家の主、そ

れだけの矜持を失なわず、没落していながら誇りを捨て切れない。仕事に対して熱心で冷静な計算もするくせ、政治力がなく事業を次々計画しては失敗してゆく。しかし皆の先に立って事業を起す意義を感じている。人の心を見抜く心理洞察の明もありながら、けっきょくは落魄してゆく姿には一種の落着いた風格さえみられる」とまとめている。小沢（後掲）は、後になって本作で「高清」が登場することに気付くが、文語詩に登場する「高清」のイメージも口語詩と矛盾しないと言う。小沢は「高清」を同一の、実在する人物だと思っているようだが、モデルはいたにしても、同一の人物であるとは考え難く、文語詩ということもあって、かなり自由に虚構化されているように思われる。

　さて、文語詩の下書稿では、「高清」は村会議員になっており、場所は開墾記念の祝賀会のようである。

白髪あたまを日にかざし
村会議員高清は
ビールの泡と云ひにけり

百姓たちのコップには
（数文字不明）春の雲
（数文字不明）て映りける

ゲメンゲラーゲさながらに
持ち分をわけし荒畑は
焦げ木（以下不明）

双の平手にぴたぴたと
額（ひたひ）を叩き　高清は
また（二字不明）を（一字不明）かしめつ
鶯またもなけるなり

「未定稿」には「開墾地〔断片〕」が収められているが、青年団が総出で桜を切って開墾し、それを焼いたという内容のようで、本作との関係は深いと思う。

　　　開墾地
焦ぎ木のむらはなほあれば
山の畑の雪消えて

青年団が総出にて
しだれ桜を截りしなり

この文語詩「開墾地〔断片〕」は、「春と修羅　第三集」所収の「一〇五九　開墾地検察　一九二七、五、九、」の紙面に書かれていることから、その口語詩が先行作品だということになろうが、文語詩「開墾地」と文語詩「開墾地落上」が関連しているとすれば、「一〇五九　開墾地検察」との関連も深いことになろう。

　さらに「詩ノート」には昭和二年五月九日の日付がある作品が六つ収められているが、これらも「開墾地落上」の関連作品だと言っていいだろう。小沢俊郎（「二七・五・九の作品」「四次元142」　宮沢賢治研究会　昭和三十七年十月）は、この作品群について「賢治詩中の第一級ではないだろうが、賢治的特色の豊かな作といえよう」としている。

　さて、「一〇五九　開墾地検察　一九二七、五、九、」は、次のような作品だ。

……墓地がすっかり変ったなあ……
……なあにそれすっかり整理したもんでがす……

……ここに巨きなしだれ桜があったがねえ……
……なあにそれ
青年団総出でやったもんでがす
観音さんも潰されあした……
……としよりたちが負けたんだねえ……
……なあに総一ぁたった一人できかなぐなって
それで誰っても負げるんでがんす……
……苗圃のあともずゐぶんひどく荒れたねえ……
……なあにそれ
お上でうんと肥料したづんで
これで六年無肥料でがす……
……あちこち茶いろにぶちだしてゐる……
……はあ、
苹果の枝　兎に食はれあした
桜んぼの方は食ひあせんで
桃もやっぱり食はれあした……
……兎はとらなけあいけないよ
それでも兎の食はない種類といふんなら
花には薔薇につつじかな
果樹ではやっぱり梅だらう……
……桜んぼの方は食ひませんで
苹果と桃をたべたので……
……そらそら
その苹果の樹の幽霊だらう
その谷そこに突ったたって
いっぱい花をつけてるやつは……
……はあ……
……針金製の鉄索か
この崖下で切り出すんだな……
……はあ　鉛の丸五の仕事でがあす……
……そんなにこれが売れるかねえ……
……はあ
耐火性だって云って売ってます……
……耐火性さなこの石は
あれだな開墾地は……
……はあ
上流の橋渡って参りあす……

同日の取材による「一〇五八　電車　一九二七、五、九、」には、「逞しい村長の肩」や「さあっと曇る村長の顔」、「いま晴れわたる村長の顔」といった詩句があることから、おそらく賢治は湯口村の村長であった阿部晁（任期は大正十三年三月～昭和九年一月）と同道で開墾地の「検察」に来たのではないかと思う。賢治は阿部を「名誉村長」として「五十篇」の「［さき立つ名誉村長は］」などで取り上げ、交流も深かった。阿部の日記である「家政日誌」（栗原敦・杉浦静「「家政日誌」による宮沢賢治周辺資料」「宮沢賢治研究Annual15」宮沢賢治学会イーハトーブセンター　平成十七年三月）に、この日についての記述は見当たらないが、湯口村内の開墾を記念する祝賀会が開催されたなら、村長が乾杯の音頭を取るのは自然な流れなので、少なくともこの文語詩における「高清」のモデル候補としては、阿部をあげておくことができるかと思う。
さて、口語詩「一〇五八　電車」も「一〇五九　開墾地検察」も、ユーモラスで軽やかな調子であり、文語詩もそれを受けたのか明るい調子だが、同一日付の「詩ノート」の「一〇六三　［これらは素樸なアイヌ風の木柵であります］　五、九、」は、次のように書かれている。

斯ういふ角だった石ころだらけの
いっぱいにすぎなやよもぎの生えてしまった畑を
子供を生みながらまた前の子供のぼろ着物を綴り合せながら

また炊爨と村の義理首尾とをしながら
一家のあらゆる不満や欲望を負ひながら
わづかに粗渋な食と年中六時間の睡りをとりながら
これらの黒いかつぎした女の人たちが耕すのであります
この人たちはまた
ちゃうど二円代の肥料のかはりに
あんな笹山を一反歩ほど切りひらくのであります
そして
ここでは蕎麦が二斗まいて四斗とれます
この人たちはいったい
牢獄につながれたたくさんの革命家や
不遇に了へた多くの芸術家
これら近代的な英雄たちに
果して比肩し得ぬものでございませうか

開墾地を検察し、おそらくは祝賀会にも出席しただろう賢治だが、この程度の開墾では、彼らの生活が抜本的に変わる切り札になり得なかったことを見通している。島田隆輔（後掲）は、「下書の開始形には「百姓たち」の姿もみえていた。詩人はそれを抹消して定稿化に向かうと、舞台では「高清」ただひとりがご満悦なのである」としている。『定本語彙辞典』ではゲメンゲラーゲについて「マルクス主義でも土地占有の平等制度として評価」されていると書いているが、山間のわずかな土地を仲間で分け合ったところで、安泰な将来が望めそうにないことを、賢治は十分に知っていたのである。

「詩ノート」には、六日前の日付けで「一〇五三　政治家　一九二七、五、三、」があり、そこには政治家のことを「ひとさわぎおこして／いっぱい呑みたいやつらばかりだ」とし、「まもなく／さういふやつらは／ひとりで腐って／ひとりで雨に流される」と書いていた。また、同日の「一〇五五〔こぶしの咲き〕五、三、」では、自分も関わった花巻温泉の遊園地について「紅い一つの擦り傷」だとし、「一〇五六〔サキノハカといふ黒い花といっしょに〕」では、「革命がやがてやってくる」と過激な言葉を使ってもいた。

しかし、「詩ノート」の「一〇六二〔墓地をすっかりsquareにして〕五、九、」には、次のようにも記していた。

日あたりの荒い岩かどを
巡礼のこゝろもちで
つゝましく
西の温泉から帰ってくる
百姓の家族たち

社会に対する怒りを過激な言葉で綴りながら、社会から疎外され、搾取されているはずの開墾地の百姓の家族たちは、楽しそうに温泉から帰ってきているのである。それをまやかしであると言ったところで、誰のためにもならない。「ゲメンゲラーゲ」という重々しい語、やはり濁音を含んだ「焦げ木」という語、そして、どこからともなく漂ってくる「焦げ木」の匂いを演出することで、賢治はわずかにほろ苦さを演出しながら、全体としては明るくユーモラスな作品に仕立てている。それは、表面的ではあっても、開墾地の落成を祝福しておきたかったからだと考えたい。

先行研究

小沢俊郎「秋田駒から早池峯へ　岩手紀行」（「四次元154」　宮沢賢治研究会　昭和三十八年十一月）
島田隆輔「原詩集の輪郭」（「宮沢賢治研究　文語詩集の成立　鉛筆・赤インク∧写稿∨による過程」〔未刊行〕平成二十二年六月）

60 〔鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし〕

鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし。
鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし、　黒雲そこにてたゞ乱れたり。
七つ森の雪にうづみしひとつなり、　けむりの下を逼りくるもの。
月の下なる七つ森のそのひとつなり、　かすかに雪の皺たゝむもの。
月をうけし七つ森のはてのひとつなり、　さびしき谷をうちいだくもの。
月の下なる七つ森のその三つなり、　小松まばらに雪を着るもの。
月の下なる七つ森のその二つなり、　オリオンと白き雲とをいたゞけるもの。
七つ森の二つがなかのひとつなり、　鉱石（かね）など掘りしあとのあるもの。
月の下なる七つ森のなかの一つなり、　雪白々と裾を引くもの。
月の下なる七つ森のその三つなり、　白々として起伏するもの。
七つ森の三つがなかの一つなり、　貝のぼたんをあまた噴くもの。
月の下なる七つ森のはての一つなり、　けはしく白く稜立てるもの。
稜立てる七つ森のそのはてのもの、　旋り了りてまこと明るし。

大意

鶯宿ではこの月の夜に雪が降っているようだ。
鶯宿ではこの月の夜に雪が降っているようだ、　黒雲がわきたって乱れている。
七つ森の雪に埋もれた一つが、　汽車の煙の下に迫って来ている。
月の下にある七つ森の一つは、　かすかに雪の皺が見えている。
月の光をうけている七つ森の一番はじの山は、　さびしい谷を持っている。
月の下にある七つ森のうちの三つは、　小松がまばらに生えて雪を纏っている。
月の下にある七つ森のうちの二つは、　オリオンと白い雲をかぶっている。
七つ森の二つのうちの一つには、　かつて鉱石などを掘った跡がある。
月の下にある七つ森のうちの一つは、　雪を白々と裾まで引いている。
月の下にある七つ森の三つは、　白々として起伏している。
七つ森の三つのなかの一つは、　貝のボタンをたくさん吹き出し

ている。

月の下にある七つ森のはじの一つは、　けわしく白く稜線が見えている。

稜線のはっきりした七つ森は一番はじにあるところまで、　全てを周り終わってみると明るく感じられる。

モチーフ

賢治は「七つ森」をよく取り上げた。また、鉄道ファンだけあって、列車の窓から見える景色についても、人一倍、興味を持っていたようだ。実況放送のように見えてくる山の様子を連呼して、窓外の景色を映画のように実感させようとしたのだと思われる。ただ、賢治が七つ森をどのような山であると思っていたのかを、他の作品や証言などから考えてみると、案外、七つ森の禍々しさや怖ろしさを伝えようとした作品であったのかもしれない。

語注

鶯宿　岩手郡雫石町にある温泉。読み方は「おうしゅく」。天正年間に加賀から移り住んだきこりが、ウグイスが傷を癒していたのを見つけて温泉を発見し、命名したとされる。

七つ森　盛岡市と岩手郡雫石町の境界付近にある丘。標高はそれぞれ三百ｍほどだが、賢治は多くの作品に登場させている。丘の数や名称はまちまち。国土地理院の地形図では、生森、松森山、塩ヶ森、鉢森、勘十郎森、三手ノ森の六つが載っているが、雫石町の七つ森森林公園の案内によれば、生森（おおもり）、石倉森、鉢森、三角森（みかど）、見立森（みたてのもり）、勘十郎森、稗糠森（ひえぬか）の七つ。

鉱石　吉見正信（後掲）によれば「七つ森に鉱石があった記録は今のところ見当たらない。詩は石倉森を指しているらしいが」とする。

貝のぼたん　吉見（後掲）は、「西山地区や高倉山（雫石スキー場）附近から化石が出土したり、御所地区付近から土器が出土したりするので、それらに＜貝＞にかかわるものがあってのそれを指してのことなのか。雫石に出土する土器には＜貝殻文様＞や＜貝殻条痕文＞のものがあるが、はたして賢治が知っていたことは、七つ森に関してどういうことなのであったろう」とする。また、小林俊子（後掲）は、松が雪を被った姿から連想されたのかもしれない」とする。小林の言うように雪、あるいは山の上に小さな雲か星が出ていたことをこのように形容したのではないかと思う。

旋り了りて　小林（後掲）は、「＜旋る＞（めぐる）は、何度も繰り返し回るの意味である。実際には通り過ぎたのであるから「巡る」を使うべきであるが、賢治の誤使用でなければ、賢治の心では七つ森が繰り返し思い返されていたことを示すのであろう」とするが、下書稿㈡に「月の下にて七つ森／うしろにめぐり汽笛なれり」ともあるように、七つ森の附近で線路が大きく曲がっている所があるために「めぐる」としただけで、「旋る」の用字には特にこだわっていなかったように思う。

評釈

黄罫（22０行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈠（タイトルは「橋場線七つ森下を過ぐ」）、その下に書かれた下書稿㈡（タイトルなし。赤インクで㊢）、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。定稿に丸番号の表記はない。

下書稿㈠は定稿とほぼ同じ内容で十三連構成。下書稿㈡は十六連構成で、定稿に採用されなかったものには、「野は雪青くかゞやきて／けむりの影もあきらけし」（三連目）、「七つ森は月うけて／雪のはざまにねむるなり」（五連目）、「雪のいなむらしろけむり／でんしんばしら黒の影」（十四連目）がある。

さて、本作は五音にも七音にもあまり縛られることなく、下の

句ばかりでなく、上の句にも少しずつ変化を持たせながら橋場線（現・田沢湖線）から見える七つ森の様子を読んだものである。同じ趣旨の作品に『春と修羅（第一集）』所収の「第四梯形」があるが、これには一九二三（大正十二）年九月三十日の日付があり、季節も違い、中身も異なる。

　青い抱擁衝動や
　明るい雨の中のみたされない唇が
　きれいにそらに溶けてゆく
　日本の九月の気圏です
そらは霜の織物をつくり
萱の穂の
　　（三角山はひかりにかすれ）
あやしいそらのバリカンは
白い雲からおりて来て
早くも七つ森第一の
松と雑木を刈りおとし
野原がうめばちさうや山羊の乳や
　沃度の匂で荒れて大へんかなしいとき
　汽車の進行ははやくなり
　ぬれた赤い崖や何かといつしよに
七つ森第二梯形の
新鮮な地被が刈り払はれ
手帳のやうに青い卓状台地は
まひるの夢をくすぼらし
ラテライトのひどい崖から
梯形第三のすさまじい羊歯や
こならやさるとりいばらが滑り
　（おお第一の紺青の寂寥）
縮れて雲はぎらぎら光り
とんぼは萱の花のやうに飛んでゐる
　（萱の穂は満潮
　　萱の穂は満潮）
一本さびしく赤く燃える栗の木から
七つ森の第四伯林青スロープは
やまなしの匂の雲に起伏し
すこし日射しのくらむひまに
そらのバリカンがそれを刈る
　（腐植土のみちと天の石墨）
夜風太郎の配下と子孫とは
大きな帽子を風にうねらせ
落葉松のせわしい足なみを
しきりに馬を急がせるうちに
早くも第六梯形の暗いリパライトは
ハツクニーのやうに刈られてしまひ
ななめに琥珀の陽も射して
《たうたうぼくは一つ勘定をまちがへた
　第四か第五かをうまくそらからごまかされた》
どうして決して、そんなことはない
いまきらめきだすその真鍮の畑の一片から
明暗交錯のむかふにひそむものは
まさしく第七梯形の
雲に浮んだその最後のものだ
緑青を吐く松のむさくるしさと
ちぢれて悼む　雲の羊毛
　（三角やまはひかりにかすれ）

賢治が鉄道を愛し、車窓を移る風景に対しても並々ならぬ関心を持っていたことは繰り返し述べてきたが（信時哲郎「宮沢賢治論〝鉄道の時代〟と想像力」「国文学 解釈と鑑賞937」ぎょうせい 平

成十九年六月）、賢治は窓外の景色を、言葉だけで映画のように見せたかったのではないかと思う。

ただ、賢治が熱心に七つ森を描こうとしたのは事実だとして、七つ森を愛していたのかとなると、疑問に思える点もいくつかある。多くの作品に詠まれ、例えば『宮沢賢治イーハトーヴ学事典』には、「賢治は雫石地区によく足を運び、七つ森に愛着を持っていたことが知られている」（「名勝イーハトーブの風景地」）とも書かれているが、宮城一男（後掲）は、七つ森について「賢治が、死後、お経をあげてほしいと、例の「黒い手帳」にかき残した、三二の山名簿には記されていなかった。どうやら、賢治にとって七つ森は、したしみや愛着はあっても、お経をあげるべき価値はみい出せなかった山――といったところが本音であろうか」とし、弟・清六による「いやあ、兄は、いつでしたか、七つ森のことを、ありゃお化け煙突みたいで、しようのねえ山だなんていって笑ってましたっけ」という述懐を書き留めている。お化け煙突というのは、大正十五年に建設された東京電力の千住火力発電所の煙突のことで、見る角度によっていくつにも見えることで有名だった。七つ森もお化け煙突と同じで、実態が明らかにならなかったために薄気味悪い山だと思われていたのだろう。

小沢俊郎（「録した山々の名」『小沢俊郎宮沢賢治論集３』有精堂 昭和六十二年六月）も、七つ森を「経埋ムベキ山」のリストに載せなかったことについて、「七つ森に対してはお化け煙突的な形態的興味で著しく使用数を増しているのが目立ち、愛着とか好尚とかの対象としてはやや不適当な感じを自身で持ったのではないか。それに七つの頂きはどれを選ぼうにも埋経にはうまくないという思いもあったろう」としている。

岡沢敏男（「賢治の置土産 七つ森から溶岩流まで81 「経埋ムベキ山」と七つ森」盛岡タイムス 平成二十年十一月八日）は、お化け煙突説を批判し、七つの森のどれを選ぶこともできなかったからだろうとしている。岡沢の言うのももっともだが、賢治がこの山を薄気味の悪い山だと思いつづけていたのも事実のようだ。

また、小林俊子（後掲）も指摘するように、童話「山男の四月」でも、また、童話「紫紺染めについて」でも、「町に出てくる山男は七つ森を通り、異界との境界という意味を持たせている」。童話「おきなぐさ」では、「二つのうずのしゅげのたましひが天の方へ行」く物語を書いていたが、彼らが生えていたのも七つ森であった。

大正六年七月、同人誌アザリアの仲間たちとの徒歩旅行に取材した「秋田街道」では、「みんなは七つ森の機嫌の悪い暁の脚まで来た」と書いており、『春と修羅（第一集）』の「小岩井農場」でも、「今日は七つ森はいちめんの枯草／松木がおかしな緑褐に／丘のうしろとふもとに生えて／大へん陰鬱にふるびて見える」と書かれ、先に引用した「第四梯形」でも、「第四か第五かをうまくそらからごまかされた」とある。

盛岡高等農林学校の「校友会会報34」に載せた連作「箱が森七つ森等」（大正六年七月）にも、次のようにある。

箱が森　あまりに　しづむ　ながこゝろ　いまだに　海にのぞめるごとく。

箱が森　枯れし木立にふみ迷ひ　遠きむかしの母をおもへり。

箱が森　たやすきことゝ　来しかども　七つ森ゆゑ得越へかねつも。

箱が森　七つ森とは　仲あしき　なれなるをもて　かゝる　たはぶれ。

をきなぐさ　とりてかざせど　七つ森　雲のこなたにひねくれし顔。

七つ森　青鉛筆を　さゝぐれば　にはかに　機嫌を直したりけり。

水色のそらのこなたによこたはり　まんぢうやまのくらき　かれくさ。

うつろとも　雲ともわかぬ　青(あを)びかり　つめたき丘(をか)の　肩(かた)にのぞける。
そらもまた　しろがねなれば　山(やま)のはの　木々(きゞ)は泣(な)く泣(な)く　宙(ちう)に立ちたり。
たそがれの　汁(しる)にとつぷり　ひたり入る　しら雲(くも)と河と　七つの丘(をか)と。

箱が森に登った際に賢治は道に迷ったようだが、それを賢治は箱が森と仲の悪い七つ森のせいだという。さらに、七つ森に青鉛筆を捧げて機嫌を取ったのだともいう。単なるレトリックとして使っているように思われるかもしれないが、必ずしもそうとばかりは言えない。

森荘已池（「賢治が話した「鬼神」のこと」『宮沢賢治の肖像』津軽書房 昭和四十九年十月）は、賢治が父の政次郎から「怪力乱心を語るな」ときつく止められていたのに、「ほとんど会うごとに、「怪力乱心」ばなしを聞かされていた」と書き、早池峰山の麓の河原坊で見た若い僧の幻について（「春と修羅 第二集」所収の「三七四 河原坊（山脚の黎明） 一九二五、八、一一、」、あるいは「鬼神の中にも、非常にたちのよくない「土神」がありましてねえ。よく村の人などに仇（悪戯とか復讐とかをひっくるめていうことば）をして困りますよ。まるで下等なのがあるんですね」と聞かされたことなどを書いているからだ。

童話集『注文の多い料理店』の序で、賢治は「ほんたうに、かしはばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかつたり、十一月の山の風のなかに、ふるへながら立つたりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書いたまでです」と書いた。これを幻覚や思い込みだといってしまえばそれまでだが、少なくとも賢治にとっては「ほんたう」であるように感じられるさまざまなものが迫って来たのであり、それを「そのとほり」書いたのだろう。

そして最晩年に編まれた文語詩でも、こうした感覚を表現しようという思いはあったようで、例えば「一百篇」の「岩頸列」では、旅芸人の口を通じて、にょきにょきと伸びていくように感じられる岩頸の気味悪さを詠んでいた。

①西は箱ケ(ネツク)と毒(ドグ)ヶ森、　椀コ、南昌、東根の、
　古き岩頸の一列に、　氷霧あえかのまひるかな。

②からくみやこにたどりける、　芝雀は旅をものがたり、
　「その小屋掛けのうしろには、　寒げなる山にょきにょきと、
　立ちし」とばかり口つぐみ、　とみにわらひにまぎらして、
　渋茶をしげにのみしてふ、　そのことまことうべなれや。

③山よほのぼのひらめきて、　わびしき雲をふりはらへ、
　その雪尾根をかゞやかし、　野面のうれひを燃し了(おほ)せ。

中村三春（後掲）は賢治のレトリックに関して論じ、本作における「けむりの下を逼りくるもの。」「かすかに雪の皺たゝむもの。」「さびしき谷をうちいだくもの。」といった「もの」の用法から次のように論を展開する。

＜もの＞は物体（物）とともに人間（者）をも指し、特に人間を卑下する呼称となる。また「もののけ」「ものに憑かれる」のように超自然的な存在をも指示することができ、この場合の＜もの＞は直接の名指しが忌まれる対象（霊魂・妖怪・怪異…）とされる。＜もの＞という語に、本来「霊」の意を認めるのが折口信夫の説であったが、これは今日では藤井貞和の精緻な追究によって否定されている。しかし、こと宮沢の文芸様式においては、必ずしも否定する必要はなく、また否定すること

はできない。つまり、〈もの〉の提喩を用いた「ぬすびと」（『春と修羅（第一集）』：信時注）に端的に示されるように、宮沢の様式は、自然界の物質と人間、さらには人間による人工物との境界線を撤去し、それらすべてにいわば「霊」（精神）を認め、再統合する強力な方向性を帯びているからである。

「〔鶯宿はこの月の夜を雪ふるらし〕」が、月夜の七つ森、雪景色、蒸気機関車の煙… を、言葉だけで構成された映画を作るようにして書いた作品であることは間違いない。しかし、文語詩の推敲に明け暮れる病床の賢治にとっても、七つ森は何かの意志、何かの意識をもった存在であり続けていたようで、できればそうした〈魔力〉までも感じて欲しかったのではないかと思うのである。

先行研究

儀府成一「病める修羅」（『人間宮沢賢治』 蒼海出版 昭和四十六年十月）

中村稔「鑑賞」（『日本の詩歌18 新訂版 宮沢賢治』 中央公論社 昭和五十四年九月）

宮城一男「秋田街道」（『宮沢賢治 地学と文学のはざま』 玉川大学出版部 昭和五十二年四月）

吉見正信「イーハトヴ雫石と宮沢賢治作品」（『改訂版 雫石と宮沢賢治』 岩手総合文化研究所 平成十三年十月）

小林俊子「〔鶯宿はこの月の夜をふるらし〕」（『宮沢賢治 文語詩の森』 柏プラーノ 平成十一年六月）

中村三春「宮沢賢治と《統合》のレトリック その透明と障害」（『修辞的モダニズム テクスト様式論の試み』 ひつじ書房 平成十八年五月）

61 公子

①桐群に臘の花洽ち、　雲ははや夏を鋳そめぬ。
②熱はてし身をあざらけく、　軟風のきみにかぐへる。
③しかもあれ師はいましめて、　点竄の術得よといふ。
④桐の花むらさきに燃え、　夏の雲遠くながるゝ。

大意

桐の木から蠟のようなぼんやりとした淡紫色の花が落ち、　雲ははや夏型に替わっている。

熱の下がった身体にはすべてが新鮮で、　やわらかな風が君に吹きかかってかぐわしい。

それなのに師は自分を戒めて、　数学の解答術を習得しろと責める。

桐の花は紫色に燃えだし、　夏の雲は遠く流れていく。

モチーフ

盛岡中学校卒業後、賢治は岩手病院に入院し、看護婦の一人に恋心を抱いた。しかし、父の許すところとならず、賢治は悶々とした日々を過ごすことになる。本作はそんな賢治の心象風景を語ったものとしてよく引用されるが、定稿では「師」が恋愛にうつつを抜かすのではなく「点竄の術」（数学）をしっかり学べと戒めるものに変わっている。もしこの「師」が、高等農林学校時代の「師」であるとすれば、改稿の途中で高農二年時の「Zweite Liebe

（二度目の恋）」を描くことに変えたと考えることもできそうだ。また、高農時代の友人の恋愛体験を描いた作品だと考えることも可能だろう。いずれにしろ「公子（＝貴公子）」というタイトルが付けられているということは、精神的な煩悶はあったにしても、経済的な煩悶とは無縁の存在であることが匂わされていたのは確かであろうと思う。

語注

公子　貴公子、身分の高い人の子息。「一百篇」の「林館開業」にも登場する。『定本語彙辞典』は、本作における公子について、「やや揶揄的な（若くて世間知らず、といった）ニュアンスがある」とする。

桐群　中国原産のゴマノハグサ科の落葉高木。初夏に薄紫色の花を咲かせる。

朧の花洽ち　「朧」は「蠟」の誤りだろう。ロウのような花が咲いたということ。賢治はロウを、雲や霧にたとえることもあったので、ここでは白くぼんやりとしたという意味に取っておきたい。「洽」は本来、うるおす、ゆきわたる、かなうの意味。『定本語彙辞典』でも入沢康夫（「文語詩難読語句（５）」「賢治研究112」宮沢賢治研究会　平成二十二年十二月）でも、「ろうのはなみち」としているが、ここでもそれに従いたい。

あざらけく　「鮮けく」であろう。すっかり熱が下がって、自分の身がすっきりと新鮮になった感じをいうのだろう。『定本語彙辞典』では、「熱もなくなり体も生き生きして来たので」とする。

軟風　『定本語彙辞典』には「なんぷう。そよ風や微風より、やや強い」とあるが、『デジタル大辞泉』には、「なんぷう」として「１ そよ風。微風。２ 風力階級３の風。風速毎秒３・４〜５・４メートル」とある。読み方は、『定本語彙辞典』では、「詩ノート」の「〔光環ができ〕」に「かぜ」のルビがあることから「かぜ」と読ませようとしている。ただ、それでは音数があわないので、「なんぷう」と読んでおきたい。ただし、「一百篇」の「〔南風の頬に酸くして〕」の読み方と重なってしまうことから、「なよかぜ」「そよかぜ」の案も出しておきたい。北原白秋の『邪宗門』（易風社　明治四十二年三月）には「なよかぜ」とルビがあり、『思ひ出』（東雲堂書店　明治四十四年六月）には「そよかぜ」とルビがある。「異性との交遊や、華美な服装を好んでする青少年の一派」（『日本国語大辞典』）を軟派と言っていたので、そうした意味も含んでいたかと思う。

かぐへる　『定本語彙辞典』では、「軟風が（「きみ」の形容でなく、「きみへの思い」を軟風にたとえたか）香り立つ（かぐわしい）の意であろうか」とする。きみに向ってやわらかな風が吹きかかって香り立っている、という意に取りたい。

点竄の術　文章などの字句を改めること。ただし下書稿㈡では、「解析→①天竄」ともあったことから、和算の点竄術（つまりは数学）を指すのだろう。解析は、当時の中学校では教えておらず、賢治は独学したようで、蔵書には『代数的解析論』（高岡書店　明治四十二年八月）、『微分積分学精義』（高岡書店　昭和三年三月）、『高等数学講座（全十二巻）』（弘道館　昭和四年〜五年）などがあり、「御大典記念手帳」には「昭和四年／解析幾何／毎日三時間／二百日」とある。また、「雨ニモマケズ手帳」には「法華入門ニ際シ／高等数学ニヨル解釈」とあるので、総合すれば、昭和四年頃から、法華経解釈のために解析などの高等数学の勉強を始めたようだ。下書稿㈡に「解析」の文字が現われたのは賢治自身の関心が、当時、そこにあったからだと思われる。また、下書稿㈠の手入れ段階には「蟹行の書」（カニが横に歩くことから横に字が連なることで、洋書を指す）とする案もあった。

評釈

「歌稿〔Ｂ〕」の116と117を原型とし（「歌稿〔Ａ〕」もほぼ同内

容）、無罫詩稿用紙に書かれた下書稿㈠、その裏面に書かれた下書稿㈡（タイトルは手入れ段階で「病后」→「エルテル」→「手簡」。藍インクで㊄）、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。

　先行する短歌は次のとおり。

116　風木木の／梢にどよみ／桐の木に花咲く／いまはなにをかいたまん

117　雲はいまネオ夏型にひかりして桐の花桐の花やまひ癒えたり

　伝記研究ではおなじみの中学卒業直後の岩手病院への入院と看護婦への恋、親の反対による失恋といった事件に取材した作品で、関連作品としては、同じ体験から生まれたと思われる短歌、また、「五十篇」の「〔月の鉛の雲さびに〕」や「流氷（ザエ）」、「未定稿」の「〔夕日は青めりかの山裾に〕」などがあげられよう。

　下書稿㈠から見ていきたい。

桐の木に青き花咲き
雲はいま　夏型をなす

熱疾み（ママ）し身はあたらしく
きみをもふこころはくるし

父母のゆるさぬもゆゑ
きみわれと　年も同じく
ともに尚　はたちにみたず
われはなほ　なすこと多く
きみが辺は　八雲のかなた

わが父は　わが病ごと
二たびの　いたつきを得ぬ
火のごとくきみをおもへど
わが父にそむきかねたり

はるばるときみをのぞめば
桐の花　むらさきに燃え
夏の雲　遠くながるゝ

　実際はどうであったのか、初恋の相手が誰であったのかといったことに対する興味は尽きないが、決定的なことはわからない。

　右の詩句は次のように訂正される。

桐の木に青き花咲き
雲はいま　夏の型なす

熱はてし身はあたらしく
ひとおもふこころはくるし

あるときは遠き夜の火に
たゞともに行かんとねがひ
あるときはたゞきみにのみ
さちあれとうち祈りけり

きみがかたさらにのぞめば
桐の花　むらさきに燃え
夏の雲　遠くながるゝ

　初恋に反対した父母のこと、父が賢治を看病することによって二度の罹患があったことなど、伝記研究には欠かせない話題が、この段階であっさり捨てられて復活することがない。かわりに、

どれだけ思いが切実であったかを語る言葉が並べられる。「五十篇」の「流氷（ザエ）」にある「もろともにあらんと云ひし／そのまちのけぶりは遠き」、「未定稿」の「〔夕日は青めりかの山裾に〕」にある「ふたりぞたゞのみさちありなんと／おもえば世界はあまりに暗く／かのひとまことにさちありなんと／まさしくねがへばこころはあかし」などと共通する言葉やイメージがある。「ともに行かんとねがひ」には、「銀河鉄道の夜」を思い浮かべることもできそうだ。しかし、近藤晴彦（後掲）も指摘するとおり、「失恋の原因が消えてしまい、単なる淡い感傷風景」が書かれるのみになっているのも確かである。そのためか賢治はいくつかの案を書き付けながら、下書稿㈡では次のようなアイディアにたどりついている。

桐の木に青き花さき
雲はいま夏型を鋳たり

熱はてし身はあたらしく
点竄の術（わざ）ははかなき

しかもあれ師は戒めて
解析の術得よといふ

桐の花むらさきに燃え
夏の雲遠くながるゝ

今度は恋が成就できなかった理由が説明されるが、恋自体を示す語が消えてしまっている。

そこで定稿では、「軟風のきみにかぐへる」という句を挿入することで解決をはかるわけだが、下書稿からの変遷を見てくれば、吉本隆明（後掲）が、「この詩の持ってゐる表現の凝縮性が、彼の文語詩のほんとうに無類な独自な境地であると考へます。彼の詩の中で文語詩が最高の作品であると言ふのもこの詩の把ってゐる意義を指してゐるのに外なりません」とし、「この詩は最高峯であると言ふことが出来ます」としているのも、とりあえずは納得できる成果となっている。

ところで、「熱はてし身」とあることから、自伝性が一〇〇％除去されたわけではないことが示されているものの、父との対立ではなく、教師との対立から恋愛を断念したという虚構化は気になるところだ。

岡井隆は「師」は「父親政次郎をおいてほかには考えられない」とし、『定本語彙辞典』でも、「点竄の術」を「商才の意で使っている」としているが、下書稿㈠の内容に引きずられすぎで、山内修（後掲）が「賢治自身の経験を完全に虚構化し、抽象化・一般化した歌なのである。何より題名が「公子」＝貴い身分の子息となっていること自体、虚構性の証明となっている（もっともこれは、賢治の自嘲ともとれるが。）」と考えた方が実状に合うように思う。「完全に」という点には同意しかねるにせよ、下書稿㈠の手入れ段階で「蟹行の書」、つまり洋書を読ませようとしたという設定がある段階で、英語教育を受けたことがないと思われる政次郎以外が想定されていると考えるべきだろう。

さて、虚構化が始まっていることを確認した上で、いったい「師」には、どんな人間がイメージされていたのだろうか。

賢治は岩手病院を退院した時、学校に所属してはいなかったが、もし中学校時代の経験であるように時代を遡らせるのなら、「師」の戒めは、当時の風潮として当然であったと思う。

しかし、下書稿㈡には「解析の術」とあったので、賢治が中学校時代に使った教科書を国会図書館の「近代デジタルライブラリー」で調べてみたところ（ただし必ずしも版は同じでない）、解析は中学校の学習範囲ではなかったようである。また、盛岡高等農林学校の農学科二部の履修科目には、解析も数学もなく、高農研究生時代の大正七年十二月初めに保阪嘉内に宛てた書簡で「来年

中に読まうと思ってゐる本」として「解析幾何」をあげている（ただし、語注にも書いたように、この時には解析幾何に手を出しておらず、賢治が実際にその勉強を始めたのは昭和四年以降のようだ）。その頃の教科書である吉田好九郎『実用解析幾何学講義』（金刺芳流堂　大正八年六月）には、「本書ハ中学程度ノ数学ヲ了リ更ニ解析幾何学ヲ独習セントスル者ノ為ニ編纂シタルモノ」とあり、また、中川銓吉・竹内端三による『解析幾何学教科書』（冨山房　大正九年七月）にも、「本書は高等学校程度の諸学校に於ける解析幾何学教科用として編纂せるものなり」と書かれていることから、視点人物には中学卒業以上の学生が想定されていると考えてよさそうだ。

だとすれば、中学卒業直後の看護婦に対する「Erste Liebe」（「文語詩篇」ノート」）を描いたのではなく、改稿の途中で高農二年の時に経験したという「Zweite Liebe」（同）の記憶を書くことにしたのだと考えることもできるかもしれない。さらに可能性だけ書いておけば、下書稿㈠の手入れ過程で、もし賢治が自伝性を捨てたのだとすれば、友人たちの経験を参考にして本作を書いたと考える道も開けよう。

大正九年七月二十二日、賢治は保阪嘉内宛書簡で「盛岡以来アナタハ女デヒドク苦シンデヰラレタデセウ」と書いている。賢治と嘉内は、何も文学と宗教についてばかり語り合っていたのではなかったようだ。また、「アザリア」の同人であった小菅健吉は、アメリカの留学先から保阪に向かって、「公娼がないのだから一寸困る、やっパリ女がゐないと淋しいからなあ、公娼ぢあなくってもさ、Ｓでもウエトレスでも高いので困る上ニ要領を得させぬからなあ」（大正八年四月）、「なんダか女が恋しい様な気がする、何しろ日本と異って、女ニ接する折がないからだ、白婦人はゐてもＳなどハゐないから、とニ角仏様の様な禁欲生活をせねばならぬから」（大正八年十月）と赤裸々に書いている（「小菅健吉と「アザリア」の仲間」『氏家町史　史料編　近代の文化人』　さくら市　平成二十三年三月）。これを恋愛であるとすべきではないかもしれないが、賢治のすぐ近くにいた友人たちにおける「女」の問題が、どのようなものであったかについては抑えておいて損はあるまい。

もちろん明確なモデルがいたというわけでもないし、いなければならないというわけでもない。ただ、本作が「公子」というタイトルを与えられているということを考えれば、その恋の悩みがいかに深刻なものであったとしても、所詮は高等教育を受けることのできるような上中流階級の悩みなのだということが匂わされている。ことに文語詩定稿を読んでいると、生活のために好きでもない男性の相手をさせられる女性が多く描かれているが、『定本語彙辞典』にあるように、本作における公子が、「やや揶揄的な（若くて世間知らず、といった）ニュアンスがある」のは確かなようである。

先行研究

渡辺幸子「賢治の文語詩について」（「北流８」　岩手教育会館出版部　昭和四十九年十月）
境忠一「初恋の歌と百合の花」（『宮沢賢治の愛』　主婦の友社　昭和五十三年三月）
平尾隆弘「契機としての法華経」（『宮沢賢治』　国文社　昭和五十三年十一月）
岡井隆「文語詩の発見　吉本隆明の初期「宮沢賢治論」をめぐって」（『文語詩人　宮沢賢治』　筑摩書房　平成二年年四月）
牧野立雄「隠された恋」（『隠された恋』　れんが書房新社　平成二年六月）
池川敬司「賢治の初恋と創作　短歌・文語詩を中心に」（『宮沢賢治とその周縁』　双文社出版　平成三年六月）
山内修「非在の個へ」（『宮沢賢治　研究ノート　受苦と祈り』　河出書房新社　平成三年九月）
五十嵐謙吉「桐　百科プロムナード106」（「月刊百科392」　平凡社　平

成七年六月）
近藤晴彦「死の視点Ⅳ」（『宮沢賢治への接近』 河出書房新社 平成十三年十月）
小川達雄「盛岡高等農林学校受験まで」（『盛岡中学生 宮沢賢治』 河出書房新社 平成十六年二月）
吉本隆明「孤独と風童」（『初期ノート』 光文社 平成十八年七月）
沢口たまみ「賢治をめぐる女性たち」（『宮沢賢治 愛のうた』 盛岡出版コミュニティー 平成二十二年四月）
沢村修治「「冬のスケッチ」のミステリー」（『宮沢賢治と幻の恋人 沢田キヌを追って』 河出書房新社 平成二十二年八月）

62 〔銅鑼と看版 トロンボン〕

①銅鑼と看版 トロンボン、 弧光燈（アークライト）の秋風に、
芸を了りてチャリネの子、 その影小くやすらひぬ。
②得も入らざりし村の児ら、 叔父また父の肩にして、
乞ふわが栗を喰（た）ふべよと、 泳ぐがごとく競ひ来る。

大意

銅鑼と看板、そしてトロンボーンの響き、 アークライトに照らし出されて秋風の吹く中を、芸を終えたばかりの曲馬団の子は、 小さな影を落して休んでいるところであった。

曲馬団のテントに入ることができなかった村の子どもたちは、叔父や父親の肩に乗って、自分の栗を食べておくれと、 人波の中を泳ぐようにして競ってやって来る。

モチーフ

秋祭になると、岩手県下の農村にも曲馬団のテント小屋が立ち、遠くの農村からも子どもたちがやってきた。テントには入れなかったものの、農村の子どもたちは、曲馬団のスターに向かって、「自分の栗を食べてくれ」と言って手を差し出す。しかし、叔父や父の肩に乗せてもらうこともなく、旅から旅を続ける「チャリネの子」は、いったいどんな気持ちでここにいたのだろうか。おりしも昭和八年三月に児童虐待防止法が公布され、ようやく曲馬団の子どもたちのことがクローズアップされた時代に、賢治が彼等の境遇を思いやったところに生まれたのが本作だったのではないかと思う。

語注

トロンボン 金管楽器のトロンボーンのこと。サーカスでもよく用いられたようだ。北原白秋の詩集『邪宗門（じやしゆうもん）』（易風社 明治四十二年三月）には、「はしやげる曲馬（チャリネ）の囃子」（「沈丁花」）、「騒ぎやみし曲馬師（チャリネし）の楽屋なる幕の青みを」（「秋の瞳」）とチャリネとのルビがふられて曲馬が登場するが、後者には「過ぎゆきしTrombone（トロムボオン） いづちいにけむ」の句もあり、影響関係を考えてもよいかもしれない。

弧光燈（アークライト） 低電圧・大電流によって電極間の気体と電極が高温となり、強い光を発すること（アーク放電）を利用した電灯のこと。効率の悪さから現在は用いられないが、「一百篇」の「岩手公園」や「病技師［一］」にも登場する。

チャリネの子 明治十九年にイタリアからチャリネ大曲馬団がやってくると、西洋風の曲馬が一大ブームとなった。江戸期にも

曲馬、軽業などの見世物興行はあったが、チャリネの来日以来、西洋風の演目や演出を取り入れた曲馬団が増え、明治三十二年には日本チャリネ一座も生まれる。その他にも多くの曲馬団が生まれ、これらが普通名詞でチャリネと呼ばれることもあった。大正時代にはサーカスの名称も使われ始めるが、その名前が定着するのは、昭和八年にドイツからハーゲンベック・サーカスが来日してからだという。弟・清六（「映画についての断章」『兄のトランク』ちくま文庫 平成三年）によれば、花巻にもサーカスがよく来たようだが、賢治も見ていたに違いない。それは童話「黄色のトマト」でサーカスが描かれていることにも明らかだが、童話「風野又三郎」に「サイクルホール」について、又三郎が「秋のお祭なんかにはよくそんな看板を見るんだがなあ、自転車ですりばちの形になった格子の中を馳けるんだよ。だんだん上にのぼって行って、たうたうそのすりばちのふちまで行った時、片手でハンドルを持ってハンケチなどを振るんだ」と説明するところにも表れていよう。『定本語彙辞典』は「サイクルホール」について、「賢治の造語」とし、「低気圧(cyclone)をさしている」としているが、これは明治四十二年に来日したウィリアム・エルジットが持ち込んで大人気となった「サイカホール」(『世界大百科事典』にはcycleholeのなまりだとある）のことで、おそらく賢治も実見していたと思われる。

得も入らざりし村の児ら　サーカスを見るためにテントに入りたくても入れない村の子どもたち、の意味。長沼士朗（後掲Ａ）は、「満員で入場できなかった」と解釈しているが、金銭的な余裕がないために入れなかった可能性もあろう。「村の児ら」が、金銭的な理由でサーカスを見ることができなかったのだとすれば、童話「黄いろのトマト」と共通であり、子どもたちが貨幣ではなく食べ物を与えようとするという点でも似ているように思う。「一百篇」の「市日」に「栗を食うぶる童」、同じく「〔腐植土のぬかるみよりの照り返し〕」にも「しきりに立ちて栗をたべたり」が登場するが、状況が似ていることから、共通の体験に基づくものだったのかもしれない。

評釈

黄罫（240行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈠（タイトルは「秋祭」）、その左余白に書かれた下書稿㈡（タイトルは「秋祭」。青インクで㊢）、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。まず下書稿㈠をあげよう。

アーク燈液青ければ
そらは螺鈿のごとくなり

業を了へ来てチャリネの子
アーク燈液浴ぶるなり

得こそ入らぬ村の子ら母はその子を肩にして
わが栗を食うべよと
競ひて栗を投ぐるなり

定稿でもあまり大きな変化は見られないが、定稿では冒頭で「銅鑼と看版　トロンボン」と、サーカスに関連する名詞を並べることによって、サーカスの華やかさとにぎやかさを伝えることに成功している。

長沼士朗（後掲Ａ）は次のように書いている。

休んでいるチャリネの子に、村の子供たちが肩車をしてもらって栗を与えるということは、チャリネの子が高いところに居ることになる。この点を、平成一三年九月に群馬県東村に「サーカス学校」を開いた西田敬一さんに伺ってみると、サーカス小屋の外側には、二、三階ほどの高さにある楽隊席に昇っていく

途中に、芸人が休む踊り場のような場所が作られることが多かったという。
　その場所に芸人が出るのは人寄せのための宣伝の意味があり、芸を終えた芸人がそこで休むのは、休むというよりむしろそれも仕事の一つであった。こうした仕事をサーカスの隠語で「ぐらし」（見せるの意）と言い、子供もよくその役割を担ったという。
　なお下書稿㈠には「上げては落す縫の幕」という語句が見られるが、サーカスには満員で入場できない観客のため、短い時間テントの一部の幕を上げて中の曲芸を見せる「あおり幕」という習慣があった（『日本のサーカス』）。村の児らは、この「あおり幕」でチャリネの子の芸を見たものと思われる。
阿久根巌（「曲馬団時代から近代サーカスへ」『サーカスの歴史』西田書店 昭和五十二年二月）も、「サーカス小屋の木戸のところで、ちょっと幕をあげてなかをすき見させ、観客の見たい心理をあおる「あおり幕」という興行方法があった。何時頃からとられたものかはわからないが、まことにうまいやり方であり、現在でも、見世物の見せかたの手法の傑作といえる」と書いているが、たしかに子たちがテントの中に入っていないのに「チャリネの子」に栗を渡したくなったのは、この「あおり幕」のおかげだと思われる。
　さて、弟の宮沢清六（「映画についての断章」『兄のトランク』ちくま文庫 平成三年十二月）は次のように書いている。

　当時の花巻町の氏神、鳥谷ヶ崎神社の秋の三日間の祭りには、朝日座の前のお旅屋が人出の中心となっていました。この一年に一度のお祭りには、たくさんの山車（だし）が御輿さんの前を笛や太鼓や三味線で先導し、後の方には鹿おどりや剣舞がお供をして町内をねり歩いて、最後に朝日座前のお旅屋におみこしが鎮座するのです。
　この秋祭りのために小遣銭をためていた花巻の農村付近の人たちが、二里も三里もの山奥からこのお旅屋に集って、大道みせやたべもの屋で腹をこしらえてから見世物を見るのが何よりの楽しみなのでした。
　見世物の中心は毎年サーカスか動物園で、その横の方には地獄極楽のあやつり人形の年もあれば、南洋から来た大蛇やぬけ首のこともありました。大正のころになってから、サーカスと競って人気のあったのが、まだ珍しかった活動写真で、それが毎年朝日座にかかったのでした。

清六は、続けて「小学生の賢治はこの頃の思い出から後年沢山の作品や童話を書き、「祭りの晩」や「黄いろのトマト」などが生まれたのです」と書くが、たしかに、こうした見聞から童話が生まれたのに違いないと思う。
　童話「黄いろのトマト」では、「遠くの遠くの野はらの方から何とも云へない奇体ない〻音が風に吹き飛ばされて聞えて来るんだ。まるでまるでい〻音なんだ。切れ切れになって飛んでは来るけれど、まるですゞらんやヘリオトロープのい〻かほりさへするんだらう、その音がだよ」と書き、「馬は汗をかいて黒く光り、鼻からふうふう息をつき、しづかにだくをやってゐた。乗ってるものはみな赤シャツで、てかてか光る赤革の長靴をはき、帽子には鷺の毛やなにか、白いひらひらするものをつけてゐた。鬚をはやしたをとなも居れば、いちばんしまひにはペムペル位の頬のまっかな眼のまっ黒なかあい〻子も居た」と生き生きと書いているから、好奇心旺盛な賢治が、サーカスに心を動かさなかったとは考えにくい。
　ただ、賢治がサーカスを本当に楽しいものだと思っていたのかどうかについては、考えてみる必要があるのではないだろうか。
　というのも、「黄いろのトマト」は、サーカスの番人に黄金のよう

に光る立派なトマトを渡したペムペルとネリの兄妹が、番人に「失せやがれ、畜生」と怒鳴られ、トマトを投げつけられるという「かあいさう」な物語だからだ。子どもたちの関心を引きつけておきながら、テントの中に入れるかどうかは金次第というサーカスという見世物のあり方について、賢治が心から賛同していたとは思いにくい。文語詩における「得も入らざりし村の児ら」は、もしかしたら、そんなペムペルとネリの姿を二重写しにしていたのかもしれない。

そして「チャリネの子」である。

「黄いろのトマト」では、「かあいゝ子は、ペムペルを見て一寸唇に指をあてゝキスを送」ったり、サーカスのテントの前には、きれいな絵看板がかけてあり、「看板の中には、さっきキスを投げた子が、二疋の馬に片っ方づつ手をついて、逆立ちしてる処」もあったとされる。しかし、阿久根（「曲馬団時代から近代サーカスへ」前掲書）が書くように、「曲馬団の子供は売られてきたものだとか、身体を柔らかくするために酢を飲ませる、などとの風聞は、昭和の初め頃まで流布されていて、今だに中年以上の人の、曲馬団＝サーカスへの郷愁と一緒についてまわって」いた。「実際食うに困まる一家が、一人前になったらその技で生活できるだろうと、口べらしとして、サーカスに年季奉公に出される子供もいた」ともいう。つまり、サーカスの「かあいゝ子」とは「かあいさう」な子でもあるということは、その時代ならば一般的な了解事項だったのである。

シバタサーカスの支配人や日本仮設興行協同組合専務理事等を務めた室川与一（「サーカス」『さすらう サーカスの世界』白水社 昭和五十六年二月）によれば、「サーカスは民生委員的な役割さえも果している。盗癖の子供たち、夜尿症でどこへも奉公できない子供たち、はなはだしいのになると、これはまた物騒な放火癖の子供もいる。こういう子供も警察、役場、区長さんなども立会って両親に泣きつかれると、こちらもおっかなびっくり一応は預からなければならないような場合も多い」というのだが、たしかにそのような側面もあっただろう。しかし、凶作にあえぐ東北の農村では女の子の身売りが常態化していたという歴史がある。童話「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」では、飢饉の際にネネムの妹のマミミが人さらいに攫われた後、サーカスのスタアになっていたことも思い出されよう。

明治二十七年生まれだという足芸師の上田長吉は、「稽古がきついですよ、リューズでここが赤むけになっても、それでもやっぱりやらすんですよ、……出来るまで、そりゃひどかったです。こんなことまでさせて、ひどい親だなと思ったです。それはほんまの親やと思っとったですよ、何しろまあ、何んにも物心がつかん時分に来たんだから――」と語り、また、「そいで舞台で仕損じたら、もう拷問ってゆうやつがあるんですよ、泣くことも出来ない。絶対声なんか出せない、声なんかだしたら泣きを止めてしまうと……。／拷問っていうのはね、道具部屋の中で、正座させられた膝の上へ道具箱のっけるんですよ。首に綱のロープをかけて、次の自分の芸の番がくるまで、そのままでおらなきゃ駄目です。それがきついですよ」と語っている（阿久根「日本軽業の伝統芸」前掲書）。

竹久夢二「小曲馬師」（『夜の露台』千章館 大正五年八月）は、品川沖のお台場跡の埋立地で、バイロスキイ曲馬の興行を見た乙吉が、「坊ちやんまた明日もいらつしやい」の言葉どおりに、翌日、一人で曲馬小屋に行くと、そのまま曲馬団の一員にさせられて海外を巡業し、青島にたどりついたところで、姉のように慕う日本の娘と一緒にテントから逃げ出すという物語である。当時のサーカス意識が反映されていよう。

また、昭和七年九月二十八日の「東京日日新聞」には、「二万三千の幼き命を虐待から救ふ法律」／いよ〳〵来議会に提出される児童虐待防止法案」という記事が、次のように書き始められている（「神戸大学付属図書館デジタルアーカイブ 新聞記事文庫」に

よる）。

チンダの楽音が旋風のようにまき起つてサーカスの幕があくといたいけな女の子が青竹の上やぶらんこに跨つて危い軽業を始める、自分の子だつたらと思ふ時胸元がきゆうつとひきしめられない人があらうか、華やかなヂャズと乾杯のグラスの音と交錯するバーに現れる遊芸の子供や花売、見るさへ苦痛な事ではなからうか

「児童虐待防止法」は昭和八年四月一日に公布されたが、法案の説明をする丹羽政府委員は、「曲馬曲芸ニ従事シテ居ル児童ガ非常ニ憐レナ状態ニ在リ、ソレ等ハ誘拐セラレテ来タリ或ハ売ラレタリシタ子供ガ、大部分ヲ占メテ居ルト思フノデアリマス」（日本検察学会『児童虐待防止法解義』立興社 昭和八年四月）と語っているから、サーカス側の主張ばかりを聞き入れるわけにもいかないだろう。

先の「東京日日新聞」の記事には、このようなデータも示されていた。

所でこの法案で真先に禁止を食ふのは曲芸、軽業などだがこの中には六歳未満といふ怖るべき幼児が従事してゐるのだ

社会局の調べによると曲馬では二歳未満男一、六歳未満男一、女四、軽業では二歳未満男一、六歳未満男一、曲芸では六歳未満男一となつてゐる

事実はもつとひどい数にのぼつてゐよう、このような子供にあれだけの芸を仕込むには並大抵の方法で出来ないのは当然である、その底にひそむものを想ふ時慄然たるものがあるであらう

不具や畸形に生れついてその上見世物にされてゐる気の毒な子供が

不具者では十四歳未満女二、畸形児は二歳未満男一、十四歳未満女二、またバーなどに流しに来る遊芸人は六歳未満男十四、女二七、十歳未満男三六、女百この大部分が禁止の第三項に当るものだ

かうした商売の子供が社会から一掃される時、われ〳〵は僅でも眼を覆うて歩かねばならない痛ましさをなくすことが出来るのだ

さて、こうして児童虐待防止法案の話題が紙面を賑わしていた頃、賢治は、ちょうど病床で文語詩稿の案を練っていた。「チャリネの子」は、日本中の子どもたちから愛されるような、魅力的な存在であったかもしれないが、同時に政府委員までが「誘拐セラレテ来タリ或ハ売ラレタリシタ子供ガ、大部分」という存在でもあった。室川が語ったように、たしかに民生委員的な側面もあったのかもしれないし、芸娼妓になるのと比較して、どちらの待遇の方がよかったかと考えれば、簡単に結論の出る話ではないかもしれない。しかし、芸娼妓や工員、丁稚奉公を文語詩に登場させた賢治が、ただ「かあいゝ子」だから、村の人たちの娯楽であるからというだけでサーカスの子を取り上げたとは考えにくい。「大正五年三月より」の項に書かれた短歌（「歌稿〔A〕」）にも、「316 曲馬師のよごれてのびしもゝひきの荒縞ばかりかなしきはなし」とあり、賢治はすでにサーカスの「かなしき」部分に注目していたようである。

岩手の農村の貧困は深刻なもので、農村の子どもたちは、サーカス小屋に入るだけの経済的な余裕さえなかったかもしれない。しかし、彼らは「叔父また父の肩に」乗って、「乞ふわが栗を喰うべよと」いって栗を差し出す自由を有していた。そんな農村の子どもたちは、「チャリネの子」たちにとって、どれだけ恵まれ、どれだけ幸福な存在に映っていただろう。

本作は、明るく楽しいサーカスの底に秘められたものを漂わせた詩であったのだと解したい。

先行研究

長沼士朗Ａ「〈銅鑼と看板　トロンボン〉」（『宮沢賢治　文語詩の森　第三集』　柏プラーノ 平成十二年七月）

長沼士朗Ｂ「デクノボーとシュヴァイツァー 生への畏敬の倫理について」（「賢治研究110」　宮沢賢治研究会 平成二十二年六月）

63　〔古き勾当貞斎が〕

①古き勾当貞斎が、　いしぶみ低く垂れ覆ひ、
　雪の楓は暮れぞらに、　ひかり妖しく狎れにけり。

②連れて翔けこしむらすゞめ、　たまゆらりうと羽はりて、
　沈むや宙をたちまちに、　りうと羽はり去りにけり。

大意

いにしえの勾当であった貞斎の、　石碑に低く垂れて覆いかぶさっている、
雪のかかった楓の枝は、　暮れゆく空の、　ひかりが交錯してあやしく色づいている。
群れになって飛んできたムラスズメ（ムクドリ）の大群は、　たまに「りう」とばかりに羽を突っ張らせ、
群れ全体が下降したかと思うと空をたちまちのうちに翔けのぼり、
「りう」と羽を突っ張らせると飛び去ってしまった。

モチーフ

冒頭の「古き勾当貞斎」が誰のことなのか不明だが、下書稿では別の名前であったことから、特にこの「勾当貞斎」を書きたかったわけでもないようだ。地面に這いつくばる碑と、後半で大空を飛翔するムラスズメと対比させ、大空を群れ飛ぶ鳥の軽快さを描こうとしたのだろう。ただ、「りう」というオノマトペはスズメであるより同目のムクドリの方が似つかわしいように思える。

語注

勾当貞斎　『定本語彙辞典』は、「こうとうじょうさい」（「こうとうていさい」も併記）の読み方を提案し、「「勾当」は歴史的に古くは摂関家や宮中でのかなり高い官職名だったが、くだって江戸期には寺や神社の事務系の職名、あるいは盲人の官名（検校の下、座頭の上）であったりした」とし、貞斎については「ヒント未詳の人名」とする。ただ、盛岡市の北上川沿いには前九年の役で滅ぼされた安倍家の本城があり（現・盛岡市安倍館町）、六つに分かれた郭のうち勾当館と呼ばれる建物があったことが関連しているかもしれない（『もりおか物語（拾）』（「安倍館付近」　熊谷印刷　手話五十四年十一月）。勾当館は安倍頼時の長男・井殿に関係するのではないかとのことで、また、江戸後期の和算家・郷土史家であった横川良助による『内史略』の一部には、「厨川古城の辺、勾当塚、勾当渕と云へるは貞任の一族に盲目ありて勾当の職たり彼幻術を行ひ、中夏六月にも雪を下し、晴和の天気にも忽然として風雨雷電を呼、貞任没落の時に至て渕に身を投じて死す、即其の古跡也と」とあることが紹介されている。『安倍館・里館遺跡 昭和62年度発掘調査概報』（盛岡市教育委員会 昭和六十三年三月）によれば、数次にわたる発掘調査を行った結果、勾当館の建物や柱列などの遺構が確認されたというが、石碑のようなものについての言及はない。ただ、安倍家にまつわる伝説や言い伝えは、岩手県内にたくさん残っており、「勾当」のみでなく、「貞」の字（安倍貞任の貞）を使ったことなどから、安倍家にまつわる伝説が背景にあったのかもしれない。もっとも、下書稿には「名医小野寺青扇」とあっ

たことから、長く温めていたモチーフではないようだ。また、富田広重『滅び行く伝説口碑を索ねて』（大正十五年十二月　富田文庫）によれば、仙台に新田義貞（ここにも貞の字がある）の妻・勾当内侍の墓だと言われる碑があったために勾当台（こうとうだい）と呼ばれる通りがあり（あるいは伊達正宗に愛された盲目の狂歌師・花村勾当の屋敷があったためだともいう）、大正九年四月に発行された「仙台市全図」（金港堂書店）によれば、現在と同じくこの通りに面して県庁や市役所があり、当時は宮城図書館や物産陳列所もあったことから、賢治もこの通りを歩いたことはほぼ確実だと思われることから、ここモデルとなっている可能性もあるかもしれない。

むらすゞめ　群れをなしているスズメ。ただし、『日本語大辞典』には、「岩手県西磐井郡・胆沢郡」「宮城県」の方言でムクドリを指すという記述もある。秋の夕暮れ時などに、スズメもムクドリも群れで行動するが、「りうと羽は」る飛び方、また、「沈むや宙をたちまちに」という群れの動きについては、ムクドリの方がふさわしいように思う。

評釈

黄罫（22０行）詩稿用紙に書かれた下書稿（タイトルは「名医小野寺青扇」↓後に削除。鉛筆で㊢）、定稿用紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし。先行作品、関連作品についての指摘はなされていない。

　下書稿は次のとおり。

名医小野寺青扇が
いしぶみ低く垂れ覆ひ
雪の楓は暮れぞらに
黄なるその芽を覗かする
並みて翔けこしむらすゞめ
たまゆらりうと羽はりて
宙に停るたちまちに
りうと羽はり去りにけり

　定稿と比べてみても、誰の碑かが変わっているくらいで、大きな変化はないようだ。名医の小野寺青扇ならば、明治・大正の世にもいそうだが、勾当となると、さすがに時代も遡った印象が残る。郷土の歴史に詳しい者ならば、貞という字が貞任を思わせるというだけでなく、安倍家には勾当にまつわる伝承が残っていることなども思い浮かべることができたかもしれない。

あるいは、仙台の県庁や市役所前には新田義貞の妻・勾当内侍の墓だと言われる碑があり、賢治も何度かは歩いたはずの道だけに、これがモデルなのかとも思われる。

　さて、本作には、先行作品や関連作品が見当たらず、短いこともあって、なかなか解釈の手がかりが見つからないが、本作の主眼が、碑に名前が刻まれ、長く地面に縛り付けられる人間の方ではなく、自由に空を飛び回り続ける鳥たちの方にありそうなことは想像できる。というのも、前半には、碑に楓の枝が「低く垂れ覆」う様が描かれ、上方から下方に向って降りてくるイメージであるのに比べて、後半では「りうと羽はりて」「りうと羽はり」と、オノマトペを使いながら、軽快に空を飛ぶ鳥たちの様子が描かれているからである。

　ところで、ここで飛ぶ鳥は本当にスズメなのだろうか。ムクドリのことをムラスズメという地区も岩手県にはあるということなので、ムクドリである可能性を考えてもよいと思う。というのは、どちらもスズメ目で、スズメもムクドリも大群で飛ぶことは同じだが、小柄なスズメの飛び方は「りうと羽はり」というにはバタバタとせわしなく、また、「沈むや宙をたちまちに」という詩句も、群れ全体が一つの生き物であるかのように飛ぶムクドリの方がふ

さわしいように思うからである。

　童話「鳥をとるやなぎ」では、ムクドリの群れがとぶ様子が次のように描かれている（これが「未定稿」の「［エレキに魚をとるのみか］」の元になっている）。

> 向ふの楊の木から、まるでまるで百疋ばかりの百舌が、一ぺんに飛び立って、一かたまりになって北の方へかけて行くのです。その塊は波のやうにゆれて、ぎらぎらする雲の下を行きましたが、俄かに向ふの五本目の大きな楊の上まで行くと、本当に磁石に吸ひ込まれたやうに、一ぺんにその中に落ち込みました。みんなその梢の中に入ってしばらくがあがあがあがあ鳴いてゐましたが、まもなくしいんとなってしまひました。
>
> 　私は実際変な気がしてしまひました。なぜならもずがかたまって飛んで行って、木におりることは、決してめづらしいことではなかったのですが、今日のはあんまり俄かに落ちたし事によると、あの馬を引いた人のはなしの通り木に吸ひ込まれたのかも知れないといふのですから、まったくなんだか本当のような偽のような変な気がして仕方なかったのです。

百舌（もず）としか書かれていないが、中谷俊雄（「ムクドリ」『賢治鳥類学』新曜社 平成十年五月）が、「宮沢賢治の百舌やもずは、すべてモズではなくムクドリなのだ」と指摘しているように、ここに登場する＜百舌＞はムクドリなのである。モズは群れをつくることがなく、飛び方もムクドリである。「索引」で調べてみると、「むく鳥」の用例が一例だけあったが、「渡りのむく鳥」（ムクドリは基本的に留鳥）とあるので、本当にムクドリであったかどうか定かでない。ともあれ賢治テクストにおけるモズやムクドリに注意が必要なことは確かだ。もちろん、だからといって本文語詩における「むらすゞめ」までがムクドリであったということにはならない。ただ、動植物に詳しいはずの賢治でも、スズメ目のモズとムクドリ、スズメのあたりで名称の不一致があったことは確かなようで、だとすれば、「むらすゞめ」についても、本作における描写からするとムクドリであった可能性もあるように思う。

先行研究

島田隆輔「定稿化の過程」（「宮沢賢治研究 文語詩集の成立 鉛筆・赤インク＜写稿＞による過程」〔未刊行〕 平成二十二年六月）

64　涅槃堂

①鳥らの羽音重げに、　雪はなほ降りやまぬらし。
②わがみぬち火はなほ燃えて、　しんしんと堂は埋るゝ。
③風鳴りて松のさざめき、　またしばし飛びかふ鳥や。
④雪の山また雪の丘、　五輪塔　数をしらずも。

大意

カラスたちの羽音も重たげで、雪はまだ降り続けていていてやまないようだ。
自分の身体は熱で火照ったままで、しんしんと涅槃堂は雪に埋もれていく。
風が鳴って松の木がさざめき、鳥たちもまたしばし飛び交う。

雪の山や雪の丘が並び、　五輪塔は数知れぬほど立っている墓所の様子が思い浮かぶ。

モチーフ

青年時代の参禅経験に発する作品のようだが、推敲が進むと共に涅槃堂の中で病臥している僧が、カラスの群れやしんしんと降る雪、五輪塔といった寒々しい墓所の様子を思い浮かべるという詩になっている。架空の存在を視点人物にしているようだが、「涅槃堂」にたとえられているのは、おそらくは花巻の自宅。定稿を手入れする段階で「わがみぬち火はなほ燃えて」と書き換えているのは、肺を病んでいる賢治自身を描いているのではないかと思われる。

語注

涅槃堂　「禅宗で、病気になった僧が入る堂」（『日本語大辞典』）。盛岡市北山にある曹洞宗・報恩寺を舞台として書かれたようだが、小倉豊文（後掲）は「自分の病室を私かに涅槃堂と思っていた」のだろうとし、大角修（後掲）や『定本語彙辞典』も同じ見解。

わがみぬち火はなほ燃えて　みぬちは身の内。病気のために熱が出ていることを指す。あるいは結核のためにいつも熱っぽいことを言おうとしていたのかもしれない。

五輪塔　仏教の世界観によると、万物は地・水・火・風・空の五大要素でできているとされ、輪とはすべての徳を具備するということ。五輪塔とは、地・水・火・風・空を、それぞれ方形・円形・三角形・半月形・団形にかたどったものだが、平安時代の半ばから死者への供養塔あるいは墓標として用いられた。花巻市の身照寺にある賢治の墓も五輪塔が象られている。「春と修羅 第二集」に「一六 五輪峠 一九二四、三、二四、」があり、また「五十篇」には、それを文語詩化した「五輪峠」がある。

評釈

「雨ニモマケズ手帳」の一三一・一三二ページに書かれた下書稿㈠（タイトル案は「涅槃堂中」→「羅漢堂看経」）、無罫詩稿用紙に書かれた下書稿㈡（タイトルは「涅槃堂」→「病僧」→「チク寺」→「三昧堂」）、黄罫（22０行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈢（タイトルは「涅槃堂」。鉛筆で㊄）、定稿用紙に書かれた定稿の四種が現存。生前発表なし。

「五十篇」の「〔たそがれ思量惑くして〕」の下書稿㈠は、本作の下書稿㈠が書かれた「雨ニモマケズ手帳」の直前の一二九・一三〇ページに書かれているが、どちらも報恩寺を舞台としたもののようで、内容的にも通底しているところがある。

「「文語詩篇」ノート」の「21　1916」の「一月」の項に次のような記述があったが削除されている。文語化されたことを示すのだろう。

報恩寺　◎寒行に出でんとして。
銀のふすま、◎暁の一燈。◎警策
　◎接心居士、

品行悪しといふとも
　なほこの僧のまなざしを見よ。

下書稿㈠は「涅槃堂中」あるいは「羅漢堂看経」というタイトル案があった。「羅漢堂」は盛岡市北山にある曹洞宗・報恩寺の羅漢堂のことだろう。賢治は盛岡中学在学中に北山の寺で下宿生活をしたが、その際に報恩寺で参禅したこともある。

朋らいま羅漢堂にて
朝づとめ了るらしきに
われはしも疾みて得立たね
むなしくも冬に喘げり

羅漢堂看経を終へ
座禅儀は足の音にまじり
衆僧いま廊を伝へば

あゝ聖衆来ますに似たり

　視点人物である「われ」は僧であり、病んで涅槃堂に臥している。僧の仲間たち（＝朋）の声が、そこに聞こえてきたということだろう。フィクションであるが、盛岡高等農林学校の友人・大谷良行（「賢治君を思う」『宮沢賢治の周辺』 川原仁左エ門 昭和四十七年五月）は、「私共は松井先生や学生二十人位で願教寺（真宗）中心に仏教青年会を作つていたので、日曜日によく会合していた。で宮沢君と一緒に寮を出て、私共は願教寺に、彼れは独り別れて隣の報恩寺に行つて尾崎文英の教えを受けていた」と書いており、また、賢治の親友だった保阪嘉内の日記にも「報恩寺見物、漱石の訃」（漱石が没したのは大正五年十二月）とあることから、盛岡高農の友人がイメージされているのかもしれない。
　最終行にある「聖衆」は、この段階から後は消えてしまう言葉だが、「臨終の時、阿弥陀仏が諸菩薩とともに迎え来て、念仏行者を浄土に導くこと」（『広説仏教語大辞典』）を意味する。「一百篇」の「二月」にも登場する。僧たちの足音が、阿弥陀仏たちが迎えにくる音のように聞こえたということだろう。浄土教的な考え方なので、賢治の法華経信仰と合わず、また、禅宗にも似つかわしくない。しかし、同じ文語詩の「二月」に登場していることを思えば、重複を避けるために削除したと考えるべきかもしれない。
　以上の詩句は、全て青鉛筆によるもので、黒鉛筆で後から書き込まれたのが次の詩句である。

かの町の淫れをみなに
事ありと朋ら云へども
なほしかの大悲の瞳
おゝ阿難師をまもりませ

雪の山また雪の丘
ふるさとは／はるかに／遠く
ふみわけん／みちは／知らずも

　前半は報恩寺住職の尾崎文英のことなのだろう。尾崎は「巨大なニセ坊主」と陰口をたたかれるような存在だったというが、その人物や学識は賢治をひきつけたという。親戚の関登久也に向って、賢治は「あの和尚はいつわりは言いません」と言ったらしい（「盛岡高等農林学校時代」『新装版宮沢賢治物語』 学習研究社 平成七年十二月）
　続く下書稿㈡は「涅槃堂」と題され、次のように変化する。

よべよりの雪なほやまず
松が枝も重りにけらし
棟遠き羅漢堂には
衆僧いま盤若を転ず

定省を父母に欠き
養ひを弟になさで
ひたすらに求むる道の
疾みてなほ現前し来ず

起き出でて北をのぞまじ
松なみのけむりにも似ん
雪の山また雪の丘
ふるさとのいとゞ遠しも

かの町の淫れをみなと
事ありと人は云へども
なほしかの大悲のひとみ
おゝ難陀師をまもりませ

松の枝かすかに枝（ママ）れて
どと落ちし雪の音あり
衆僧いま看経を終へ
こなたへとどめくるごとし

まず、「定省を父母に欠き／養ひを弟になさで／ひたすらに求むる道の／疾みてなほ現前し来ず」が加わったのが目につく。しかし、これは最晩年の賢治の状況であって、中学や高等農林時代に賢治が思っていたことではない。若き日の経験やイメージを元にして、晩年の心境を述べているのだろう。
ただ、「ふるさとのいとゞ遠しも」とあることから、第三者化して描こうという意図も残っていたようだ。あるいは、大角修（後掲）が書くように、昭和六年九月二十一日に東京で高熱を発し、家族に宛てて遺書をしたためた経験を、この「ふるさと」の文字に託していたのかもしれない。
冒頭部分と結末部分で、松の枝に雪が積もる描写が加わっているが、これは「［たそがれ思量惑くして］」の下書稿㈠、つまり「雨ニモマケズ手帳」の前ページのメモから借りてきたものである。

この段階では、下書稿㈠にあった「朋ら」や「聖衆」を引き継いでいないが、それでもずいぶん多くの要素を抱え込んでいるように感じられる。
下書稿㈡の手入れ段階では、「三昧堂」と題され、次のようになっている。

黒鳥か羽音重げに
雪はなほ降りやまぬらし
廓遠き鬼子母堂には
同学（とも）らいま暁（あけ）の看経（かんきん）

けさしなほわが得も死なず
人知らに堂はうもるゝ
みちのくのこのはてにして
人しらにはてんとすれや

よろぼひて窓にのぞまば
松なみのけむりにも似ん
雪の山また雪の丘
いづちともみちははるは（ママ）し

灯を赤きかの街にして
事ありと人はそしれど
何ぞかの盤石み声
おお阜諦師をまもりませ

松の枝あえかに折れて
どと落ちし雪の音より
ともらいまつとめを了へて
しづかにも廊を来るらし

ここでは、「定省を父母に欠き／養ひを弟になさで／ひたすらに求むる道の／疾みてなほ現前し来ず」という賢治自身の身の上に引きつけ過ぎたと思われる詩句が削られ、「みちのくのこのはてにして／人しらにはてんとすれや」というように、単なる病気ではなく、まさに死が目前にせまった状況であるように改稿される。また、黒鳥が現われたり、鬼子母堂などというう寂しく、陰気な語がつかわれているのも注目される。

このあと、最終連の松の雪が落ちる件りは「五十篇」の「〔たそがれ思量惑くして〕」の下書稿㈢（㊢が付されている）に戻され、「三昧堂」（涅槃堂）では「松のさゞめき」が残される。

「〔たそがれ思量惑くして〕」の定稿は次のとおり。

①たそがれ思量惑くして、銀屏流沙とも見ゆるころ、
　堂は別時の供養とて、盤鉦木鼓しめやかなり。

②頬青き僧ら清らなるテノールなし、　老いし請僧時々に、
　バスなすことはさながらに、　風葱嶺に鳴るがごとし。

③

④時しもあれや松の雪、　をちこちどどと落ちたれば、
　室ぬちとみに明るくて、　品は四請を了へにけり。

「〔たそがれ思量惑くして〕」では、参禅の際に、銀屏風がタクラマカン砂漠（流砂）に見え、僧たちのテノールとバスの声がパミール高原（葱嶺）に吹く風のように聞こえ、そこで松の枝から雪が落ちる音が聞こえ、はっと思うと法華経の如来寿量品が聞こえてくる…　といった、仏教のエキゾチックな魅力が満載された詩になっている。

一方の「三昧堂」（「涅槃堂」下書稿㈡）の最終形態は次のようなものになる。

黒鳥か羽音重げに
雪はなほ降りやまぬらし

みちのくのこのはてにして
人しらにはてんとすれや

雪の山また雪の丘
五輪塔数をしらずも

風鳴りて　松のさゞめき
またしばし鳥はとびかふ

「〔たそがれ思量惑くして〕」とは、双子的な作品だったはずなのに、「涅槃堂」は、暗く、静かで、希望の光さえ差し込まない感じである。松の枝から雪が「どど落ち」るイメージが消えただけでなく、「同学」のモチーフもいつしか消え、音や動きといえばカラスと風しか残っていない。死を目前にした病僧の淋しい心象風景だけがクローズアップされることになる。

「灯を赤きかの街にして」という師の遊蕩のモチーフも消えている。赤という色合い、そしてなによりも、病僧の心境にしてはなまめかしすぎるからだろう。さすがにこれは「〔たそがれ思量惑くして〕」の仏教的世界に転用するわけにもいかなかったようだ。あるいは「一百篇」の「〔燈を紅き町の家より〕」における冒頭の一行、つまり「燈を紅き町の家より」にイメージも言葉も近いため、ここから受け継がれたと考えることもできるかもしれない。

「涅槃堂」とタイトルをつけられた下書稿㈢で、ようやく㊢の印が付けられている。

黒鳥か羽音重げに
雪はなほ降りやまぬらし

けさしなほわが得も死なず
人知らに堂はうもるゝ

風成りて松のさゞめき
またしばしとびかふ鳥や

雪の山また雪の丘
五輪塔数をしらずも

さて、このように盛り込まれすぎていたイメージは、推敲が進むにつれてそぎ落とされ、ついには下書稿㈠にあった「われはしも疾みて得立たね」という病僧のモチーフだけを残して定稿が成立している。

もう一度、定稿を掲げてみよう。ここでもタイトルは「涅槃堂」である。

①鳥らの羽音重げに、　雪はなほ降りやまぬらし。
②わがみぬち火はなほ燃えて、　しんしんと堂は埋るゝ。
③風鳴りて松のさざめき、　またしばし飛びかふ鳥や。
④雪の山また雪の丘、　五輪塔　数をしらずも。

賢治は、いったん定稿を書き終えたあと、「わが命なほ今朝燃えて」とあった二行めの文字を消し、「わがみぬち火はなほ燃えて」に改めている。理由はわからないでもない。「わが命なほ今朝燃えて」では、斎藤茂吉の「あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり」(『赤光』)をも思わせるような、病気にかかっても、たくましく生き延びていこうという生命力を感じさせてしまいかねないからだ。

事実、定稿の二行め欄外には「?」が付されている。つまり、一度書き上げられた定稿の詩句に、おそらくは賢治自身が違和感を感じ、その後に「わがみぬち火はなほ燃えて」に書き改められたのではないだろうか(同じ時に、冒頭に「黒鳥か」とあったのが「鳥らの」に改められているが、こちらには「?」等の印はない)。

ところで、身の内に熱を持ちながら、死を意識しなければいけない病気とは結核のことを指すのではないだろうか。だとすれば賢治は、最後の最後になって、現在の自分自身の心境を病僧に託して述べた、ということになるのかもしれない。

先行研究

小倉豊文「朋らいま羅漢堂にて」(『「雨ニモマケズ手帳」新考』東京創元社　昭和五十三年十二月)
大角修「涅槃堂」(『宮沢賢治　文語詩の森　第三集』柏プラーノ　平成十四年七月)
信時哲郎「[たそがれ思量惑くして]」(『宮沢賢治「文語詩稿　五十篇」評釈』朝文社　平成二十二年十二月)

65　悍馬〔一〕

①廐肥(こえ)をはらひてその馬の、　まなこは変る紅(べに)の竜、
けいけい碧きびいどろの、　天をあがきてとらんとす。

②黝き菅藻の袍はねて、　　叩きそだたく封介に、
雲ののろしはとゞろきて、　　こぶしの花もけむるなり。

大意

運んできた厩肥を振り払ったその馬の、　眼は紅い竜のようで、炯炯と青くそまったガラスのような、　天まであがいて登って行きそうだ。

黒い海藻の上着をはねとばして、　暴れ馬を叩きに叩く封介に、雲はのろしのように高く上がり、　コブシの花の香も漂っている。

モチーフ

農村における人と馬とのかかわりを描いた作品。封介は、その本名・(伊藤) 忠一とともに「春と修羅　第三集」によく登場する実在の人物であるが、全ての登場作品で怒っている。賢治は瞋恚（しんい）の感情を嫌ったが、封介の怒りは農作業がうまくいかない際に発する怒りであって、賢治にも覚えのあるものであった。余所者を警戒し、排除しようとする視線に囲まれた賢治にとって、ストレートに農作業に関する怒りを表現してくれる封介 (忠一) は、安心できる存在だったのかもしれない。

語注

悍馬　精悍な馬。すなわち「才気が鋭く、勇敢なこと。また、そのさま。現在では、からだつき、顔だち、目つきなどが引きしまっていて、鋭くたくましく、活力があるように見えるさまをいう」(『日本国語大辞典』・「精悍」の項) という特徴を持った馬のこと。ただし、「気が荒く、制御しにくい馬。あばれうま。あらうま」(『デジタル大辞泉』) ともある。ここでは、「あばれうま。あらうま」の意味に近いかと思う。

厩肥（こえ）　家畜小屋の敷きわらと糞尿を混ぜて発酵させた肥料。「きゅうひ」や「うまやごえ」とも呼ぶが、ここでは「こえ」と読ませている。

まなこは変る紅の竜　大塚常樹 (「赤い眼の強迫観念（オブセッション）」『宮沢賢治 心象の記号論』朝文社 平成十一年九月) は、馬の赤い眼に修羅性を見出し、馬が竜の意識に飲み込まれているのだとする。また、王敏 (後掲) は、竜が馬に化身させられている『西遊記』の影響を見ようとしている。大塚が指摘するように「山地の稜」や「歌稿〔B〕」の294a295にも似た表現があり、賢治が好んだ言い方のようだ。

けいけい　漢字をあてはまれば炯々。「目が鋭く光るさま」「物がきらきら光りかがやくさま」(『日本国語大辞典』) であろう。大角修 (後掲) が書くように、馬の眼を指すとともに、青い空が輝いていることも示そうとしているのだろう。

黝き菅藻の袍　虻を追いはらうために馬に黒い菅藻を付けていたことを指す。「五十篇」の「〔盆地に白く霧よどみ〕」にも「藻を装へる馬ひきて」という句がある。柳田国男も『遠野物語』(明治四十三年) で「馬は黝き海藻を以て作りたる厚総を掛けたり。虻多き為なり」と書いている。ただし、大角修 (「読書会リポート」「賢治研究100」宮沢賢治研究会 平成十八年十月) は、先行作品「一〇四六 悍馬一九二七、四、二五、」の下書稿㈡に「黝い菅藻の袍を着た／歴山封介押へる押へる」とあることから、「この作品の菅藻は封介が着ていたと解釈するのが妥当だということが、この日の読書会で確認された」とし、文語詩については (後掲)、封介が「黒い海藻のように見えるぼろの綿入れをまとった」のだとする。しかし、口語詩の下書稿㈠には「木綿角縞の袍を着た／歴山封介押へる押へる」ともあり、同じく口語詩の下書稿㈢への手入れには「黝い菅藻の蠅よけをなでながら」とあることを思うと、最終的には馬が「黝き菅藻の袍」を着ているという表現で落ち着いたとも考えられる。島田隆輔 (後掲) は、「ここでは封介の身なりの比喩に重ねられているように

もみえるが、厩肥を下した馬に掛けてやるために、封介が負うていたのかもしれない」とする。

雲ののろし 雲がのろしのように高く上がっていたのだろう。ただ、木村東吉「考察と資料『春と修羅 第三集』『詩ノート』創作日付の日の気象状況」（『近代文学の形成と展開 継承と展開8』和泉書院 平成十年二月）によれば、「終日快晴で、作品は幻想性が強い」とのこと。

評釈

先行作品である「春と修羅 第三集」所収の口語詩「一〇四六 悍馬 一九二七、四、二五、」の下書稿㈠が書かれた黄罫（240行）詩稿用紙の裏面に書かれた下書稿（手入れ段階で「悍馬」のタイトル。鉛筆で⑤）、定稿用紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし。

まず、「一〇四六 悍馬」の最終形態からみていこう。

封介の厩肥（こえ）つけ馬が、
にはかにぱっとはねあがる
眼が紅く 竜に変って
青びいどろの春の天を
あせって掻いてとらうとする
厩肥が一っつぽろっとこぼれ
封介は両手でたづなをしっかり押へ
半分どてへ押つける
馬は二三度なほあがいて
やうやく巨きな頭をさげ
竜になるのをあきらめた
　雲ののろしは四方に騰り
　萱草芽を出す崖腹に
　マグノリアの花と霞の青
ひとの馬のあばれるのを
なにもそんなに見なくてもいゝ
おまへの鍬がひかったので
馬がこんなにおどろいたのだと
こぼれ厩肥にかゞみながら
封介はしづかにうらんで云ふ
封介は一昨日から
くらい厩で熱くむっとする
何百把かの厩肥をしばって
すっかりむしゃくしゃしてゐるのだ

後半で封介が賢治に向かって憎まれ口をきいているようだが、その部分を削除したのみで文語詩が成り立っているように見える。

封介というのは、香取直一（「宮沢賢治、その魅力4 アレキサンダー封介とその愛馬」「東洋の人と文化30」人と文化社 昭和六十二年十一月）も書いているように、「袍（ほう）」とあわせて「封（ほう）介」と読ませたかったのではないかと思う。あまり日本人的な名前ではないようだが、「暁」（『宮沢賢治「文語詩稿 五十篇」評釈』朝文社 平成二十二年十二月）の「評釈」にも書いたように、ここには島崎藤村が「鳥なき里」（『落梅集』春陽堂 明治三十四年八月）で、「鳥なき里の蝙蝠や／宗助鍬をかたにかけ／幸助網を手にもちて／山へ宗助海へ幸助」と書き、「幸助（コースケ）」、「宗助（ソースケ）」の音韻のおもしろさを利用していたことが影響しているのではないかと思う。大角修（後掲）は、馬にホウホウと掛け声をかけていたことからつけられたのではないかというが、その可能性も考えてよさそうだ。

また、モデルについては、香取（前掲）が書いているように、大正十四年に花巻農学校で一年学び、羅須地人協会の隣に住んでいたことから、賢治の独居自炊時代に密接な関係があったと思われる伊藤忠一だとしてよいだろう。「一〇四六 悍馬」の下書稿

㈠（「詩ノート」）には「歴山忠一」とあり、また、馬を飼っていたことからもほぼ間違いなさそうだ。

伊藤は羅須地人協会の集まりに当初より参加し、「労農試論三講」を「むづかしすぎて途中でゐねむり」しながらもノートに書きつけ、合奏団ではフルートを担当したという。また、羅須地人協会の集会の案内状の配布も賢治から依頼された人物である。

ところでこの伊藤忠一だが、「春と修羅　第三集」には、よく登場する。もちろん全ての忠一なり封介が、実際の伊藤忠一をモデルにしたものであるかどうかはわからないにしても、どの農民とも、どの教え子とも違った扱いを受けていることは注目されてよい。

『新校本全集』の索引で調べてみると、まず、「七三八　はるかな作業　一九二六、八、二〇、」があがっている。「ここの畑できいてゐれば／楽しく明るさうなその仕事だけれども／晩にはそこから忠一が／つかれて憤って帰ってくる」とある。次にあがっているのは「、一〇一七　〔水は黄いろにひろがって〕」である。ここには「忠一がいま吠えるやうに叫んで／その巨きな黄いろな水に石をなげる」とある。北上川が増水した時の作品だ。そして、『新校本全集５』所収の口語詩「〔鳴いてゐるのはほととぎす〕」もあがっており、ここでは早朝から鳴きはじめるホトトギスの声で眠れずに「ぶりぶり憤りながら忠一が起きる」とある。「〔鳴いてゐるのはほととぎす〕」は「暁」（「五十篇」）として文語詩になったが、ここでも「醒めたるまゝを封介の、　憤りほのかに立ちいでゝ、」とある。そして本作でも、やはり暴れ馬に怒り、そのきっかけを作った賢治に対しても怒っている。

多くの作品に登場しながら、これほどいつも怒っている存在というのは、極めて異例ではないだろうか。本人のキャラクターの問題なのかもしれないが、当の伊藤は、賢治のことを気持ちの変化が激しく、「めったになれなれしくなど近づけるような人ではながんした」と語っており（菊池忠二「詩碑付近」『私の賢治散歩下巻』菊池忠二平成十八年三月）、本当のところはわからない。瞋恚（いかり）の感情を嫌ったはずの賢治だが、伊藤の怒りについては、どうも好意的に書いているように感じられるのである。

「春と修羅　第三集」において、賢治は農村の人々から疎まれる存在であったことをさまざまに書いている。例えば、「七一五〔道べの粗朶に〕　一九二六、六、二〇、」では、「するどく斜視し／あるひは嘲りことばを避けた／陰気な幾十の部落」と書き、「七三五　饗宴　一九二六、九、三、」では、「地主や賦役に出ない人たちから／集めた酒を飲んでゐる」場面で、「こどもはむぎを食ふのをやめて／ちらっとこっちをぬすみみる」と書く。「一〇四二〔同心町の夜あけがた〕　一九二七、四、二一、」では、「町をさしてあるきながら／程吉はまた横眼でみる」と書く。「一〇七七金策　一九二七、四、二一、」では、「金持とおもはれ／一文もなく／一文の収入もない／そしてうらまれる」と書いている。「一〇四二　〔同心町の夜あけがた〕」にあるように、「われわれ学校を出て来たもの／われわれ町に育ったもの／われわれ月給をとったことのあるもの／それ全体への疑ひや／漠然とした反感ならば／容易にこれは抜き得ない」とあるとおりで、ただ農村に賢治が存在しているというだけで、村人たちは疑いの眼を賢治に向けたというのだ。

それに比べると、忠一の怒りはわかりやすい。どれもが農作業に直接に発する単発的な怒りである。「一〇四六　悍馬」において、忠一が賢治に向かって憎まれ口をたたく描写なども、極めて純粋な怒りである。忠一が怒っていたのは、賢治が盛岡高等農林学校を出たインテリだからでも、町に住んでいたからでも、サラリーマン教師をした経験があったからでもない。「ひとの馬のあばれるのを／なにもそんなに見なくてもいゝ」と思ったからであり、また、「おまへの鍬がひかったので／馬がこんなにおどろいた」からである。

いつでも怒って、いつでも何か文句を言っている存在といえ

ば、賢治童話の登場人物ならば悪役ということになろう。しかし、伊藤の怒りは、農作業をしている者にとっては誰もが共通して感じるようなものであり、人を妬んだり、陥れたりするような陰湿なものではない。おそらくは人類が農業を始めて以来、ずっと感じ続けてきた類のものであり、これは収穫の喜びが自然に生まれるような、自然な感情であった。そのために文語詩として書き留めておくべきことだと思ったのかもしれない。

賢治も「七二八〔溧雨はそそぎ〕一九二六、七、一五、」で、農作業の途中で突然の雨に見舞われた経験について、「わたくしはひとり仕事を忿る」と書いていたが、これも瞋恚ではないだろう。

さて、そんな意味で、賢治を異質な存在であると冷ややかな視線を送るのではなく、同胞として、農民らしい喜怒哀楽を存分に見せてくれる存在。そして都合のいいことに、伊藤は隣家に住んでいたことから、一挙手一投足までが見聞きしやすい存在であり、文語詩のモデルとしては最適の人物である。

賢治は昭和五年三月十日、伊藤に対して「たびたび失礼なことも言ひましたが、殆どあるこではじめからおしまひまで病気（こころもからだも）みたいなもので何とも済みませんでした」という書簡を送っているが、賢治が失礼なことを言ったのは、おそらく精神的な距離が近かったからであろう。

先行研究

大角修「悍馬〔二〕」（『宮沢賢治　文語詩の森　第二集』　柏プラーノ　平成十二年九月）

王敏「白馬の原形」（『宮沢賢治、中国に翔る想い』　岩波書店　平成十三年六月）

島田隆輔「原詩集の輪郭」（「宮沢賢治研究　文語詩集の成立　鉛筆・赤インク〈写稿〉による過程」〔未刊行〕平成二十二年六月）

66　巨豚

①巨豚ヨークシャ銅の日に、　金毛となりてかけ去れば、
棒をかざして髪ひかり、　追ふや里長のまなむすめ。

②日本里長森を出で、　小手をかざして刻を見る、
鬚むしやむしやと物喰むや、　麻布も青くけぶるなり。

③日本の国のみつぎとり、　里長を追ひて出で来り、
えりをひらきてはたはたと、　紙の扇をひらめかす。

④巨豚ヨークシャ銅の日を、　こまのごとくにかたむきて、
旋れば降（くだ）つ栗の花、　消ゆる里長のまなむすめ。

大意

巨大なヨークシャー種の豚が夕焼に染まって、　金毛となって駆け去ると、　棒を高く上げながら髪の毛を光らせ、　追いかけるのは村長の愛娘であった。

日本の村長が森を出て、　小手をかざして腕時計を見ると、　むしゃむしゃした髭でむしゃむしゃと物を噛むと、　羽織った青い麻布もけむったように見えた。

日本国の徴税吏が、　村長を追いかけて森から出てくると、　襟を広げてハタハタと、　紙の扇子であおぎはじめる。

巨大なヨークシャー豚は夕日の中で、　コマのように身体を傾けて、

走り回っていると栗の花が落ちるが、　村長の愛娘は姿を消したまま戻ってこない。

モチーフ

ヨークシャー種の豚を追いかける里長の娘を描いていたが、やがて豚の持ち主だと思われる里長が登場し、文語詩になると里長を追う徴税吏も登場している。いずれにせよ非文明国＝日本を象徴する風景として賢治は彼らを描いたのであろう。しかし、本作にはどことなくユーモアが漂い、最終連は豚と娘とが消えてしまうという異類婚姻譚の趣も醸し出されている。賢治は農村批判を語るふりをしながら、一つの説話や昔話のようなものを語りたかったのかもしれない。

語注

巨豚ヨークシャ　ヨークシャー種の豚には大中小があり、大型のものは顔のしゃくれが少なく、耳が立ち、体重は三〇〇～三五〇キロになる。ただし大ヨークシャー種は、昭和十年代の段階で、「明治初年頃にはチェスターホワイト種、大ヨークシャー種等も輸入されたが、之等は殆ど普及されずに終はつ」（北海道農業研究会「豚の品種」『豚と其の飼ひ方』淳文書院　昭和十一年二月）たという。童話「［フランドン農学校の豚］」に出てくる「ヨークシャイヤ」は強制肥育のため三十五貫（一三一・二五㎏）まで太らされて屠られている。

日本里長　日本の村長の意だろう。読み方は音数の関係から「にっぽんりちょう」だろう。第三連の「日本の国」は、音数から考えて「にほんのくに」。日本がまだまだ文明化できていない野蛮な国であると揶揄するために「日本」が使われているのだろう。

みつぎとり　徴税吏。村長（里長）を徴税人が追いかけてくるとなると、童話「税務署長の冒険」において、ユグチュユモト村の名誉村長はじめ校長や議員までが密造酒造りに加担していた物語が思い出される。当時の東北地方における酒の密醸はかなりさかんだったというが、「里長を追ひて」きたのに、追いかけられているはずの里長がむしゃむしゃとものを食べていることからすると、密醸を暴くための内偵であったように思われる。

評釈

「春と修羅　第三集」所収の「一〇三二〔あの大もののヨークシャ豚が〕一九二四、四、七、」の下書稿㈢が書かれた黄罫（220行）詩稿用紙の裏面に書かれた下書稿（青インクで㊢）、定稿用紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし。先行作品は「一〇三二〔あの大もののヨークシャ豚が〕」。また、『新校本全集』にも書かれているとおり、「一百篇」の「退耕」とは共通点が多く、姉妹稿とも言えるかと思う。

「退耕」の定稿は次のようなものである。

①ものなべてうち訝しみ、　　こゑ粗き朋らとありて、
　黄の上着ちぎるゝまゝに、　栗の花降りそめにけり。

②演奏会(リサイタル)せんとのしらせ、　いでなんにはや身ふさはず、
　豚はも金毛となりて、　はてしらず西日に駈ける。

金毛の豚が西日に向かって駆けていくという点、栗の花が降ってくるという点など、共通性は明らかだ。ただ、「退耕」は農村に外部から入った人間自身の感慨であるのに比べて、「巨豚」に登場するのは、豚、まなむすめ、里長、みつぎとりの四者で、農村の内部の人間を描こうとしている点に違いがある。また、言葉の使い方や扱われる題材も、「巨豚」にはどこかコミカルな要素があるように感じられる。

さて、「一〇三二〔あの大もののヨークシャ豚が〕」の原点とも

いうべき「詩ノート」から見てみたい。

扉を推す
森と
西に傾く日
となりの巨きなヨークシャイヤ豚が
金毛になり
独楽のやうに傾きながら
まっしぐらに西日にかけてゐる
追ってゐるのはその日本の酋長の娘　かけてゐる
棒をもって髪もみだれかゞやきながら豚を追ふ

　天沢退二郎（後掲）の指摘を待つまでもなく、「酋長」という語には、相手を未開人であると見做す偏見が含まれている。天沢は「アイヌの首長とその娘のイメージに基づいている」とし、「「日本」を「未開人の国」と見立てる批評的な視線と、それを「日本の里長」に言いかえることによって、逆にアイヌ（ならアイヌ）の視点からそれを差異化する隠れたまなざしとを重合せている」とする。「一百篇」の「「二山の瓜を運びて」」の先行作品には「熟蕃」（教化され帰順した台湾先住民のこと）という言葉もあったから、賢治の未開人のイメージはアイヌに限ったわけではないだろうが、いずれにせよ、日本人が未開人・蛮人であるという思いが込められていることには違いない。日本人のどこを未開・野蛮だとしているかと言えば、村長の娘が豚を追いかけているからだと考えるのが自然だろう。つまり、動物の生命を奪って食べようとする様を野蛮と見做したのだと思われる。

　本当に一人の女性が「巨豚」を屠ることができたのかという疑問も残るが、「詩ノート」は、あまり虚構化がなされていない段階だと思われるので、実際にこうした場に賢治は居合わせたようである。

　玉那覇徹「屠殺及び貯肉法」（『養豚全書』三光堂　明治三十四年十二月）が、「最も簡便にして適当なる方法」として紹介する屠殺法であっても、「早朝豚を小屋より出して四足を縛りて横に臥せしめ或は図の如く逆向きに懸下し額の正面を木槌様のものを以て撲ちて之れを殺し直ちに咽喉部の大動脈を切り充分多量に出血せしむべし血液は器物に受け取るべし若し之れを食用にするならば必ず豚を横に臥せしめて頸部に力を加ふべし」とあり、娘一人でこうした作業ができたとは考えにくい。まして相手が百キロを越すような巨豚であったとすれば、ほとんど不可能だろう。

　もっとも賢治の教え子だった照井謹二郎は、稗貫農学校の「畠山校長が校舎北側の農舎前で柄の長いマサカリを持って豚を殺すのを見た。この時、生徒たちや宮沢先生は建物の後ろの方でかくれていた。死んだ豚は解剖実習により解体され、その後、小野寺（豚を預かった花巻農学校の生徒：信時注）らは大きな釜で肉汁を作り、みんなで食べた」（佐藤清「四時」『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』柏プラーノ 平成十二年九月）ともいうので「棒」（マサカリ？）一本で、豚を仕留めようとしていた可能性もゼロではない。

　しかし、玉那覇によれば「生活する間は体液はアルカリ性なれども非常に煩悶せしむるか又は久しければ酸性となるアルカリ性は腐敗し難く酸性となれば速に腐敗し易し故に可成的体液の変性せざる様に急に撲殺すべし」ともいうので、走り去っていく豚を追いかけて撲殺するということは、まずなかっただろうと思われる。「フランドン農学校の豚」でも、「連れ出してあんまりギーギー云わせないようにね。まずくなるから」という言葉があったとおりだ。

　それでは里長の娘が何をしていたのかということになるが、玉那覇の本に「今後養豚せんとするものは運動場を設け豚をして適当の運動をなさしめざるべからず」（「管理法」）ともあり、「フランドン農学校の豚」でも、豚を無理に運動させるシーンがあるこ

とから、運動させるために走らせていた可能性もある。ただ、盛岡高等農林学校の草刈虎雄講師も「豚に就いて」(「岩手毎日新聞」大正十二年一月五日)で、豚には適度な運動をさせるべきだが、大人の豚であれば運動の必要はなく、暗い部屋に閉じ込めておけばよいと書いており、もしも本作における「ヨークシャ」が「巨豚」というほどの大きさになっていたのだとすれば、運動させる必要はなかったということになろう。

賢治がこうしたことをどこまで知っていたのかを確かめるすべはないが、このヨークシャ豚は、遅かれ早かれ人間によって命を奪われる運命にあったことに変わりなく、だとすれば、いかなる理由であったにしても、豚を追いかける「むすめ」を野蛮だとしていたことには違いないようだ。

ところで、渡辺宏（Kenji Review33　http://why.kenji.ne.jp/review/review33.html 平成十一年十月）の次のような指摘は興味深い。

確かに大ヨークシャーやランドレースといった品種は大型の豚ですが、肉用に出荷されるのは普通生後半年くらいのものなので、そんなに巨大というものではありません。あまり大きくなるまで育てると、肉が固くなってしまうのと、飼料効率が悪くなるので、食用の豚は長期間の肥育はしません。

「巨豚」という呼び方にふさわしいのは、種雄豚で、これは一見のけぞるほど大きなものです。

この「巨豚（種雄豚）」になると、すでに肉としての価値はほとんどなく、通常の価格で肉にするというわけにはいきません。(廃用＝屠殺後は飼料などにされるようです。)

要するに、「巨豚」は「食われる者」とは言いにくいのです。存在としては「生殖する者」と言う方があたっています。

私はここでは種雄豚と里長のまなむすめを「オシラサマ伝説」の馬と娘にあてはめた、エロチックな情景を考えています。

文語詩には「旋れば降つ栗の花」とあるが、これは七月頃の季節を示すというためだけでなく、歌人・詩人の木村草弥（「K-SOHYA POEM BLOG」 http://poetsohya.blog81.fc2.com/blog-entry-210.html）が「栗の花は、ちょうど男性のスペルマの臭いと同じ香りを発する。だから栗の花というと、文学的には「精液」あるいは「性」の暗喩として使われることが多い」というとおりで、渡辺のいう「エロチックな情景」というのも、決して牽強付会だとは言えない。もしかしたら、賢治はこの異類婚姻譚の趣を、未開・野蛮なものとしたのだと考えていたのかもしれない。

さて、「詩ノート」に書かれた下書稿㈠の次には、黄罫（22０行）詩稿用紙に「一〇三二　豚」と題されて次のように書かれたという。

あの大もののヨークシャ豚が
けふははげしい金毛(け)に変り
独楽(こま)よりひどく傾きながら
西日をさしてかけてゐる
もうまっしぐらかけてゐる
かけてゐる　かけてゐる
まっ黒な森のへりに沿って
まだまっしぐらにかけてゐる
追ってゐるのは
棒をかざして髪もかゞやく
その日本の酋長の娘
栗の梢でぐらぐらゆれてゐるのは夕日
森のこっちにあらはれて
小手をかざして日を見るものは
青い麻着た酋長で
娘も豚ももう居ない

この段階で「酋長の娘」だけでなく「酋長」が初めて登場する。原稿に手入れする段階で、酋長は里長に書き換えられ、また、「なにかむしゃむしゃ食ひながら」が付け足される。そして、文語詩の下書稿㈠になると、今度は「日本の国のみつぎとり」までが登場し、文語詩はにぎやかになる。

　里長の娘や里長が豚の命を狙っていたとすると、その里長をさらに狙う者として「みつぎとり」が登場したということになる。賢治のことであるから弱肉強食、あるいは食物連鎖をイメージしていたかもしれない。天沢（後掲）は、「里長は税を払ったか？払えたら何も問題はないが、そんな、現金などあるわけはない。しかし、むしゃむしゃ物食む里長に、あわてているけはいはないし、悠然と扇子をつかう徴税吏も、まるで落ち着いているではないか。そうだ、現金がなければ、豚で払えばいいのだ！　何しろこの豚は、美味で知られたヨークシャイヤの、それも大中小あるうちの大型、すこぶるつきの＜巨豚＞である！」と書く。追いかけているはずの相手が目の前にいながら、徴税吏は里長を捕縛するわけでも、詰問するわけでもなさそうもないことを、天沢は里長に現金の持ち合わせがないからだと解したわけである。

　しかし、賢治は童話「税務署長の冒険」では、ユグチュユモト村の名誉村長や校長、議員までが密造酒造りに加担していた物語を描いている。そう思えば、本作における徴税吏は、里長が密醸に関わっているのではないかと内偵している最中なのだと考えることもできるかと思う。

　本作が密造酒に関わるのではないかという指摘は、すでに沢口勝弥（「宮沢賢治『税務署長の冒険』その社会的背景と租税思想」「宮沢賢治研究Annual8」宮沢賢治学会イーハトーブセンター　平成十年三月）がしているが、栗原敦（「「濁密」事情・「大正十年家出出京」事情　新聞報道から」「賢治研究37」宮沢賢治研究会　昭和六十年二月）が紹介した大正三年十月二十二日の「岩手毎日新聞」のような事件があることを思えば、大ヨークシャーを飼っている「日本里長」が、密造の嫌疑をかけられているという仮定も許されると思う。

> 紫波郡紫波村村長藤尾寛雄（四八）は其妻と共謀の上濁酒を密造し自家用に供しゐたるを盛岡税務署員のために発見され酒造税法違犯として過般当区裁判所へ起訴されたるは既報せしが昨日同区廷に於て宮島判事高木検事正の係りにて公判開廷せり

報道によれば、この藤尾村長は、密造防止会の組合員でもあり、財産も一万円以上あったという。賢治は命ある動物を殺して食べようとしている点を、野蛮な振る舞いだとしたのだと考えられるが、里長については、平然とした顔をして、おそらくは密造防止の会などを主宰しながらも濁酒を作っている点を野蛮だとしたのかもしれない（「濁酒」や「どぶろく」とは、今日では白く濁った酒のことを言うが、当時は密造酒のことを指した）。

　しかし、賢治は「みつぎとり」に対しても「日本の」を付けていることを思えば、徴税吏に対しても批判的な意識があったということになる。

　羅須地人協会時代に賢治と関わりのあった伊藤与蔵の証言によれば、「先生はこのどぶろくを各家庭で自由に製造できるようになると、よっぽど楽しみが増し、共同作業やお祭りなども自分たちのものになると考えられたと思います。とにかく先生は濁酒の製造を許可したほうが良いという意見でした」（伊藤与蔵・菊池正「賢治聞書」　昭和四十七年八月・ガリ版。再録・大内秀明編著『賢治とモリスの環境芸術』　時潮社　平成十九年十月）という。賢治は酒については批判的なそぶりを見せたが、密造に関してはおおらかであった。

　また、「一百篇」の「［かれくさの雪とけたれば］」は、下書段階で「人民の敵」というタイトルもつけられた作品で、そこには「濁酒をさぐる税務吏」という言葉があった。つまり税務吏とは

濁酒（密造酒）を取り締まる「人民の敵」だという認識があったことの現われだろう。

明治三十二年一月、個々人による酒の醸造が禁止されたが、それは酒造営業者の保護と、日清戦争後の増税計画の一環であった。当時、仙台税務監督局の間税部長であった大平正芳元首相でさえ、「東北地方におけるかような貧乏な百姓は、国家の恩恵を全く受けない反面、徴税という名においてかかる桎梏に苦しんでいるのである。私は国家とか国法というものにまつわる冷厳な約束というものに、ある種の反発を感じた」と書いているように、税金を取る側の人間にさえ無慈悲な法律だと思われるようなものであった（「濁酒に関する調査（第一報）」旧農林省積雪農村経済調査所作成（昭和十一年二月）『宮沢賢治の農民観を知るために復刻「濁酒に関する調査（第一報）」』センダード賢治の会 平成十年八月）。

さて、こうしてみてくると、日本なる野蛮な国の片隅では、村長の愛娘が豚を追いかけ、村長は豚を食べるだけでなく酒の密醸にも手を染める犯罪者である。それを追いかける徴税吏も立派なようでいて、農民イジメの手先にすぎない…　という状況が展開された作品だということになりそうだ。

ただ、それにしてはどこかとぼけており、ユーモアの漂う作品であるように感じられるのも事実である。農村に対する批判や告発というより、むしろその愛すべき後進性を描こうとしているように感じられる。

先に「一百篇」の文語詩「退耕」と本作の関係を姉妹稿であるとしたが、「退耕」でも、農民たちを「こゑ粗き」存在と捉え、農民たちと同じ世界に身を落とした自分は、上着もちぎれたままで、演奏会になどもはや行ける身の上ではない、と自嘲的に書かれ、農村の後進性がはっきりと指摘されている。しかし、「退耕」では、こうした農民たちを「朋ら」と呼びかけており、この農民たちの世界に歩み寄ろうとする姿が見出せた。

同じように「巨豚」においても、農村の後進性が描かれていながらも、決して全否定しようとしているようには読めない。肉食も飲酒も、賢治は自分から積極的にしようとはしなかったが、世の中一般の肉食や飲酒の習慣、濁酒醸造をやめるべきだとまでは言ってない。むしろ、こうした側面についてもおおらかに受け入れ、あるいは笑い飛ばすことで、農村に近づいていきたいと思っていたのではないだろうか。

農学校時代の教え子・根子義盛（関登久也「性の問題 根子義盛氏から聞いた話」『宮沢賢治物語』学習研究社 平成七年十二月）は、次のような賢治の言葉を記している。

> 村の人が大ぴらに猥談をするのは、そう悪い感じのしないものだ。今日見て来て感じたのだが、水引の村人たちが、田の畦（あぜ）にどんどん火を燃しながら猥談をしているのは、あれは無難でいい。むしろ、争いを未然に防いでともどもに笑い興じている風景は、なごやかだとも言うのでした。
>
> 苗取りの時にも、女の人たちが、農村の貧しさも忘れて、面白可笑しく笑い興じている有り様を見て、同様のことを話していました。

栗の花の散る中を、若い娘が豚を追いかけて走るという姿は、猥談ではなくても、『遠野物語』や『聴耳草紙』の一節、あるいはオシラサマ伝説のようであり、賢治は人々にこうした農村の物語が読み継がれること、また、語り継がれることを望んでいたのではないかとも思えるのである。

先行研究

須田浅一郎「拾いもの作りもの」（「校本宮沢賢治全集5 月報」筑摩書房 昭和四十九年六月）
天沢退二郎「巨豚」（『宮沢賢治 文語詩の森』柏プラーノ 平成十

一年六月）
須田浅一郎『宮沢賢治 文語詩の森』を読む人へ」（「賢治研究81」 宮沢賢治研究会 平成十二年四月）
王敏「豚八戒・沙悟浄に見る賢治の世界」（「賢治研究83」 宮沢賢治研究会 平成十二年十二月）
赤田秀子「文語詩　語注と解説」（『林洋子ひとり語り 宮沢賢治』クラムボンの会 平成十二年二月）
島田隆輔「解説として　《文語詩稿》の生成と、『文語詩稿五十篇』の集成と・試論」（「宮沢賢治研究 文語詩稿五十篇・訳注5」〔未刊行〕 平成二十四年一月）

67　**眺望**

①雲環かくるかの峯は、
侏羅紀に凝りし塩岩の、
古生諸層をつらぬきて
蛇紋化せしと知られたり。

②青き陽遠くなまめきて、
花崗閃緑　削剥の、
右に亘せる高原(あげつら)は、
時代は諸(もろ)に　論ふ。

③ま白き波をながしくる、
かたみに時を異にして、
かの峡川と北上は、
ともに一度老いしなれ。

④砂壌かなたに受くるもの、
洪積台の埴土壌土(はにひじ)と、
多くは(フロラ)酸えず燐多く
植物群おのづとわかたれぬ。

大意

環のような雲がかかるあの峰は、ジュラ紀に凝固した超塩基性岩が、古生代の諸相をつらぬいて蛇紋岩化してできたものだとして知られている。

青い陽光が遠くに光りながら、花崗閃緑岩であり　その削剥された、右側に広がる高原は、時代についてはさまざまに論議があったところだ。

白い波を流してくる、あの谷川と北上川は、おたがいに時代を異にして、ともに海中に没してから生き返ったものである。

沖積地の砂壌土質が川下のかなたで受けるのは、酸性が弱くて燐酸が多い肥沃な土壌であり洪積台地の埴土土質（粘土）とは、植物相もおのずと分かれていく。

モチーフ

早池峰山と薬師岳の間を流れる岳川から、下流にある沖積層と洪積台地の植生の違いについて語る作品。多くの専門用語が使われて難解だが、賢治にとっては岩手県で生きる者、ことに農業に携わる者にとって重要だと思われることを書いたのではないかと思う。七五調にすることによって、重要事項を詠みやすく、また、覚えやすくする効果が期待されたのではないかと思う。

語注

雲環　輪のような雲の形を指す。『春と修羅（第一集）』の「栗鼠と色鉛筆」にも、「その早池峰と薬師岳との雲環(うんくわん)は／古い壁画のきらびやから／再生してきて浮きだしたのだ」とある。音数からいっても「うんかん」と読ませたかったのだろう。「かくる」は「架くる」とも「欠ける」とも取れるが、おそらくは前者であろう。

古生諸層をつらぬきて　「古生」は、古生代の略記。先カンブリ

ア時代と中生代の間の五億四二〇〇万年前から二億五一〇〇万年前までを指す（『宮沢賢治地学用語辞典』）。古生代の地層を蛇紋岩の峯（早池峰山）が貫いているということ。

侏羅紀に凝りし塩岩の、　蛇紋化せし　ジュラ紀とは中生代に属し、一億九九六〇万年前から一億六一二〇万年前までを指し（『宮沢賢治地学用語辞典』）、爬虫類の全盛時代。塩岩とは、塩基性岩のことで二酸化ケイ素が四十五〜五十二％の火成岩のこと（玄武岩や斑糲岩など）。四十五％を下回ったものは超塩基性岩（橄欖岩や輝岩など）と、今日では呼んでいる。このうちの超塩基性岩の橄欖石や輝石が水分と反応して蛇紋石に変化することを、賢治は「蛇紋化」としたのだろう。『宮沢賢治地学用語辞典』には、「基盤の古生層にジュラ紀に貫入し固結した橄欖岩が蛇紋岩化したものである」と解釈する。この連は早池峰山についての記述である。定稿には青インクで「塩岩？」と書き込みがあるが、塩基性岩を縮めた造語でわかりにくかったから、あるいは岩塩との混同を恐れたのではないかと思う。多田実（後掲）によれば、「岩手県稗貫郡地質及土性調査報告書」（岩手県稗貫郡役所 大正十一年一月）では、斑糲岩について「古生代ニ成立セルコト疑ヲ容レス」とあった考えが、新しい説によってジュラ紀の迸入に改められているという。

右に亘せる高原　視点人物は東を臨んで岳川に立ち、左に早池峰山、右に薬師岳を仰いでいるのだろう。

花崗閃緑　『日本国語大辞典』には「火成岩の一つ。花崗岩よりやや暗い灰白色で、細粒ないし粗粒の深成岩。花崗岩と石英閃緑岩の中間にあり、斜長石、カリ長石、石英、黒雲母、角閃石などを主成分とする。貫入岩体として産する」とあり、また、『宮沢賢治地学用語辞典』には「日本で「花崗岩」と称されているものは、大部分が花崗閃緑岩である」とある。薬師岳側の地質についての言及。

削剥　読み方は「さくはく」。『宮沢賢治地学用語辞典』には、「地表の岩石が外因的作用（河食・波食・雨食・雪食・風食など）によって破砕され削られること。削剥が長期間にわたって継続的に行われると陸上の耕地は海水面に近い平坦面をなし。「準平原」とも呼ばれた。その際、硬くて削剥されず残った地形的な高まりを「残丘」と呼んだ」とある。賢治は早池峰山について、『新校本全集５』の「補遺詩篇Ⅰ」として収録された「花鳥図譜、八月、早池峰山巓　森林主事、農林学校学生」の中で、「何でも三紀のはじめ頃／北上山地が一つの島に残されて／それも殆んど海面近く、／開析されてしまったとき／この山などがその削剥の残丘だと」と書いている。

時代は諸に論ふ　花崗閃緑岩が削剥された薬師岳について、「その時代については、さまざまに議論がなされた」の意だろう。定稿には青インクで「双に／諸に？」と書き込みがある。

かの峡川　薬師岳と早池峰山の間を流れる岳川のことだろう。読み方は入沢康夫（「文語詩難読語句（５）」「賢治研究112」宮沢賢治研究会 平成二十二年十二月）も書くように「たにがわ」だろう。ただ、「たにかわ」、また音数から「きょうせん」や「けいせん」とも読み得るかと思う。

一度老いしなれ　逐語訳すれば「一度年を取ったことがある」となるが、海に没することで川としての生命を一度は絶たれたが、その後に、また海水面が下がったために川としての新しい生命を得た、ということかと思う。

砂壌　土を構成する粒の大きさ別の構成割合を土性と呼ぶが、粒が粗くて通水性や通風性がよい砂から、粒が細かくて水や空気をほとんど通さない粘土までさまざまな段階がある。砂壌とは、そのうちの粒が粗く、砂に近い土性のこと。

酸えず燐多く　井上克弘（後掲）は、「沖積地の土性は「砂壌」土質で、酸性が弱く、リン酸も多く肥沃である」とする。賢治は「羅須地人協会関係稿」の「土壌要務一覧」で、「沖積土壌ハ、一般ニ砂質デ、吸収力保水力ハ往々過小デアルケレドモ、他ノ

理学性ハ良好デアリ、酸性モ烈シクハナイ」と書いている。

洪積台　洪積世以降に火山灰や火山礫の堆積、三角州や扇状地が隆起してできた台地のこと。

埴土壌土　井上（後掲）は、「洪積大地（ママ）の土性は「埴土壌土」質で、酸性が強く、カルシウムやリン酸が欠乏しやすい」のだと解し、「土性が異なるとそこに生えてくる「植物群」が変わってくることを指摘している」とする。洪積台地では、カルシウムなどの塩基類が雨で流されて、土壌が酸性化・痩薄化し、農業には不適当な土壌になってしまう。賢治も「土壌要務一覧」で、「洪積土壌ハ可成石灰ト燐酸ニ乏シイ。吸収力保水力、過大ノ所少ナクナイ」と書いている。

評釈

定稿用紙に書かれた定稿のみ現存。生前発表なし。先行作品、関連作品についての指摘もない。

本作の難解さは、下書稿が現存せず、関連作品についての指摘もないこと、そして地質学・土壌学の専門用語が多出するためであろう。当時の水準を確かめながら読んでいく姿勢が求められよう。

ただ、純粋に科学的な内容だけが描かれた作品ではないということについても確認しておきたい。「眺望」というタイトルがあることから、視点人物が明らかに存在しており、おそらくはかつての賢治とほぼ等身大の農業技術者を想定するべきかと思う。

前半では、岳川から東を臨んだ際に、早池峰山をはじめとする左側（北側）は蛇紋岩質、薬師岳をはじめとする右側（南側）は花崗岩質という二つの世界が接近して存在していることを「眺望」する。

後半は、その地点から西（南）に視線を移動させ、川下では、沖積地の砂壌と洪積台地の埴土壌土という二つの世界がやはり接近して存在しており、植物群もおのずと分かれていること（本作での言及はないが、早池峰山と薬師岳では、やはり植生が違っている）を「眺望」する。

岩手の農民は、この大自然のメカニズムによって、酸性が強くて痩せた洪積台地で一喜一憂しながら農作を続けてきたわけだが、本作は、ただ北上山系から平野を「眺望」しただけでなく、そこで生きる農民たちをも「眺望」していたと言うべきであろう。

賢治は羅須地人協会でさまざまな講義を行い、語注でも取り上げた「羅須地人協会関係稿」の「土壌要務一覧」は、謄写版で刷られた講義用の資料だが、「要務」としながらも十八項目もあって、必ずしもやさしくはない内容のものである。また講義のために描かれた四十九葉におよぶ「〔教材用絵図〕」も、かなり専門的で高度な内容だが、ここには大正十五年に賢治の師である関豊太郎らがまとめた日本農学会法による土性区分の図（「教材用絵図　三五」）や、それに先行するアメリカ土性局によるアメリカ式分類法（「教材用絵図　四〇」）が含まれている。

また、農学校の生徒たちに、和賀郡や稗貫郡の土性調査をさせ、土性図を作成させたことも知られている。散文「〔或る農学生の日誌〕」には、

> 今日は土性調査の実習だった。僕は第二班の班長で図板をもった。あとは五人でハムマアだの検土杖だの試験紙だの塩化加里の瓶だの持って学校を出るときの愉快さは何とも云はれなかった。谷先生もほんたうに愉快さうだった。六班がみんな思ひ思ひの計画で別々のコースをとって調査にかかった。僕は郡で調べたのをちゃんと写して予察図にして持ってゐたからほかの班のやうにまごつかなかった。

というように実習の様子が描かれているが、大正十三年に花巻農学校を卒業した長坂俊雄も、「ただ五人のグループを作り参謀本部の地図を渡され、君は矢沢へ行け、君は湯本へ行けなどといわれ、

黒土は腐植土、赤土は砂質土だ、などと地図に色わけして記入するように教えられた」と、実際の様子を語っている（井上 後掲）。

　賢治は、これらを岩手で農業をする者ならば、知っておいて欲しいこととして講義したのであろうし、農学校の教え子たちにもそう思って指導していたのだろう。

　また、大正十五年三月に農学校で撮られた写真には、黒板に大きく地質断面図が描かれている（写真四四）。卒業式当日に撮ったとも、また、「大正十五年三月末退職直前、とくに授業のない日に、白藤慈秀とともに個別に教壇に立つ姿を撮影させた」（『新校本全集 第十四巻 雑纂 校異篇』）とも言われているが、いずれにしても、農学校での教員生活を記念して撮る際の背景に選んだからには、賢治がいかに特別な思い入れを持っていたかが理解できよう。

　賢治の文語詩が目指したものについて、かつて、インテリ階級よりも大衆を中心とした多くの人に愛誦してもらうために書いたのではないかとした（信時哲郎 「はじめに 文語詩はどこに向かっていたか」『宮沢賢治「文語詩稿 五十篇」評釈』 朝文社 平成二十二年十二月）。この点に関して森本智子（「書評 信時哲郎『宮沢賢治「文語詩稿 五十篇」評釈』」 「阪神近代文学研究12」 阪神近代文学会 平成二十三年五月）は、「ただ、科学的な用語や、難解な漢字表現への理解力、民俗学的素養の有無等が、文語詩を読解するうえで不可欠であることを思えば、賢治の「大衆」観を問い直す上でも、本書の提出した問題は大きな意味をはらんでいる」と疑義を呈し、大塚常樹（「書評 信時哲郎著『宮沢賢治「文語詩稿 五十篇」評釈』」 「昭和文学研究63」 昭和文学会 平成二十三年九月）も、「もし大衆的受容が可能で愛誦されうるものなら、なぜ、口語訳とも言える「大意」や主題を示す「モチーフ」の項目が必要なのか。「評釈」においても、文語詩の読みを確定するために、プレテクストとしての口語詩に情報を求めなければならないのか」といった指摘をしている。当然の批判だと思う。本作についても、大衆向けに書いたのだなどとすれば、改めて批判されそうだ。しかし、逆に、いくつもの語注を書かなくてはいけない難解な語をふくんでいるからこそ、七五調のリズムに乗せて詠みやすく、また覚えやすくしたのではないかとも思うのである。歴史上のできごとについて、電話番号について、われわれは一生懸命にゴロ合わせを考えては暗記しようと努めたが、同じ理由で、賢治は難解な語を大衆に暗記させようとしたのだとは言えないだろうか。ますます違和感を持たれるかもしれないが、賢治は、いわゆる文学作品として自分の書いたものを読まれようとばかりは思っていなかった。たとえば童話「風野又三郎」や童話「楢ノ木大学士の野宿」は、科学読み物とでもいうような啓蒙的な性質を持っていたように思うが、本作も科学詩とでもいうべきものであった可能性はないだろうか（「水兵リーベ僕の船…」のような）。

　「大衆向け」とは、必ずしもわかりやすいものだとばかりは言えまい。また、娯楽性に富み、猥談やゴシップなどを含んだ作品ばかりが大衆的ではないだろう。難解な語や難解な概念が含まれていても、仕事の効率を上げたり、生活の向上を狙うような作品であれば「大衆向け」というものは存在しうるし、本作などはその好例であるようにも思うのである。

先行研究

亀井茂「賢治と早池峯山（Ⅱ）」（「早池峯2」 早池峯の会 昭和四十八年十月）

井上克弘「「風景画家」宮沢賢治」（『石っこ賢さんと盛岡高等農林』 地方公論社 平成四年五月）

多田実「「一才のアルプ花崗岩を」考」（「宮沢賢治研究Annual5」 宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成七年三月）

①こはやまつつじ丘丘の、　栗また楢にまじはりて、　熱き日ざしに咲きほこる。

②なんたる冴えぬなが紅ぞ、　朱もひなびては酸えはてし、　紅土(ラテライト)にもまぎるなり。

③いざうちわたす銀の風、　無色の風とまぐはへよ、　世紀の末の児らのため。

④さは云へまことやまつつじ、　日影くもりて丘ぬるみ、　ねむたきひるはかくてやすけき。

大意

ここにはヤマツツジが丘々の、　栗や楢の木に交じって、　熱いくらいの日差しの中に咲き誇っているぞ。

なんとさえない紅色だろう、　朱色の具合もいなかびて酸え果てており、　赤土とも見分けがつかないぐらいだ。

流れてゆく銀の風、　あるいは無色の風と交接すればいい、　それが世紀が終わる頃の跡継ぎのためになるはずだ。

などとは言ったけれどもヤマツツジよ、　陽ざしもかげって丘がぬるみ、　ねむたくなるような昼などには心休まる気がするよ。

モチーフ

「装景手記」として書かれた詩篇では、ひなびた朱色のヤマツツジ（レンゲツツジ）を糾弾し、改良の提案をし、「止むなくばすべてこれを截りと」ってしまおうというものであった。ユーモラスな書き方だが、独善的な内容である。しかし、文語詩の推敲が進み、定稿になる段階では、その態度が改められ、ヤマツツジの個性を尊重し、それを積極的に評価しようという内容に変わっている。自分の思い上がりを「慢」の意識を反省する晩年の境地から反省し、ヤマツツジの天然素朴な美を讃える詩に変質させたのかと思う。

語注

やまつつじ　ヤマツツジは、北海道から九州にかけて日当たりのよい丘に自生する植物で、春には赤い花を咲かせ、庭木としても古くから愛されてきた。ただし、ここでは賢治の教え子であった小原忠（佐藤栄二「文語詩を誦む（三）〔温く妊みて黒雲の〕（文語詩稿 五十篇」より」「賢治研究41」宮沢賢治研究会 昭和六十一年九月）が、「やまつつじ、これはこの辺の山か野原に沢山あったもので、〃べこつつじ〃と云って余り見むきされない、黄色でやゝ赤めいた大きな花。この頃は殆ど見られなくなり、ひなびた花で残念で今は惜しいです。誰も見向きしない花を賢治は注目したとおもいます。庭木として欲しい位ですが、この辺では見えなくなりました。公害に弱いらしいです」と書いているように、ベコツツジ、つまりレンゲツツジを指していたのだろう。ヤマツツジよりも花径が少し大きく、「花が鮮黄色のものをキレンゲツツジ、濃い朱色のものをカバレンゲツツジとよぶ。枝葉にはグラヤノトキシン、ロードジャポニンなどの有毒成分がある」（『日本大百科全書』）とのこと。

なが紅ぞ　「な」はヤマツツジを指す。「紅」は「べに」と読ませたかったのだろうか。入沢康夫（「文語詩難読語句（５）」「賢治研究112」宮沢賢治研究会 平成二十二年十二月）は「あか」を提案している。

紅土(ラテライト)　『定本語彙辞典』には、「熱帯雨林やサバンナ気候地帯など高温多湿の気候のもと、塩基など水溶性成分の多くが流出し、

鉄の酸化物やアルミニウムの酸化物が濃縮し、赤色の土壌となったもの」とある。

まぐはへよ 風と結婚しろ、という意味。「まぐわい」は、『大辞泉』によれば、「目と目とを見合わせて愛情を通わせること。めくばせ」と共に、「男女の交接。性交」の意。佐藤栄二（後掲）が指摘するように、賢治は「［風がおもてで呼んでゐる］」で、病床の賢治に向かって屋外の風が交々に叫び、「おれたちのなかのひとりと／約束通り結婚しろ」と迫られるという表現を残している。徹底的に自然と関われ、という意味だろうが、自然に関わって再生しろという意味もあっただろう。ここではヤマツツジに向かって、風と交わることによって、強い子を残し、世紀の末まで種族を維持しろということだろう。

評釈

無罫詩稿用紙に書かれた下書稿㈠（鉛筆で㋐。『新校本全集5』の「補遺詩篇Ⅰ」にある「装景者」に関連する断片が記されている）、その裏面に書かれた下書稿㈡、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。一連に三句が縦書きに書かれ、最終連は七五・七五・七七で結ばれている。

「装景手記」と賢治自ら題したノート（ノート題字の下には一九二七・六、一九二八・六、一九二九・六とある）に書かれた長編詩の一部が本作の先行作品となっている。

ならや栗の Wood land に点在する
ひなびた朱いろの山つゝぢを燃してやるために
そのいちいちの株に
hale glow と white hot の azalia を副へてやらねばならぬ
若しさうでなかったら
紫黒色の山牛蒡の葉を添へて
怪しい幻暈模様をつくれ
止むなくばすべてこれを截りとる
　Gillochindox. Gillochindae!
　　ラリックスのうちに
　　青銅いろして
　　その枝孔雀の尾羽根のかたちをなせる
　　変種たしかにあり
やまつゝぢ
何たる冴えぬその重い色素だ
赭土からでももらったやうな色の族
銀いろまたは無色の風と結婚せよ
なんぢが末の子らのため

汽車の車窓から見えたヤマツツジの花の色が「ひなびた朱色」であったことから、賢治はこれを揶揄し、改良しなければ「これを截りとる」、つまり、「ギロチンドックス、ギロチンデイ」（「春と修羅 第二集」の「三〇四 〔落葉松の方陣は〕 一九二四、九、一七、」にもこの表現が登場するが、その際のルビ）と、ギロチンで切ってしまうぞと脅しているといった諧謔に富んだ作品だ。

「装景手記」の「装景」とは、田村剛（『造園概論』 成美堂 大正七年七月）の造語で、「装景は人工によつて破壊せられた風景や天然風景の欠陥を見出して、これに修飾を加へることを主眼とするもので」、「経済と風景美とを一致させ、進んで学術・衛生・道徳・宗教などあらゆる方面の目的を同時に達する理想境を現出」させるものだという（森本智子「宮沢賢治と「装景」 「虔十公園林」を中心に」 「宮沢賢治研究Annual8」 宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成十年三月）。しかし、これはただ眼前の自然を自分勝手にアレンジして美を取り入れるといったことではなく、「風景をみな／諸仏と衆生の徳の配列であると見」て、「この国土

の装景家たちは／この野の福祉のために／まさしく身をばかけねばならぬ」（「装景手記」）と書いたような、壮大にして深淵な意味が込められていたようだ。

　森本によれば、賢治の「装景」観が表れた作品に童話「虔十公園林」があり、ここでは「少し足りない」と思われていた虔十が、「自然の声に耳をかたむけて、何の利益も求めずに、ただ無心に植樹を行なったということと、更に、その行為が人々に受け入れられ、人々が自発的に公園造りに乗り出す、というところ」に特徴があり、それは当時の「装景」概念を正しくとらえ、その上でオリジナリティを出したものだという。

　文語詩の下書稿㈠では、制作日が接近しているためもあってか、「装景手記」の内容をほとんどそのまま引き継いで成立しているように見える。

こはやまつゝぢいちめんに
ならまた栗にまじはりて
車窓はるかに点じたり
何たる冴えぬかの赤ぞ
朱もひなびてはひたすらに
赭土にさへまぎれたり
　げにやまつゝぢ
　　銀いろまたは無色の風と結婚せよ
　　なんぢが末の子らのため
これらの群を燃さんには
そのいちいちの株に並べ
hale glowと白熱の
アザリアをこそ植えぬべし
さなくばむしろ紫黒なる
（約五字空白）の葉を添へて
怪しき幻暈模様をつくれ
いよいよ更にやむなくば
すべてこれらを截りて去るべし

　文語詩の下書稿㈡では、これを四連構成に改変し、最終連を「さらずばむしろ紫黒なる／あけびの藪に身を寄せて／怪しき幻暈をなせよかし」として、「Gillochindox」や「截りて去るべし」といった冷酷な詩句を消している。

　その手入れ段階では、最終連を全面削除して、「さは云へまことやまつゝじ、／日影くもりて丘ぬるみ、／ねむたきひるはかくてやすけき」と改変し、これが定稿に継続することとなる。

　このように、口語段階に比べると、ヤマツツジへのいささか辛辣にして残酷な「装景」のためのアイディアが、文語詩の推敲過程で次第にやわらぎ、定稿では、これまでの「装景」というコンセプト自体を否定するような案、つまり「なんたる冴えぬなが紅ぞ、　朱もひなびては酸えはてし」という自然そのままの姿が、「ねむたきひる」には似つかわしいのだとされ、積極的に肯定する案に改められている。

　賢治が文語詩を書いた最晩年には、自身のこれまでの行状を、慢心の表れだとして反省していた。「山躑躅」の改変過程を見てくると、かつての自分の考えを「慢」によるものだとして排除しようとする意図を読み取ることもできるのではないだろうか。

　賢治は、「自然の声に耳をかたむけて、何の利益も求めずに、ただ無心に」（森本　前掲）ヤマツツジが咲いている丘の景観を改めさせようとした。しかし、我が意に従わなければヤマツツジを截ってしまうぞというのは、ホトトギスが鳴かないのならば殺してしまえとした織田信長をも思わせるものだ。もちろんこれはユーモアであり、最晩年の賢治の心境などを持ち出すのは、大げさすぎると思われるかもしれない。が、景色を自分で入れ替えようという思想の背景には、自分の知識や感覚が絶対だという意識があるわけであり、晩年の賢治が、それを気にしなかったとは断言で

きない。文語詩を改稿中の賢治が、「「慢」といふものの一支流に過って身を加へた」と自覚し、「僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産といふものが何かじぶんのからだについたもの」（柳原昌悦宛書簡 昭和八年九月十一日）だと感じて、改稿した可能性は十分にあるのではないだろうか。

さて、童話「虔十公園林」の主人公・虔十は、「少し足りない」と言われる存在だったが、物語の結末では、「あゝ全くたれがかしこくたれが賢くないかはわかりません。たゞどこまでも十力の作用は不思議です」と評されるに至る。これはヤマツツジに似ていないだろうか。「少し足りない」と言われる虔十の作った公園が、「もういつまでも子供たちの美しい公園地」になったのは、「なんたる冴えぬ」ヤマツツジが、「ねむたきひるはかくてやすけき」という効用を与えてくれたというのと同じではないだろうか。

はじめは「装景手記」にあったように、賢治自身が理想的な景色を作り上げようという詩で、敢えて言えば虔十に自分をなぞらえるような詩であった。しかし、文語詩を改稿するうちに、賢治は自分自身の思い上がりを修正し、自然の摂理に従って自生する「なんたる冴えぬなが紅ぞ」、「朱もひなびては酸えはてし」などと馬鹿にされていたヤマツツジこそが、人の心に慰安を与える虔十なのだという内容に変質させているわけである。もちろん、この改稿の過程だけで、賢治が本当にそのように考えたのかどうかはわからない。しかし、理由はどうあれ、本作の改稿過程がこのようになされたことは確かである。

先行研究

平沢信一「定稿紛失作品「旱害地帯」の本文校訂に関する一考察」（「論攷宮沢賢治１」中四国宮沢賢治研究会 平成十一年三月）

佐藤栄二「「山躑躅」をよむ」（『宮沢賢治 交響する魂』蒼丘書林 平成十八年八月）

赤田秀子「ヤマツツジ（山躑躅）」（『イーハトーブ・ガーデン 宮沢賢治が愛した樹木や草花』コールサック社 平成二十五年九月）

69 〔ひかりものすとうなゐごが〕

ひかりものすとうなゐごが、　ひそにすがりてゆびさせる、
そは高甲の水車場の、　こなにまぶれしそのあるじ、
にはかに咳し身を折りて、　水こぼこぼとながれたる、
よるの胡桃の樹をはなれ、　肩つゝましくすぼめつゝ、
古りたる沼をさながらの、　西の微光にあゆみ去るなり。

大意

なにかが光っているよと小さな子が、　そっとすがりついて指差したのは、
高甲の水車場の、　粉にまみれた主人であった、
急に咳をしながら身を折り曲げると、　水がこぼこぼと流れるなかを、
夜の気配の中でクルミの樹から離れ、　肩を慎ましくすぼめながら、
古びた沼にむかって、　西方に残った微光をめざして歩き去っていった。

モチーフ

「何かが光っている」と、「うなゐご」が恐る恐る指差した先には、水車小屋の主人が咳をして、その後、家路に就いたというだけの内容。しかし、場所は町はずれ、時間帯も逢魔が時であり、何か不思議な出来事が起こってもよいような状況である。主人が咳き込んだのは、水車場だけに粉にむせただけかもしれないが、肺を

患っていたのかもしれない。しかし、西方からわずかに差す光に向かって歩み去ったのだといえば、いやがうえにも神秘的なムードが漂ってくる。メッセージ性よりも、人生の黄昏ともいうべき雰囲気をわせようとしたように思える。

語注

ひかりものす　「ひかり＋ものす」か「ひかりもの＋す」なのかわかりにくいが、下書稿㈡には「光りものとも見えにける」ともあることから「ひかりもの」なのだろう。夕暮れ時であれば、流星や彗星、稲妻、太陽の光が何かに反射したのかもしれない。ただ、うなゐごが不安感から親（下書稿㈡には「われに」となっていた）にすがりついたのだとすれば、鬼火や人魂のような怪しいものを予感したのであろう。

高甲の水車場　赤田秀子（後掲）や大角修（後掲）の言うように、高橋甲吉や甲太郎、甲助などの略。あるいは屋号だろう。下書稿には高常や高清ともあった。「春と修羅 第二集」の「一九 塩水撰・浸種 一九二四、三、三〇、」に「高常水車」とあり、また「疾中」の「〔春来るともなほわれの〕」には「高井水車」とある。同じ「高」のつく水車で、くるみの木があることから、本作でも同じ場所がモデルになっているようだ。「一九 塩水撰・浸種」の下書稿には、停留所、西公園、地蔵堂の大きな杉といった語があることから、佐藤勝治が「〝冬のスケッチ〟の配列復元とその解説」（『宮沢賢治青春の秘唱 〝冬のスケッチ〟研究』十字屋書店 昭和五十九年四月）で推定した場所と同じだと思う。

評釈

「〔冬のスケッチ〕」の第十三葉を文語化したもの。『新校本全集』に従えば、「〔冬のスケッチ〕」の第十三葉への書き込みを下書稿㈠、黄罫（26０行）詩稿用紙に「一百篇」の下書稿と共に書かれた下書稿㈡（赤インクで(了)）、その裏面中央に書かれた下書稿㈢、黄罫（22０行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈣（青インクで㊢）、定稿用紙に書かれた定稿の五種が現存。生前発表なし。全一連で構成されているためか、定稿に丸番号の表記はない。

「一百篇」の「病技師〔一〕」は、本作と同じく「〔冬のスケッチ〕」の第十三葉を先行形態としており、取材日が同一であるだけでなく、内容的にも密接な関わりがあると思われる。また、同じ第十三葉と連続する第十四葉に綴られた内容は「一百篇」の「羅紗売」に発展している。また、大沢正善（「朧月」『宮沢賢治 文語詩の森』柏プラーノ 平成十一年六月）は、「一百篇」の「朧月」も、共通した字句があることから「〔冬のスケッチ〕」の同一部分から発展したものだとしている。

まず、「〔冬のスケッチ〕」の第十三葉をあげる。

※

風の中にて
ステッキ光れり
かのにせものの
黒のステッキ。

※

風の中を
なかんとていでたてるなり
千人供養の
石にともれるよるの電燈

※

なほさながらに光りものと見えにける
こなにまぶれし水車屋は
にはかにせきし歩みさる
西天なほも　水明り。

これが下書稿㈡では、次のようになる。

風の中を
なかんとていでたてるなり
千人供養の
石にともれる二燭の電燈

やみとかぜとのかなたにて
光りものとも見えにける
こなにまぶれし水車屋は
にはかにせきし身を折りて
水あかりせる西天に
いとつゝましく歩み去る

前半は「一百篇」の「病技師〔一〕」になり、後半が本作となる。当時の花巻に詳しい佐藤勝治は、「『冬のスケッチ』作者彷徨想像図」(『宮沢賢治青春の秘唱〝冬のスケッチ〟研究』十字屋書店昭和五十九年四月)で、賢治は生家から千人供養塔のある松庵寺を抜け、東北本線を越えたところにある「水車(粉屋)」のことを書いているとする。「春と修羅 第二集」の「一九 塩水撰・浸種一九二四、三、三〇、」では「高常水車」、「疾中」の「〔春来るともなほわれの〕」では「高井水車」と書いていたが、本作では同じ場所が「高甲の水車場」として書かれたようである。

下書稿㈡の手入れ段階で、「ひかりものすとうなゐごが、／ひそにすがりて指させば、」が書き加えられ、下書稿㈢以降は、それが定着する。つまり虚構が施されたわけだが、赤田秀子(後掲)が指摘するように、賢治は「をとめら」に自分が恐れられて、拒絶される内容を「一百篇」の「病技師〔二〕」で描いている。

①あえぎてくれば丘のひら、　地平をのぞむ天気輪、
　白き手巾を草にして、　をとめらみたりまどゐしき。
②大寺のみちをことゝへど、　いらへず肩をすくむるは、
　はやくも死相われにありやと、　粛涼をちの雲を見ぬ。

タイトルから考えて、これは肺を病んだ賢治の経験を詠んだものではないかと推察されるが、昭和六年三月末から六年七月末あたりに使われたとされる「GRIEF印手帳」に「よき児らかなとことゝへば／いらえず恐れ泣きいでぬ／はやくも死相われにありやと／さびしく遠き雲を見ぬ」とあり、これが「病技師〔二〕」の下書稿㈠だとされている。昭和六年といえば、小康状態となった賢治が東北砕石工場の技師として東奔西走していた時期だが、実際にここにあるような経験をしたのだろう。

「〔ひかりものすとうなゐごが〕」は、もっと制作時期の早い「〔冬のスケッチ〕」の第十三葉から推敲が重ねられたものだが、虚構が取り入れられているとは言っても、昭和六年頃の賢治の実体験を織り交ぜている可能性もあり、完全なフィクションというわけでもないようだ。

ところで、「〔ひかりものすとうなゐごが〕」における水車場の「あるじ」が咳き込んでいたのは、本当に「こなにまぶれ」ためであったのだろうか。

「にはかに咳し身を折りて」とあるから、相当に咳き込んでいたようだが、下書稿㈣の手入れから加わった「水こぼこぼとながれたる」の「こぼ(こぼ)」という音は、三谷弘美(「病技師〔一〕」『宮沢賢治 文語詩の森』柏プラーノ 平成十一年六月)や赤田(後掲)が書くように、肺病患者のラッセル音がイメージされていると思う。だとすれば、「あるじ」が肺を患っていた可能性もあるのではないかと思う。ことに、同じ「〔冬のスケッチ〕」という句から発した「病技師〔一〕」には「蝕む胸をまぎらひて」という句

があり、タイトルから病気であることが分かるだけでなく、詩文からも肺病患者の雰囲気が伝わってくる仕組みとなっていた。また、昭和六年の経験をもとにしたと思われる「病技師〔二〕」にも、「はやくも死相われにありやと」とあって、こちらでも死に至る病を患っていることがタイトルと詩文の両方からわかることになっている。伝記の助けを借りれば、やはり肺病をイメージしているのだということになりそうだ。

ただ本作では、「病技師〔一〕〔二〕」のように直接病気に言及していないのが特徴だろう。まずは「うなゐご」に「ひかりもの」を指させ、怪しい雰囲気がもたらされたところで、咳をするあるじの姿、こぼこぼと鳴る水音といった具合に、病気や死を連想させるようなものを連続して登場させ、病気のイメージを作り上げている。

さらに、「あるじ」は「古りたる沼をさながらの、　西の微光にあゆみ去る」とあるが、これは赤田（後掲）の言うように、西方にある極楽浄土の世界に向かうようである。下書稿㈢には、「水あかりせる西天に／いまつゝましくあゆみさる」とあったが、赤田は「これはもう半分異界に身をおいている者として暗示される」と書いているが、そのとおりだと思う。

ところで、水車もまた不安な要素を漂わせる道具であったと思う。というのも、水車場とは、町と村との境界にあるものだからである。昭和九年に刊行された『田舎と都会』の中で、小田内通敏（「水車場」　刀江書院　昭和九年九月）は次のように書いており、当時の水車のあり方を説明してくれている。

> 大きな旧家では、自分の家の小作米だけを処理するために、宅地の片隅に用水の余り水をひいて、恰好な水車場を作つておくので、自分の家の必要なときだけまはしたり、また村の人達に賃貸しをしたりする。しかし、それを営業としてゐる家では、自然に水車場を主とし、住み家がその附属のように作られてあり、その位置も部落の端などにおほく建てられてある。水車でつく米や麦の運搬などまでも、その家族の人達がやつたりする。また部落の組合で設けられた水車場では、世話する人の家族がゐるところもあるが、番人がをらずに部落の人達が代る代り来てそれを用ひる所もある。そんな所では番人がゐないから、朝、米なり麦なりを水車場の臼に入れておき、搗けたころを見計らつてそれを取りに行くようになつてゐる。

童話「セロ弾きのゴーシュ」でも、「家といってもそれは町はづれの川ばたにあるこはれた水車小屋で、ゴーシュはそこにたった一人ですんでゐて午前は小屋のまはりの小さな畑でトマトの枝をきったり甘藍の虫をひろったりしてひるすぎになるといつも出て行ってゐたのです」とある。小川未明の「水車場」（『愁人』　隆文館　明治四十年六月）でも、水車場がある場所は「遠く人家のある村里を離れて」とあり、島崎藤村の「屋根の石と水車」でも、「村はづれにある水車小屋」（『ふるさと』　実業之日本社　大正九年十二月）とある。

水車には水の流れが必要だが、音をたてるということもあって町中での設置は向かない。しかし、町の人々にも必要なものなので、山奥に設置するわけにもいかない。かくして「町」の「はずれ」という境界部分に、水車小屋は置かれることになる。ゴーシュが水車場に住んでいたのは、おそらく人里から距離があるので家賃も安かったのだろうし、真夜中でもずっとセロの練習ができたからだろう。多くの動物たちが登場するのも、水車が「町はづれ」にあったからだと思われる。

境界について、民俗学者の小松和彦（「異界をめぐる想像力」『異界と日本人　絵物語の想像力』　角川書店　平成十五年九月）は、次のように書いている。

> なぜ境界が重要なのだろうか。それはそこが「人間界」でもあ

り「異界」でもあるという両義性を帯びた領域だからである。人間が異界に赴くときはその境界を越えていかねばならないし、神や妖怪などの「異界」の住人が「人間界」にやって来るときもこの境界を越えてやってくるのである。したがって、境界をさ迷っていると、神や妖怪に遭遇する可能性が高く、また、境界に住む者は、人間界と異界の双方の性格を帯びた者としてイメージされることになる。

こうして小松は、鬼が山や門、橋に出没すること、河童が水辺に出没することなどをあげ、境界の意味を掘り起こす。鬼や妖怪でなくても、ここにいる者には「ひかりもの」が見えたり、ゴーシュのように動物たちと関わったり、また、「普通の人なら死んでしまふ」ようなセロの練習ができてしまったりするのだろう。

赤田（後掲）は、「うなゐごこそ、この世の時間がまだ浅く、あちら側の世界、つまり異界への敏感な触覚が機能している存在」なのだとも書いているが、言い方を変えれば、この世とあの世の境界の年齢にいるということであり、境界で読み解こうという本稿の方向に合致している。

また、境界といえば、「西の微光」が気になる時間、つまり、黄昏時という時間も境界的である。黄昏とは、「誰そ彼は」を語源としているといわれるように、人の見分けがつかなくなる時間帯であり、「トワイライト」（二つのあかり）とも呼ばれるような、両義性を持つ時間帯である。

柳田国男は「町にも不思議なる迷子ありし事」（『山の人生』郷土研究社 大正十五年十一月）で、子供が神隠しに逢いやすい時間帯について述べている。

> 東京のやうな繁華の町中でも、夜分だけは隠れんぼはせぬことにして居る。夜かくれんぼをすると鬼に連れて行かれる。又は隠し婆さんに連れて行かれると謂つて、小児を戒める親がまだ多い。村をあるいて居て夏の夕方などに、児を喚ぶ女の金切声をよく聴くのは、夕飯以外に一つには此畏怖もあつたのだ。だから小学校で試みに尋ねてみても分るが、薄暮に外に居り又は隠れんぼをすることが何故に好くないか、小児はまだ其理由を知つて居る。

「おおまがとき」、つまり大禍時（大きな災禍に遭う時）、逢魔時（魔に逢う時）は、「人間界」と「異界」が入れ替わる、境界線上の時間だったのである。

さて、このような点を踏まえた上で、本作を改めて振り返ってみたい。黄昏時の町はずれで、咳き込んでいる水車小屋の主人のことを、異界に誘われやすい子供が、「何かが光っている！」と指摘し、気付いた時には主人が西天に向かって歩いていくように見えた…

「病技師〔一〕」や「病技師〔二〕」と違って、本作では、病気や死に直接関係する言葉を使わず、幽霊や妖怪などの怪異も登場させてはいない。しかし、そうしたものが登場しそうな雰囲気だけを作り上げ、怪しさを醸し出そうという実験的な作品であったように思えるのである。

先行研究

赤田秀子「文語詩を読む その5 声に出してどう読むか？〔天狗茸 けとばし了へば〕を中心に」（「ワルトラワラ16」ワルトラワラの会 平成十四年六月）

島田隆輔「初期論」（『宮沢賢治研究 文語詩稿叙説』朝文社 平成十七年十二月）

大角修「文語詩を読む〔ひかりものすとうなゐごが〕」（「賢治研究112」宮沢賢治研究会 平成二十二年十二月）

70　国土

①青き草山雑木山、　はた松森と岩の鐘、
ありともわかぬ襞ごとに、　白雲よどみかゞやきぬ。
②一石一字をろがみて、　そのかみひそにうづめけん、
寿量の品は神さびて、　みねにそのをに鎮まりぬ。

大意

青い草山や雑木の生えた山、あるいは松の生えた山や岩鐘に、遠くからではあるのかどうかもわからないヒダごとに、白雲はよどんで輝いている。

一石に一字ずつ拝みながら文字を書いて、昔の人はひそかにこの山々に経を埋めたのだろう、法華経の寿量品は古びて神々しく、峰や尾根に静かに眠っている。

モチーフ

経典の文字を一石に一字ずつ書いた一字一石（一石一字）塔が全国にあり、岩手でもいくつか存在することが知られている。賢治が「経埋ムベキ山」をリストアップしたこととも関係すると思われるが、ここでは、名前もないような小さな山でさえも、きっと昔の人がお経の文字を一つ一つ埋めたのだとして、国土の山を言祝ぐ詩だろうと思う。「国土」というタイトルには、「われ日本の柱とならむ」とした日蓮や「八紘一宇」の語を作ったとされる国柱会の創設者・田中智学の国家観なども無関係ではないように思う。

語注

松森と岩の鐘　松森は固有名詞ではなく、おそらくは松の生えた山。岩の鐘は、岩鐘。「青き草山雑木山」と共に、岩手のどこにでもあるような名前もついていないような山々のことを言うのだろう。

一石一字　経典の文字を一石に一字ずつ書いて埋葬することが南北朝時代ころから始まった。浜垣誠司（「草木国土悉皆成仏」「宮沢賢治の詩の世界」 http://www.ihatov.cc/ 平成十七年十月十六日）によれば、賢治が経を埋めようとした旧天王山（キーデンノー）にも「文化九壬申年／法華経一字一石塔」があるという。他にも観音山（花巻市）や砥森山（花巻市・遠野市）にも一字一石塔がある。賢治は晩年に埋経を計画して「経埋ムベキ山」のメモを残したが、その発想のヒントになったかもしれない。ちなみに観音山は、「経埋ムベキ山」のメモにも記載されている。

寿量の品　妙法蓮華経の第十六品。釈迦の生命が、過去から未来へと永遠に続くものだということを説いている同経の中心部分で、賢治が初めてこの件りを読んだ時には感動のあまり体が震えたと言われている。

神さびて　古びて神々しくなること。

を　尾根のこと。

評釈

黄罫（26０行）詩稿用紙に書かれた下書稿（タイトルは「国土」。鉛筆で㊢）と定稿用紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし。先行作品や関連作品の指摘はない。

浜垣誠司（「草木国土悉皆成仏」「宮沢賢治の詩の世界」 http://www.ihatov.cc/ 平成十七年十月十六日）は、タイトルとなった「国土」という言葉に賢治が託した思いについて、「「国土」という言葉の辞書的な意味としては、まず「一国の統治権の行われる境域。領土」（広辞苑）ということが記されていますが、賢治はこ

の作品において、とくに政治的な意味での「国家」を意識している様子ではありません。／そうではなくて、この「国土」は、「仏国土」という宗教的な意味において用いられているのだろうと思われます」とする。たしかに政治的な意味での国家について書かれたものだとするより、「どこかに埋められている仏の言葉や埋経をした人への思いとともに、この世界全体への静かな愛を謳っているようにも感じられ」るが、岩手の山野に眠る経典や、古人たちへの思いは、田中智学による国柱会の理論体系によって成り立っていたことについても考えておく必要があるように思う。

　賢治の信奉した国柱会の田中智学は、大正十年一月一日から「天業民報」の紙上で「日本国体の研究」を連載したが、日本国体を論じるに先立って、「日蓮上人は仏教家たるの前、先づ我れは日本人なりとして起たれ」、それは、「夫れ国は法に依て昌へ、法は人に依て貴し、国亡び人滅せば、仏を誰か崇むべき、法をば誰か信ずべき、先づ国家を祈つて須らく仏法を立つべし」と思い至ったからなのだという。（「緒言」『日本国体の研究』真世界社　大正十一年四月）。

　大正十年といえば、ちょうど賢治が家出上京した年にあたるが、上京直後の一月三十日に同じ国柱会員である関徳弥に宛てて「田中大先生の国家」に言及しているが、ちょうどその頃に「天業新聞」に連載されていたのが、「田中大先生」の論じた「日本国体の研究」に他ならない。また、賢治は大正十年二月十八日に、盛岡高等農林学校時代の友人・保阪嘉内に宛てて、「どうか世界の光栄天業民報をばご覧下さい」と熱心に購読を勧めてもいることから、賢治が目を通していないはずはない。

　日本国や日本の国土は、たとえば次のように語られる（「総論」『日本国体の研究』）。

日本の神さまといふのは、人類に「道理」を自覚させ様、それを行はせようといふことを事業となされた神さまで、その事業の為めに、根拠地たり又背景なりに国土を要するところから、国を択んで此日本国を選り出して垂統の本土とされたのであるから、「神」は日本国の先祖であると共に、世界の救済者であり、又その主宰者である、その大慈悲の発現たる日本建国が、神の仕事の場所として存し、その人民が、此栄光ある天の仕事の執行者として、宇宙に卓然として生存して居ると云ことは、単に国史の光彩と云ばかりでなく、全く世界の偉観であり人類の光明である。

もちろん家出上京中の思想と最晩年の思想を同一視してしまうのは問題かもしれないが、本作に法華経の如来寿量品の名があがっていることから考えると、晩年の賢治が智学の国家観から離れたと言い切ってしまうことにも問題があろうかと思う。

　もちろん、全てを日蓮や田中智学の影響だとしてしまうのも間違いだ。法華経に出会うよりもずっと前に「石こ賢さ」と呼ばれた石好きの賢治である。岩手の人々と石の関係について、感じるところがあったはずだ。文語詩に限っても、「五十篇」では峠に置かれた五輪塔について書き（「五輪峠」）、「一百篇」では岩手山頂の石仏に米を捧げる人を描き（「岩手山巓」）、農民たちが豊作を祈った庚申塚を描き（「庚申」）、「雨ニモマケズ手帳」には自分で庚申塔の絵まで描いている。

　さらに、農学校の同僚であった白藤慈秀（『こぼれ話宮沢賢治』昭和五十六年二月　トリョーコム）は、次のようなエピソードを書いている。

田圃の畦道に大きな石塊が置かれてあるので不思議に思いました。畦の一隅に何故このような石が一つだけ置かれてあるかと疑い、この石には何んの文字も刻まれていないからその理由はわからない、何の理由なしに自然に石塊一つだけある筈はない。これは何かの目じるしに置かれたに相違ないと考えた。その昔、

この辺一帯が野原であったころ人畜類を埋葬したときの目じるしに置いたものに相違ない。また石の代りに松や杉を植えてある場所もある。こういうことを考えながらこの石塊に立って経を読み、跪座して瞑想にふけると、その石塊の下から微かな呻き声が聞えてくるのです。この声は仏教でいう餓鬼の声である。なお耳を澄ましていると、次第に凄じい声に変ってきました。それは食物の争奪の叫び声であったと語った。

一字一石塔や庚申塔どころか、文字さえ刻まれていない碑、畦道に置かれているだけの石塊にさえ、賢治は注目して経を読み、瞑想したのだという。

そんな思いの込められた日本の国土に対して（もちろん智学の言うような国土でもあるが）、賢治はある時、この国土にある山々の美しさは、法華経の如来重量品の文字が書き記された石が埋められているからではないかという発想が湧き、ここにはそうした思いが書かれているのではないかと思う。そう思えば、古人に倣って、自分自身も岩手の三十二の山に経を収めようと「経埋ムベキ山」を書き残したのではないかという発想にも繋がりそうだ。

ところで、島田隆輔（後掲）は、定稿の欄外に記されたメモに「ひそに／重出」とあることについて、本作の定稿における「ひそに」が、直前に収められた「〔ひかりものすとうなゐごが〕」の定稿にも「ひそに」があることについてのものではないかとし、少なくともこの二作に関する順序は、賢治の意図に基づくものであり、その配列に関して賢治が細かく神経を行きわたらせていた証拠ではないかと指摘している。文語詩稿全体を考えるうえでも、重要な指摘ではないかと思う。

先行研究

大角修「あとがきにかえて　宮沢賢治の法華文学」（『法華経の事典　信仰・歴史・文学』春秋社　平成二十三年十二月）

島田隆輔「解説として《文語詩稿》の生成と、『文語詩稿五十篇』の集成と・試論」（「宮沢賢治研究　文語詩稿五十篇・訳注5」〔未刊行〕平成二十四年一月）

71

〔塀のかなたに嘉莵治かも〕

①塀のかなたに嘉莵治かも、　ピアノぽろろと弾きたれば、
一、あかきひのきのさなかより、　春のはむしらをどりいづ。
二、あかつちいけにかゞまりて、　鳥にごりの水のめり。
②あはれつたなきソプラノは、　ゆふべの雲にうちふるひ、
灰まきびとはひらめきて、　桐のはたけを出できたる。

大意

塀の向こうにいるのは嘉莵治だろうか、　ピアノをぽろろと弾きはじめると、
一、赤いヒノキの中から、　春の羽虫たちが躍り出てくる。
二、赤土の池の渕に屈まっては、　カラスが濁った水を飲んでいる。
あぁへたくそなソプラノの声なので、　夕べの雲もうちふるえるようで、
灰を肥料として撒いていた人もあわてて、　桐の生えた畑から出てきたようだ。

モチーフ

賢治が勤めていた稗貫農学校の向かいには、友人の藤原嘉藤治が

勤める花巻高等女学校があった。嘉藤治のピアノに合わせて女生徒たちが「一」と「二」の歌を歌ったように思われるが、この「つたなきソプラノ」の声の主は、案外、賢治自身であったのかもしれない。女学生向けに弾かれたピアノの旋律なので、男の賢治には高すぎて、うまく歌えず、それゆえに「つたなきソプラノ」と記された可能性もあろう。

語注

嘉莵治（かとうじ）　花巻高等女学校の音楽教師で賢治の友人でもあった藤原嘉藤治のこと。岩手県紫波郡水分村（現・紫波町）に明治二十九年（賢治と同年）に生まれる。岩手県師範学校卒業後、気仙郡、盛岡市の小学校で勤務した後、大正十年九月、花巻高女に赴任。藤原草郎として詩を発表していたこともあり、大正十年秋に、賢治が藤原を訪ね、以降、音楽や文学、思想等を語り合って親交を深めた。昭和八年九月、花巻高女を退職して嘱託となり、九年には上京。文圃堂版『宮沢賢治全集』の編纂に携わる傍ら、代用教員を勤め、昭和十四年には大日本青年団本部書記となる。敗戦後は帰郷して東根（あずまね）山麓に入植。以降、紫波郡の開拓に努め、昭和五十二年没。「嘉莵治」としたのは、藤原嘉藤治（後掲）によれば、「嘉藤治というのは馬鹿にされる。なぜ上等治にしないのだと。当時は三等切符だの……そこで宮沢賢治は、嘉藤治でなく「カトジ」兎のトの字嘉藤治としてくれた」という。もちろん音数を考えた側面もあろう。

一、あかきひのきのさなかより、　同じ内容の詩句が、「一百篇」の「四時」や「未定稿」の「〔雲を濾し〕」の下書稿中にも現われ、「〔冬のスケッチ〕」の第四二葉にも、「あかきひのきのかなたより／エステルのくもわきたてば／はるのはむしらをどりいで」とあった。これを歌詞とした楽曲が女学校から聞こえてきたのだとすると、賢治が作った詩に嘉藤治が曲を付けて歌わせていたということになろう。ただ、そうした事実があったという記録は見つかっていない。佐藤泰平（後掲）は、「女学校時代に藤原先生から習った歌のすべてを、今でも歌えるという大原さん」と話をしたというが、本作に登場する歌詞についての証言を聞き出せていない。もしも賢治と嘉藤治によるオリジナル曲であれば、当時の生徒たちももっとはっきりと記憶していたと思われることから、実際に女学校で歌われたことはなかったのだろう。ただ、藤原嘉藤治（後掲）は「ある晩、花巻女学校で音楽室に電灯がなかった頃、ピアノをひいていたら、賢治がのこのこ入って来た。そして「おれが詩を朗読するからお前はピアノをひけ」と言うのだ。とってもおれの腕では即興的にひけない。そこで、とうとうことわった。がそれでもやった。なかなか気分も出ないし困ったが、どんどんやった」。「おれは、夢中で、じゃがじゃがとした」といった思い出を語っているので、詩と音楽のセッションのようなものは、何度か経験していたようだ。こうした体験や虚構を交ぜながら書いているのだろう。

二、あかつちいけにかゞまりて、　「〔冬のスケッチ〕」の第三九葉に、「ねばつちいけにからす居て／からだ折りまげ水のめり」とある。赤田秀子（後掲）は、定稿に書かれた「一」や「二」をどう読めばいいのかについて、①「いちばん、あかきひのきの〜〜」と読まれること、②「いち、あかきひのきの〜〜」と読まれること、③漢数字は読まないでおくこと、の三つについて考えているが、明解な答は出ていない。赤田は①のように、「いちばん」、「にばん」と朗々と演劇的に読むことを提案している。ただ、音数の関係から言うと、賢治は読ませないつもりでいたのではないかと思う。では、何のためにこれがあるのかと言えば、嘉莵治のピアノに合わせて歌われたものだということを感じさせるためであると思う。というのも、この漢数字が記されていなければ、春の情景を詠みこんだ詩句だと解されたと思われるからである。女学校のあたりを通りかかった時に、

ちょうど季節にふさわしい歌が流れてきたということ示すために、このような方法が取られたのだろう。

灰まきびと　桐畑に肥料として灰を撒く人がいたのだろう。藤原（後掲）が、「とにかく。灰が原始的ないちばんの肥料」としているとおり。「農家の自給カリ肥料としては、灰がほとんど唯一ともいえ、おもに畑作（定畑）に使われ、元肥や追肥、あるいは播種に灰と下肥、堆肥等を混ぜ、さらに種子を混ぜ合わせて行う所も多い」（『日本大百科全書』）ともいう。「未定稿」の「〔洪積の台のはてなる〕」にも、「洪積の台のはてなる／一ひらの赤き粘土地／桐の群白くひかれど／枝しげくたけ低ければ／鍛冶町の米屋五助は／今日も来て灰を与へぬ」という似た状況が書かれている。農学校から崖を降りたところには農学校の実習地があったので、農学校の教員か生徒なのかもしれない。吉見正信（後掲）は賢治本人ではないかという。

ひらめきて　赤田秀子（後掲）は、「見え隠れしていた人」とする。ここでは、ソプラノのひどさが「ゆふべの雲にうちふるひ」、また、「灰まきびとはひらめ」いたのだと解するため、おどろきあわてた（ように見えた）という意味に取っておきたい。

評釈

黄罫（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿（タイトルは「女学校附近」。鉛筆で⑮）、定稿用紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし。下書稿に手入れはなく、定稿にも表記方法以外はほとんど変化なく受け継がれている。

挿入される歌曲の歌詞（一、）の「あかきひのきのさなかより」については、「一百篇」の「四時」や「未定稿」の「〔雲を濾し〕」、「〔冬のスケッチ〕」の第四二葉に類似のものがあり、歌詞（二、）の「あかつちいけにかゞまりて」も「〔冬のスケッチ〕」の第三九葉に類似のものがある。

関連作品の「四時」は、「一百篇」において本作の次に配置されたものであり、どちらも移転前の稗貫農学校（岩手軽便鉄道の鳥谷ヶ崎駅周辺）を舞台としていることから、連作的なものだと考えてよいように思う。

この他にも、語注に書いたように「未定稿」の「〔洪積の台のはてなる〕」をはじめ、「〔冬のスケッチ〕」の第十七葉、二三葉、三一葉、四一葉などに類似した詩句を見つけることができる。ただし、舞台や季節が一致（または類似）しているためかもしれないので指摘するだけにとどめたい。

さて、当時の花巻の事情に詳しい佐藤勝治（後掲Ａ）は、作品の舞台周辺について、次のように書いている。

　稗貫農学校の前の細い道路をへだてて稗貫郡役所があり、この道路を奥（北）へ行くと一〇〇米程で女学校の褐色の板塀につきあたるが、道は右手に一寸曲ってすぐに又北に向っている。この曲り角の更に右手（東側）に桐の木畠があった（当時の農学校勤務者の証言。いまは隔離舎が建っている）このあたりから道は急に坂道（じつは崖道）となって下の半地（田圃と畠）におりる。旧城址つゞきの高台から降りたのである。女学校は高台の北端に立っている。

また、『新校本全集5』の「補遺詩篇Ｉ」に「告白」として収められた断片に、「雪がざらざら降ってゐる。／ひのきが枝をゆるがしてゐる。／郡役所の焼柵の」とあることなどから、このあたりにヒノキがあったのも確かなようだ。

県立花巻高等女学校と郡立の稗貫農学校の当時の状況については、佐藤泰平（後掲）が引用する「花巻南高新聞・五十周年特集号」（昭和三十五年十月二十一日）が参考になる。

　藤原先生と宮沢先生はいつもお互いに行き来し、校庭を散歩しながら話し合ったり、また音楽室からピアノの音や歌う声が流

れてきたりしていました。どうして宮沢先生は音楽室に来るのだろうと、わたしたちはよくうわさしていたものです。

（女学校卒業生たち）

今の共立病院場所に藁葺屋根の農学校がありました。女学校の塀からのぞけば校舎は目のあたり、寄宿舎の茶目っ子連中、この塀から首っこだけ出しては引っこめ。引っこんでは出しして農学校の悪口歌を歌って、からかったのも罪のない思い出。作詞作曲は誰だったのでしょう？ 遂に先生のお目玉頂戴。次にその歌を紹介して思い出の一こまを記します。（農学校の周囲は桑畑でした）

「桑っこ大学　鍬かつぎ
ぶっかれ下駄こにババ服こ
それでも桑っこ大学と
意張ったもんだよ　アッハッハ。」

（柴田キヨ　第十回卒業生）

ところで、「つたなきソプラノ」とは誰の声だったのだろうか。これについてはさまざまに検討されてきたので、時代順に考えてみたい。

まず、藤原嘉藤治（後掲）は、花巻高女の教諭心得だった菊池ふみ子が歌っているのだとする。吉見正信（後掲）も、それを受けるが、佐藤勝治（後掲Ａ）は、生徒に歌わせているのだとする。佐藤泰平（後掲）は、菊池ふみ子の赴任は、稗貫農学校が移転して高等女学校と離れた後の大正十四年四月で、また彼女の声がアルトであったことから、藤原嘉藤治の証言は記憶違いだろうとし、女学校の音楽会の時、あるいは音楽室から聞えてきた女生徒の歌声であろうとする。赤田秀子（後掲）は、「賢治のこの詩の断片を藤原が作曲して、生徒達に歌わせたというような証言もないことから、おそらく虚構も入り混ぜて成立した作品であろう」とする。

ソプラノの声の主は、花巻高女（定稿にタイトルはないが、下書稿には「女学校附近」とあった）の生徒と考えるのが最も無難であるように思うが、赤田のいうように虚構が入り交じっていたり、いくつかの経験を合成している可能性も低くない。

ただ、嘉藤治のピアノに合わせて、賢治が即興的に歌詞を口ずさんだという可能性も考えてよいかもしれない。

嘉藤治が弾いているのは、女子生徒に歌わせるための曲なのでソプラノの音域だが、賢治の歌声は森荘已池（後掲）によれば「バリトンに近い」ので、必然的に「つたなきソプラノ」になってしまったとは考えられないだろうか。最終行では、「灰まきびと」が「ひらめきて」桐畑から出てくるが、男性によるソプラノの奇妙な歌声を怪しんで、畑から出てきたのだということになれば諧謔味も出てこよう。もちろん他の解釈も十分に可能だが、いずれにしても「女学校附近」の華やいだ雰囲気、すなわちピアノの音が流れ、歌声が聞こえてくるといった明るく近代的な風景を描こうとした作品ではないかと思う。

先行研究

藤原嘉藤治・森荘已池「回想の賢治」（「北流８」岩手教育会館　昭和四十九年十月）
吉見正信「われはこれ塔建つるもの」（『宮沢賢治の道程』八重岳書房　昭和五十七年二月）
佐藤勝治Ａ「藤原嘉藤治との膠漆の交わり　スケッチ大正十一年説の決定打」（『宮沢賢治青春の秘唱〝冬のスケッチ〟研究』十字屋書店　昭和五十九年四月）
佐藤泰平「ピアノぽろろと弾きたれば　賢治と嘉藤治のかかわり」（『セロを弾く賢治と嘉藤治』洋々社　昭和六十年三月）
佐藤勝治Ｂ「賢治随想（二）」（「やさしい研究賢治文学のよろこび２」寂光林　昭和六十二年十月）
赤田秀子「文語詩を読む　その５　声に出してどう読むか？」（「「天

狗茸 けとばし了へば」を中心に」 「ワルトラワラ16」 ワルトラワラの会 平成十四年六月）

沢口たまみ「シグナルの恋」（『宮沢賢治 愛のうた』 盛岡出版コミュニティー 平成二十二年四月）

72 四時

①時しも岩手軽鉄の、　待合室の古時計、
　つまづきながら四時うてば、　助役たばこを吸ひやめぬ。

②時しも赭きひのきより、　農学生ら奔せいでて、
　雪の紳士のはなづらに、　雪のつぶてをなげにけり。

③時しも土手のかなたなる、　郡役所には議員たち、
　視察の件を可決して、　はたはたと手をうちにけり。

④時しも老いし小使は、　豚にえさかふバケツして、
　農学校の窓下を、　足なづみつゝ過ぎしなれ。

大意

時しも岩手軽便鉄道の、　待合室にある古時計が、
つまづきながら四時を知らせると、　助役はそれを合図に煙草の火を消した。

時しも赤いヒノキの木の間から、　農学校の生徒たちが走り出してくると、
雪だるまの鼻さきに、　雪玉を投げつけた。

時しも土手の彼方にある、　郡役所では議員たちが、
視察の案件を可決して、　パチパチと手をたたいていた。

時しも老いたる農学校の小使は、　豚のエサの入ったバケツを持って、
農学校の窓の下を、　歩きにくそうにしながら過ぎていった。

モチーフ

賢治が勤務していた稗貫農学校附近の「四時」の様子。はじめは農学校の中だけを描くつもりが、岩手軽便鉄道の鳥谷ヶ崎駅の待合室や稗貫郡役所の様子まで描くこととなり、視野がパノラマ風に広がっている。本作の直前に配列された「〔塀のかなたに嘉莵治かも〕」は、花巻高等女学校とその周辺を描くものだったが、本作では鳥谷ヶ崎駅、稗貫農学校、郡役所というように女学校以外を描いていることからも、連作的に書かれた可能性が強いと思う。

語注

四時　小野隆祥（後掲）や佐藤清（後掲）が指摘するように、大正時代の官庁の終業時間は午後四時であった。「大正十一年閣令第六号（官庁執務時間並休暇ニ関スル件）」（七月四日閣令第六号）には、「官庁ノ執務時間ハ休日及ビ休暇日ヲ除キ午前九時ヨリ午後四時迄トシ土曜日ハ午後三時迄トス但シ七月十一日ヨリ九月十日迄ハ午前八時ヨリ午後三時迄トシ土曜日ハ午十二時迄トス」とあった。この時代の人にとって四時は象徴的な時間であったのだろう。

岩手軽鉄　花巻駅から仙人峠駅まで運行していた岩手軽便鉄道のこと。鳥谷ヶ崎駅は始発の花巻駅の次の駅で、稗貫農学校や郡役所、花巻高等女学校、裁判所などがあった。

雪の紳士　下書稿㈠に「教師まがひの雪紳士(スノーマン)に」とあることから、教員に擬した雪だるまを作り、それにむかって生徒たちは雪玉を投げつけていたのだろう。

郡役所　稗貫郡役所。大正十五年六月まで鳥谷ヶ崎駅前にあった。稗貫農学校はすぐその向かい、花巻高等女学校は隣にあった。ただし郡制は大正十二年四月に廃止されている。

豚　『新校本全集16（下）補遺・資料 補遺・伝記資料篇』には、「岩手県稗貫農学校校舎之図」が掲載されており、北西側の隅には「豚舎」が示されている。佐藤清（後掲）は、「当時豚は飼育されていなかったので、後年の農学校時代との合成である」とするが、「照井謹二郎の話によると、雪の降る時期に畠山校長が校舎北側の農舎前で柄の長いマサカリを持って豚を殺すのを見た」とも書いている。照井が入学したのは大正十年四月で、卒業したのが大正十二年三月なので、本作の舞台となる稗貫農学校で入学・卒業したことになる（花巻農学校に改称されて移転したのは大正十二年四月）。また、照井は「大正十一年の冬だったと思うが、私が二年の時、農学校でブタをバラしたことがあった」（「フランドン農学校の豚」『２０１人の証言　啄木・賢治・光太郎』読売新聞盛岡支局　昭和五十一年六月）とも書いているので、大正十一年度の冬に稗貫農学校で豚を飼っていたことは確実だ。もっとも文語詩は、いくつかの経験を合成したり、虚構を取り入れることもあったので、あまりモデルにこだわり過ぎるのも問題だろう。

評釈

黄罫（26０行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈠（藍インクで㋐）、その余白に書かれた下書稿㈡、その裏面に書かれた下書稿㈢（鉛筆で㊢）、定稿用紙に書かれた定稿の四種が現存。生前発表なし。

下書稿㈠の手入れ段階には「赤きひのきのかなたより／春の羽虫らおどり出づ」とあったが、「一百篇」の「〔塀のかなたに嘉莵治かも〕」や、「未定稿」の「〔雲を濾し〕」にも類似した詩句が登場する。これは「〔冬のスケッチ〕」の第四十二葉に原形があり、これらは全て関連作品だということになろう。なお、『新校本全集』では、「〔冬のスケッチ〕」の第四十二葉を、連続する四十三葉と一緒に「未定稿」の「〔雲を濾し〕」と「一百篇」の「酸虹」の先行作品だとしている。本作や「〔塀のかなたに嘉莵治かも〕」も含めて、複雑に絡み合いながら発展・成立しているようだ。

また、『新校本全集』には指摘がないが、本作の下書稿㈠の手入れ段階には「このとき広き肩なして／校長門を入り来り／ゆるゝひのきのかなたをば」とあったが、これは「〔冬のスケッチ〕」の第三十一葉にある「たまゆらにひのきゆらげば／校長の広き肩はゞ／茶羅沙をくすぼらし門を出づ」が原形であろう。ただし、この手入れ案は下書稿㈡に採用されることはなく、「未定稿」の「職員室」の方に採用されている（これについては『新校本全集』でも指摘されている）。

さて、下書稿㈠から見ていきたい。ここでは農学校の放課後の様子を描こうとしていたようだ。

ひのき茶いろにゆらぎつゝ
つめたきくれのちかづけば
寄宿舎生ら出で来り
教師まがひの雪紳士（スノーマン）に
雪のつぶてをなげたれば
ほのかに雪のけぶりはあがり
雲の剥げは黄にひかりけり

下書稿㈠の手入れでは、次のように改変される。

ひのき茶いろにゆらぎつゝ
時計つめたく四時うてば
泳ぐがごときかたちして
寄宿舎生ら出で来り
雪の紳士の鼻づらに

つぶてをしげになげたれば
ほのかに白きけぶりはあがり
雲の剥げは黄にひかりけり
豚に飼をばやらんとて
老ひし仕丁の足なづみ
バケツをさげて過ぎ行けば
赤きひのきのかなたより
春の羽虫らおどり出づ

また、手入れの段階では「このとき広き肩なして／校長門を入り来り／ゆるゝひのきのかなたをば」と挿入しようとする案もあった。いずれにせよ、この手入れ段階で、元気でやんちゃな生徒たちだけでなく、農学校の「四時」をパノラマ風に描こうという意図が生まれてきたようだ。

佐藤清（後掲）は、「つめたきくれのちかづけば」という詩句から年末のことだとするが、手入れ段階ではこれを削除して、「時計つめたく四時うてば」としており、また、「春の羽虫らおどり出づ」を挿入していることから、「春」と「雪」が同時に成立する三月か四月あたりとすべきで、「くれ」とは日暮れ時のことを指しているのだと思われる。

下書稿㈡の余白には、「〔清原佐藤→高橋二人〕」というメモが残っている。農学校の生徒で、佐藤や高橋については、同姓の者がいるので特定できないが、清原姓は賢治の在職中は一人しかいない。花巻農学校の第三期生で、大正十一年四月に入学した清原繁雄である。稗貫農学校は大正十二年四月に花巻農学校に改称され、鳥谷ヶ崎から若葉町に移転するので、大正十一年四月頃か、大正十二年の二～三月頃がイメージされているのだろう。

下書稿㈢では、「宿直室の古時計／つまづきながら四時うてば」とあったものが、「時しも岩手軽鉄の／待合室の古時計／つまづきながら四時うてば」に書き換えられている。さらに③として新しい連を組み込む指示をして「このとき土手のかなたなる／郡役所には議員たち／視察の件を可決して／はたはたと手をうちてあり」と書いている。㊢印はこの稿の段階で付けられており、そのまま定稿につながっている。「〔冬のスケッチ〕」の第四三葉には次のようにあるので、イメージはこのあたりから持って来たのだと思う。

かぜのうつろのぼやけた黄いろ
かれ草とはりがね、　郡役所
ひるのつめたいうつろのなかに
あめそゝぎ出でひのきはみだるる。
（まことこの時心象のそらの計器は
　十二気圧をしめしたり。）
※
よくも雲を濾し
あかるくなりし空かな。
うつろの呆けし黄はちらけ
子供ら歓呼せり。

ところで、先述のとおり本作には関連作品が多数あるが、中でも「一百篇」の「〔塀のかなたに嘉菟治かも〕」との関係は特別なものであったと思う。というのも、「〔塀のかなたに嘉菟治かも〕」が本作の直前に収められているからである。

「〔塀のかなたに嘉菟治かも〕」は、下書稿が一種あるのみで、その最初のものに㊢（定稿に書き写す直前）が付されている。もちろんそれ以前の下書稿が失われたのかもしれないので、これ以前の原稿が存在しなかったと断定することはできない。ただ、「四時」で農学校の様子について推敲していくうちに、鳥谷ヶ崎駅や郡役所のことにも触れておきたくなった賢治が、同じ地区にあった花巻高等女学校についても書き留めておきたくなったという可

能性は十分にあるだろう。

「四時」の下書稿㈢では、岩手軽鉄や郡役所について書き加えているが、その段階の原稿に同じ筆記用具による㊢があることから考えても、おそらく同じころに㊢の付せられた「〔塀のかなたに嘉莵治かも〕」を書いた可能性は高いように思う。ことに両詩で鳥谷ヶ先駅近辺が描かれていながら、共通して登場する施設がないことも、この推測を裏付けてくれよう。

このような例は、「五十篇」の「〔翔けりゆく冬のフエノール〕」と「退職技手」、「〔氷柱かゞやく窓のべに〕」と「来賓」にも見られる（信時哲郎『宮沢賢治「文語詩稿 五十篇」評釈』 平成二十二年十二月 朝文社）。しかも、その際には、「いずれも新しく挿し込まれたと思われる稿が「前」に位置している。賢治のクセとして、文語詩稿の成立を解くための一つの手がかりになるかもしれない」（「退職技師」の稿 前掲書）としたが、「一百篇」における「〔塀のかなたに嘉莵治かも〕」と「四時」についても同じことが言えそうだ。

賢治は「四時」において、農学校や駅、郡役所といった男の世界を描き、「〔塀のかなたに嘉莵治かも〕」では、「女学校附近」というタイトル案があったことからもわかるように、女の世界を描き分けようとしたのだと考えることもできるかもしれない。もっとも「〔塀のかなたに嘉莵治かも〕」では、「評釈」にも書いたように、実際には女性が一人も登場していなかった可能性もあるし、一種類しかない下書稿には、「一字の手直しもない」（『新校本全集』）というあたりには、まだまだ複雑な過程があったのかもしれない。ただ、少なくとも現存する資料から考える限りは、こうして考えることも許されるのではないかと思う。

先行研究

吉見正信「〔われはこれ塔建つるもの〕」（『宮沢賢治の道程』 八重岳書房 昭和五十七年二月）

小野隆祥「問題の発端 成立期の探究」（『宮沢賢治 冬の青春』洋々社 昭和五十七年十二月）

佐藤勝治「スケッチ第四二・四三葉と文語詩三篇の相関々係 字句に依らず事実関係によるべきこと」（『宮沢賢治青春の秘唱〝冬のスケッチ〟研究』 十字屋書店 昭和五十九年四月）

島田隆輔「冬のスケッチ散佚稿／《文語詩稿》への過程から迫る試み」「島大国文26」 島大国文会 平成十年二月）

佐藤清「四時」（『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』 柏プラーノ 平成十二年九月）